

JOURNAL OF MONGOLIAN STUDIES

モンゴル研究

No. 24

論 文

D・ナツァグドルジの手稿「黒い岩」のデジタル解析 芝山 豊

アルホルチン旗におけるモンゴル族と満洲族のオボー崇拜 サインチョクト

エンフバヤル政権の性格

—2000～2004年—

村井宗行

内モンゴル・モンゴル族社会の変容（下）

—中国・統治システムからの考察—

土井一寛

調査報告

第3ホローの住民運動と「ジェンダーセンター」2007 今岡良子

会員のページ

私のモンゴル滞在記

—帰国後半年で見えてきたこと—

大野暢子

モンゴル研究会

大阪
2007

D・ナツァグドルジの手稿「黒い岩」のデジタル解析

芝 山 豊

はじめに

小論は、ダシドルジーン・ナツァグドルジ(1906-1937)の手稿 *Kharankhui Khad*(「黒い岩」)のデジタル化とコンピュータによる解析の結果を報告するものである。併せて、手稿のデジタル化がモンゴル現代文学のテキスト批判に有効な方法であることを示し、モンゴルの貴重な文化財である現代文学の手稿に差し迫った散逸や消滅の危険を回避し、研究を深化させるためには、デジタル化が不可欠であることを訴えるものである。

尚、小論は、2006年8月、ウランバートルで行われた第9回国際モンゴル学会議における英語口頭発表を基にしているが¹⁾、日本語での文章化にあたり、発表後の知見を若干付加した。

I 手稿「黒い岩」

D・ナツァグドルジの短編小説「黒い岩」は、作家がヨーロッパから帰国後、本格的な創作活動に入った時期に書かれた短編小説の一つである。最初は1930年に書かれ、1930年代、死の直前まで数度にわたって手を入れたものと考えられる。エドガー・アラン・ポオの影響下に書かれたとも言われ、モンゴル文学史上最初の一人称人称代名詞による語りを用いた画期的な作品である。その文学史上の特質にもかかわらず、テキストの定本化には多くの問題がある。

1935年、1945年の作品集には掲載されず、

1955年版『ナツァグドルジ選集』、1961年版『作品集』、1996年版『全集』、2004年版『選集』、2006年版3巻本『全集』に収録されている。

テキストの普及に最も大きな影響をもったのは1961年版の選集である。1961版と1955年版の異同は既に手稿研究の重要性を示すものであったが、手稿が自由な研究対象となるのには時間がかった。1970年代後半に新たな手稿研究が開始され、1980年代には、1961年版が手稿の結末部分を省略したものであることが明らかにされた。

1996年版以降の「全集」は1980年代以降の手稿研究の成果を基に出版されたものである。結果として、出版物の中には、相反する2種類の結末をもつ3種類のテキストと、「黒い岩」から派生したもう一つの物語のテキストが存在する²⁾。

手稿は1988年に一度、不完全な形で出版されているが、不鮮明なファクシミリ版では手稿の実体を伝えることはできなかった³⁾。

2006年、ナツァグドルジ生誕100周年にあたり3巻本の全集が発行された。キリル文字による作品と資料集に続く3巻目は、*Д.Нацагдоржийн гар бичмэлийн цахим хуулбар*と題された手稿による作品集となっている⁴⁾。この画期的な手稿作品集は、1988年のファクシミリ版とは比較にならない上質なもののだが、残念ながら、モノクロ印刷であり、手稿研究の材料としては十分とは言えない。

何故なら、図1に示すように、この手稿には、色調の異なる、少なくとも6種類以上(黒インク、黒鉛筆、赤インク、赤鉛筆、青インク、青鉛筆、)

図1

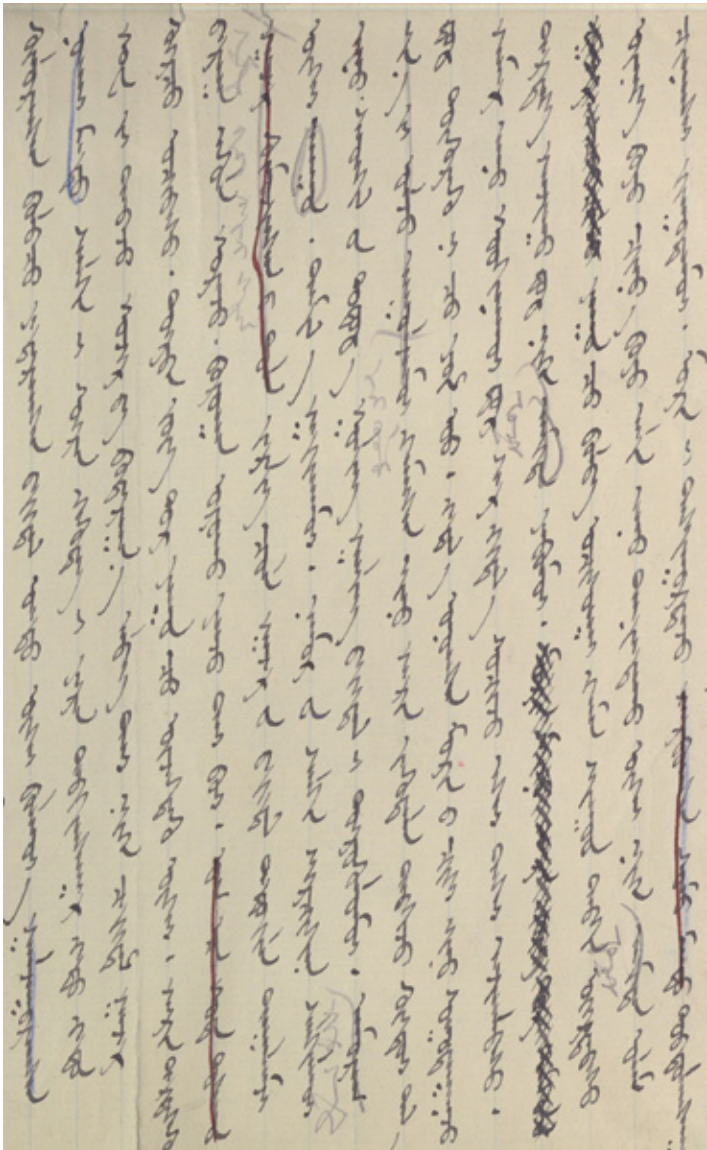


図2

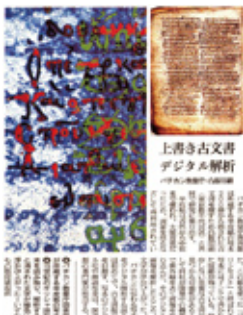


図3

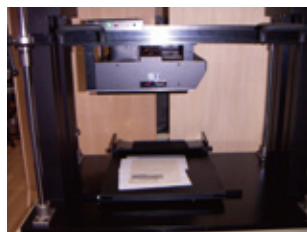


図4

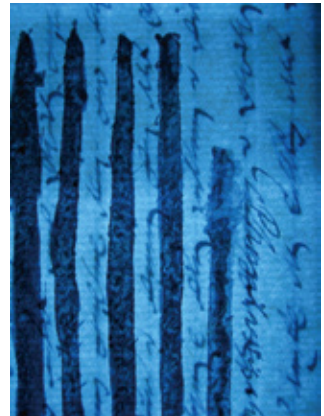


図5

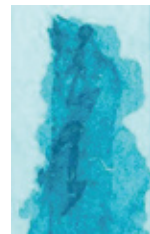


図8

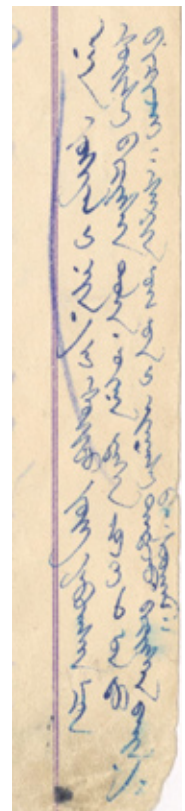


図6

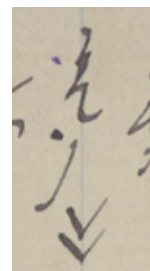
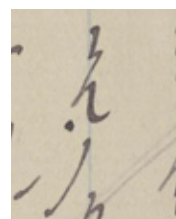


図7



の筆記用具による加筆訂正があるからである。

手稿の精緻な研究のためには、モンゴル国立科学アカデミー言語文学研究所に保管されている手稿オリジナルを検討することが必要である。

加えて、手稿最終頁の末尾には黒く塗りつぶされた7行の削除箇所がある。この7行については、「削除部分は小説の一部か」、「削除は作家自身によるものか」、「作家本人でなければ、誰が何の目的で削除を行ったのか」等々の様々な議論を呼んできた。1980年代からモンゴルの研究者の一部には、削除部分を復元することができれば、この作品の真実の姿に迫れるのではないかという期待が生まれていた。そして、その期待は、日本の高度な科学技術へと向けられたのである。

II 紫外線蛍光スキャンとデジタル解析

手稿研究の意義が明らかになり、資料独占といった問題が完全になくなったとしても、多くの研究者が長時間オリジナルの手稿にアクセスすることはできない。

同じモンゴルの文化財でも、17世紀の古文書などと違い、近現代の文学作品は歴史に耐え得るような用紙に書かれていない。しかも、手稿は湿度管理など全くなされていない粗末なロッカーに保存されており、常に散逸、消滅の危機に晒されている。

ナツァグドルジの手稿研究をさらに深化させるためには、手稿を汚損の危険に晒すことなく、丹念に検討し、さらに、失われた部分を復元することのできる最も効果的な方法を考えねばならなかった。

この課題への大きなヒントとなったのはヴァチカン教皇庁図書館の「パリンプセスト・プロジェクト」であった。

パリンプセスト(Palimpsest)とは、何度か上書きされた羊皮紙(特殊処理された動物の皮)の

写本のことである。紙がまだ普及していない時代、西洋では羊皮紙が一般的に使われていたが、羊皮紙は作るのに複雑な工程を要するため、時には同じ重さの金と交換されるほど高価なものであったという。そのため不要となった文字を洗い流したり削ったりしてから新しい文書を上書きしていた。表面の文書とは別の重要な古文書が肉眼では見えない部分に隠されている可能性がある。プロジェクトは、最新の紫外線スキャン技術とコンピュータ解析技術を駆使して、パリンプセストに隠された文字を読み解こうとするものであった。

この方法により、図2の朝日新聞記事(2005年3月2日1面)の左側の写真が示す通り、削り取られたはずの文字が鮮やかに浮かび上がり、プロジェクトは大きな成果をあげた。

このプロジェクトはヴァチカンと日本の凸版印刷株式会社が共同で行ったものである。幸い、このプロジェクトでも使用された紫外線蛍光スキャナの開発に計画当初から携わった長野県内のベンチャー企業、アイメジャー代表の一ノ瀬修一氏の協力を得ることができた。ナツァグドルジ手稿の模擬サンプルを作製して、一ノ瀬氏の開発した紫外線蛍光イメージスキャナ、FLSCANを用いて、予備実験を行うことにした。

模擬サンプルによる予備実験は以下のような手順で行った。

まず、藁半紙に4種類のインクで文字を記入して1週間放置。その後、書いた文字を塗りつぶし、目視では判読不可能であることを確かめ、通常のイメージスキャナと紫外線蛍光イメージスキャナで画像を取り込み、コンピュータで画像処理して、コントラストを向上させた。

この実験の結果、従来、復元が不可能と思われていた黒い文字を黒いインクや墨汁で消した場合でも、条件によっては、元の文字がパリンプセストの場合同様に浮かび上がることが判明した。

長野での模擬サンプル予備実験の成果をもと

に、ウランバートルのモンゴル国立科学アカデミー言語文学研究所と交渉、実際の手稿を用いてデータを取得して解析を行うことが決まった。

しかし、2005年夏、実際にスキャナをウランバートルに持ち込んでみると、科学アカデミー言語文化研究所の電気設備は老朽化しており、コンピュータとスキャナに電源供給することすらままならない状態で、取得データの信頼性に問題が生じることとなった。

そこで、2006年の春、科学アカデミー言語文学研究所所長 Kh. サンビルデンデブ博士を東京に招き、ヴァチカンで用いられたものとほぼ同様の装置を使用して、紫外線蛍光スキャンを行い、あわせて、他の方法も試みることにした。

実験に使用した紫外線蛍光スキャナは、通常、厚みのある本に対応するように設定されているが、今回は図3のような設定で使用した。可視光については、通常のフラットベッド式のスキャナを使用し、紫外線反射と透過、赤外線反射と透過、可視光反射と透過の各データ取得後、コンピュータ解析と目視による判別を行った。

III 実験の結果

残念ながら、「黒い岩」の紫外線蛍光スキャンからだけではヴァチカンの羊皮紙のような劇的な成果を得ることはできなかった。

しかし、この実験を通して、幾つかの貴重な発見があった。

ひとつは、末尾7行の塗りつぶし箇所 성격が浮き彫りとなったことである。

塗りつぶしは、一度ではなく2回以上、数度にわたって文字に沿って完全に文字が読めなくなるまで執拗に行われたことが証明された。

こうした塗りつぶしによる削除の方法は「黒い岩」の中では、この箇所以外には見られない。この注意深い塗りつぶしは単に推敲や校正のために

行われたのではなく、この箇所を一切人目に触れさせないようにする何らかの必要があって行われたと考えるべきであろう。

誰がいかなる理由でそれを行ったかについて議論するのは尚早である。

まず、塗りつぶしを行った人物が意図的に残した最後の1行に注目せねばならない。この部分には、ドイツ語で *Phantastische erzählung* (Novelle) と書かれている。

つまり、塗りつぶしの箇所は小説本文の一部をなすものではなく、小説に関するコメント部分である可能性が高い。他の手稿の塗りつぶし部分も多く、作品の一部ではなくコメント部分と推定される部分である。また、ナツアグドルジ手稿の一部では、コメントは作家本人以外によって書きこまれていることがまある。

まず、この7行が誰によって書かれたのかをはっきりさせる必要がある。

幸い、図4に示した、塗りつぶし部分の透過スキャンのデータによって、紙の表裏両面を使用している手稿の当該部分では、裏面に書かれた文字と表面の行が重なっていないことが確かめられた。

塗りつぶしと文字部分には微妙な濃淡の差があり、デジタル画像のRGBのヒストグラムを調整することによって、文字の一部をわずかながら判読することが可能である。例えば、図5に見られる、塗りつぶし部分7行目の行頭の語に注目すると、塗りつぶし部分からはみ出したモンゴル文字のハネの部分と文字の一部によって、筆跡を推定することができる。

結論として、削除部分も本文を書いた人物と同じ人物によって書かれたことはまず間違いない。

文字を書いたインクとほぼ同じ組成のインクで塗りつぶしが行われたとみられるが、そうしたことを根拠に、ナツアグドルジ自身が塗りつぶしを行ったとすることはできない。例えば、

「フォークロア」というタイトルをつけたナツァグドルジの手帳の中には、こうした塗りつぶしの削除箇所は一箇所も見られないのである。

また、デジタル画像の検討は新たな事実を明らかにした。それは、この作品のヒロインの名前に関する問題である。

作品の出版された各テキストには、ニーナとイーナという名前が使われている。このヒロインの名前は、作品が作家の実人生とどのような関係にあるかをめぐる論争とも関連している。

実際、奇妙なことに、手稿の中には、1人の登場人物に対して、ニーナとイーナの2種類の記述がある。図6に示す最初にニーナと書かれた1箇所を除いて、すべて、図7のようにイーナと書かれている。

ニーナと書かれている部分を見ると、モンゴル伝統文字でイとニを区別する点は、遠目には分からないが、青いインクでうたれているように見える。

これを同じく青いインクによって欄外に署名つきで書かれたソドノム氏の書き込みと同じものだととして、ソドノム氏による改竄であるとする説がある。

しかし、今回のデジタル画像によって、図8のソドノム氏の手稿欄外への書き込み部分と点の箇所を比較してみると、RGB、CMYKとも、それぞれの色の要素割合が一致しないことが判明した。

この事実は、イーナをニーナとする点の書き加えは、作品がニーナとの別れを経験した後に書かれたと主張するソドノム氏の書き込みと同時に行われたわけではないことを示している。既にニーナと書き直されていることを前提に、ソドノム氏の書き込みが行われた可能性も排除できない。

現段階では、「誰が、いつ、どのような意図で、点を書き加えてイーナをニーナに変更したのか」についての確実な答えはない。

今後、ナツァグドルジの筆跡に精通したモンゴル人研究者による解明を待たねばならない。しかし、そうした研究のためには、多くの研究者が直接手稿にアクセスする必要がある。極めてもろく壊れやすい状態にある手稿のデジタル化の重要性がまさにここにある。デジタル化された画像により、オリジナルの手稿が汚損されることなく、より多くの研究者に手稿の実像が共有されることで、研究は大いに深化するはずである。

我々が作成した手稿「黒い岩」のデジタル化データはモンゴル国立科学アカデミー言語文学研究所を通じて公開される予定である⁵⁾。

また、「黒い岩」だけでなく、ナツァグドルジの筆跡の見本帳とでも言うべき彼の手帳、「フォークロア」の高精度デジタル化データを取得し、日本の高度なカラー印刷製本技術によって、オリジナルとほとんど区別のつかない複製を製作する試みも行った⁶⁾。これを利用することにより、崩し字の解読、筆跡の鑑定などが容易になり、ナツァグドルジの手稿研究はさらに一步を進めることになる。

IV 手稿とデジタル化

ミシェル・フーコーが『作者とは何か』で語ったように、いま我々が文学であると考えたものが誰によって書かれようとか心の払われない時代がかつてあった。ナツァグドルジは、近代モンゴル文学史上初めての、テキストと作家の関係を問われ続ける、フーコーのいう「機能としての作者」であると言える。

2006年は大モンゴル800周年の記念の年であると同時に、「モンゴル近現代文学の父」ダシドルジーン・ナツァグドルジ生誕100周年でもあった。ウランバートルでは、「黒い岩」の名前を冠したシンポジウムを含め、幾つかの行事が行われた。また、同年12月、北京大学においても、「達・納楚

克道爾基誕辰100周年国際學術研討会」が開催された。中国国内各地のモンゴル族研究者、中国人研究者に加え、モンゴル国や日本からの研究者らも加わった学会は、ナツァグドルジという作家がモンゴル国の枠を超えて、モンゴル文学の中で占める位置の大きさを再確認させるものであった。

筆者はその席上、ナツァグドルジの伝記的な記述に際して、度々引用されてきた《Гэргий хүүхдээсээ хагацахуй》(「妻子と離れて」)と呼ばれている詩の手稿と彼の手帳「フォークロア」のデジタルデータを利用した発表を行い、以下のような事実を明らかにした⁷⁾。

公刊されたD・ナツァグドルジの印刷テキストすべてが、手稿の「???」といった破格の表現を、カノンの規範性の観点から改変していること。

詩が書かれたのはこれまで1936年とされてきたが、ナツァグドルジの手帳に書かれた数字の筆跡と比較してみると、手稿に書かれた年は1935と読むことが正しいこと。

1936年と読んだのは、ナツァグドルジの妻子との別れが1935年の末から1936年にかけてのことであったとする言説に合致させる意図によること。

書かれた時点では詩の題はなく、題は別人によって書かれたこと。

作家自身の筆跡による欄外コメントによれば、テーマは妻子との別離ではなかったこと。

北京での学会には、長年に亙り、D・ナツァグドルジの手稿研究に直接携わってきたS・ロチン氏、Ch・ジャチン氏もモンゴル国から招かれていた。ナツァグドルジの手稿の権威とされる両氏が外国人研究者である筆者の説に支持を表明してくれたことは、私的な感情とは別に、研究史的に意義深いことであると言える。

D・ナツァグドルジの手稿は、作家の死後、モンゴル国民文学のカノン形成過程の中で、長く、一般読者や研究者、そしてまた、作家自身からも

引き離されてきた。北京での経験は、そうした時代がもはや完全に終わったことを物語るものであった。

そうした状況のもとで、ナツァグドルジの手書きの作品がモンゴルの人々全体の宝であることは誰も否定し得ないであろう。しかし、一般に、活字出版後の作家、とりわけ現代作家の手書き草稿は、歴史的文化財としての保護の対象になりにくく、常に散逸や消滅の危険に晒されている。ナツァグドルジの場合も例外ではない。

モンゴル国立科学アカデミーに保管されている手稿をはじめ、個人が所蔵している手稿も危険な状況にある。乾燥地帯であるモンゴル国内の紙資料の保存環境は劣悪であり、とりわけ、中世からの文化財に比べて、近現代の紙資料は時間に耐える素材特性をもたず、またその重要性に関する共通理解が十分に形成されていないため、廃棄、汚損、消滅の恐れが高い。ナツァグドルジの原稿はペンや筆ばかりでなく、鉛筆、化学鉛筆で書かれているので、経年変化による消失も起こり得る。

湿度調整を完備した保存装置での保管への措置を急がねばならない。しかし、保存だけでは十分ではない。研究の深化のため、手稿や資料のデジタル化は、小論で示したようなデジタル解析の方法ばかりでなく、テキスト研究、間テキスト研究にとっても不可欠な課題であることを改めて強調しておきたい。

おわりに

最後に個人的な感慨を添えることをお許しいたきたい。

初めて「黒い岩」を読んだのが1973年。1987年にウランバートルで手稿の塗りつぶし箇所の写真を見てから、実際にオリジナルの手稿を肉眼で見るまでに7年、そこから手稿のデジタル復元作業にとりかかるまでに、さらに10年余りの歳月

が流れた。

顧みれば、「黒い岩」という短い小説に導かれての長い旅であった。その間、小説の主人公のように、謎の答えを求めて彷徨っていたような気がする。しかし、1961年版の「黒い岩」のように、いまだに謎は解けていない。1996年版の「黒い岩」の結末のように、求めたものに出会えるまで、臆することなく、旅を続けねばならないのかもしれない。

いずれにせよ、「黒い岩」への一里塚となった今回の手稿デジタル化の試みは、モンゴル、日本の、多くの方々のご協力のおかげで実現した。

モンゴル国立科学アカデミー言語文学研究所所長であったKh. サンピルデンデブ博士をはじめ、ブレブジャブ博士らスタッフ、アイメジャー有限会社の一ノ瀬修一氏、凸版印刷株式会社の加茂竜一氏、小室哲郎氏、高橋英一氏、モンゴル国立大学のD. ガルバートル教授、阿比留美帆氏、内田敦之氏、G. U. ナチンションホル博士、そして、お名前は挙げないが、モンゴル研究会と日本モンゴル文学会の仲間は勿論、長らく親交を結んで来た尊敬すべきモンゴル作家同盟のメンバーである友人たちへ、深甚の感謝を記しておきたい。

ただひとつ心残りなのは、2006年夏、ウランバートルでの国際学会の席上、固く約束したサンピルデンデブ先生との北京での再会が果たせなかったことである。

北京大学蒙古学研究中心のドラーン博士の尽力で盛況のうちに幕を閉じた記念学会の後、多くのナツァグドルジ研究者と宴の席に着いた。その席にあって、共同で出版するはずだったナツァグドルジの手帳「フォークロア」の精密な複製を肴に、サンピルデンデブ先生と杯を乾すことができればどんなによかったろうと思わずにはいらなかった。

2006年秋急逝されたサンピルデンデブ先生のご冥福を祈って拙文の筆を擱きたい。

註

- 1) Yutaka SHIBAYAMA “Digitalization of Natsagdorj’s *Kharankhui Khad*” (Paper presented at The Ninth International Congress of Mongolists Devoted to the 800th Anniversary of the Yeke Mongyol Ulus) Ulaanbaatar, 2006.
- 2) Ч. Жачин, *Зохиолын эх бичигт хийсэн ажиглалт тэмдэглэл*, УБ., 1987 が最初にこの問題を本格的に扱っている。Морь эрхээр одов と題される別の作品に書き直されているが、1996年版の全集では巻末解題部分の「黒い岩」の箇所に、全文を挙げている。
- 3) БНМУ ШУА -ийн хэл зохиол хүрээлэн, *Д. Нацагдоржийн гар бичмэл*, УБ., 1988.
- 4) 2006年に出版されたナツァグドルジの全集は3巻本の体裁で発行されたが、第1、第2巻と第3巻では、編者が異なっており、編集思想も違っている。手稿とナツァグドルジの写真類が収められた第3巻はKh. サンピルデンデブ、S. ロチン、Ch. ジャチン、A. オチルの各氏が編者になっており、キリル文字による作品テキストと文献資料を収めた第1、第2巻はD. ツェデブ氏の個人編集によるものである。この全集出版について、かねて関係者間の確執がとりざたされ、様々な風聞があったが、2006年9月11日付 *Зууны Мэдээ* 紙上にL. バルダン、Ch. ジャチン、S. ロチン、A. オチル、Kh. サンピルデンデブ5名の手稿研究に携わる学者の連名による、エンフトブシン文化教育科学大臣宛ての公開質問状が掲載された。
- 5) カラーでの手稿の公開は、2007年、モンゴル国のWEB上ヴァーチャル図書館であるE li-

brary (<http://www.elibrary.mn/>) で行われていることを確認している。その際の公開がどのような手続きによるものなのかは分からないが、公開されていたデータは解像度の低いJPEGファイルで、残念ながら、小論で示したようなデジタル解析を行えるようなものではない。

6) この複製見本は筆者が大日本法令印刷長野本社の瀬在崇史氏らの協力を得て作製し、2006年8月の第9回国際モンゴル学会議の席上、ジャチン博士によって世界の研究者に紹介された。

7) 「モンゴル文学におけるカノン形成とD・ナツアグドルジの手稿」(『經典解読達・納楚克道爾基紀念達・納楚克道爾基誕辰100周年国際学術研討会』、北京大学、2006年)。

参考文献

БНМУ ШУА -ийн хэл зохиол хүрээлэн,
Гар бичмэл Задгай Материал /22.5 x 27 cm
/ хавтас No.1 00517-00523
Д. Нацагдорж Зохиолын түүвэр , УБ. , 1955
Д. Нацагдорж Зохиолууд , УБ ., 1961
Дашдоржийн Нацагдорж Бүрэн түүвэр, УБ.,
1996

Дашдоржийн Нацагдорж Шилдэг бүтээлүүд,
УБ., 2004

Д. Нацагдорж Нацагдорж Бүрэн Зохиол 3, УБ.
2006

Балдан Л., *Оюн ухаанаараа сэтгэсэн ертөнцийг
бүтээсэн хүн* УБ., 2002

БНМУ ШУА -ийн хэл зохиол хүрээлэн, *Д.
Нацагдоржийн гар бичмэл* , УБ. , 1988

Жачин Ч., *Дашдоржийн Нацагдоржийн гар
бичгийн судалгаа* , УБ., 2006

Лочин С., *Д. Нацагдоржийн зохиолын эх
бичгийн судлалын асуудалд*, УБ., 1984

Очир А., Дашням Г., *Д. Нацагдорж: нийгэм,
улс төр, эрдэм судлалын үйлс, амидрал*, УБ.,
1996

Сампилдэндэв Х., *Монголын уран зохиолын
түүхийн зарим асуудал*, УБ., 1998

Содном Б., *Д. Нацагдоржийн намтар зохиол*
, УБ., 1966

岡田和行「ナツアグドルジの1932年の投獄と獄
中詩について」(『東京外国語大学論集』第72号、
2006年)

芝山豊「D・ナツアグドルジの評価をめぐっ
て」(『清泉女学院短期大学研究紀要』第17号、
1998年)、「D・ナツアグドルジ「黒い岩」をめぐっ
て」(『モンゴル研究』第22号、2005年)

(しばやま ゆたか)

アルホルチン旗におけるモンゴル族と 満洲族のオボー崇拜

サインチョクト

はじめに

ノトク(故郷)という言葉はモンゴル人の心に大きな響きをもたらす言葉であろう。モンゴル人の間で常に語られる「ノトクを命のように愛する」という言い方は、彼らの「ノトクに命がある」という自然観と深い関係があると思われる。モンゴル人にとって、自分たちの生活の舞台となる自然環境、つまり森林、草原、山水であるが、こうしたノトクにおける自然観はオボー崇拜にもっともよく表現されているのである。本稿は、モンゴル人のノトクにおける価値観を明らかにすることを目的とし、内モンゴル東部のアルホルチン旗におけるモンゴル族とモンゴル化した満洲族のオボー崇拜についての試論である。

モンゴル族の中の一部族であるホルチンは主に内モンゴル自治区の哲里木盟(Jirim aimag)、興安盟(Hinggan aimag)と赤峰市(Ulaanhad hot)に分布している。

アルホルチンはさらにその一部で、清朝初期の1546年に、大興安嶺の北、額爾古納(Ergune)河の流域から今の赤峰市のアルホルチン地域に移住してきた。アルホルチン部族はモンゴル族の伝統的な風俗習慣を保っていることが知られている。哲里木盟と興安盟に分布するホルチン部族はアルホルチン部族より百年前に当地に移住してきた。ホルチン部族はそのため長い間満洲族と隣接して暮らし、現在はほとんどの者が農業を生業としているが、アルホルチン部族は未だ定住型牧畜

生活を営んでいる。しかしアルホルチン・モンゴル族が満洲族と雑居し牧畜業を営んできたこともまた事実である。そのため満洲族と共通する文化を持つようになっている。そのような現状をふまえて、本稿ではアルホルチン旗におけるモンゴル族と満洲族が共有する文化的側面の一つであるオボー崇拜について比較文化論的視点から考察を行いたい。

まずアルホルチン旗の風俗習慣に関する先行研究を概観する。

アルホルチン旗出身の Huturang G-a 氏は長年アルホルチン旗で実地調査を行って、『アルホルチンの山水』(1997)という本を出版した。本書で氏は、アルホルチン旗の地名の由来、山水に関する伝説とオボー祀りに関する風俗習慣を記録している。また『アルホルチン旗誌』(1994)という著書では、アルホルチンの風俗習慣が住宅、服装、飲食、出産、婚姻、葬式、信仰、禁忌の各項目にわたって記述されている。また、Buyan-ulji 氏の整理した『アルホルチンの口承文学』(1986)もアルホルチン旗の風俗習慣の研究に貴重な資料を提供している。Buyan-ulji 氏は『アルホルチンの満洲族』(1992)で満洲族の氏族の由来を考察している。Damdinsureng 氏(満洲族)は『アルホルチン旗の sumu について』(1990)において、モンゴル族と満洲族の村が形成された経緯に触れている。しかし、アルホルチン旗におけるモンゴル族と満洲族のオボー祀りに関する先行研究は見られない。

2 アルホルチン旗の概要

現在中華人民共和国に属する内モンゴル自治区赤峰市(元昭烏達盟)のアルホルチン旗はモンゴル族、漢族、満洲族が雑居している牧畜旗である。アルホルチン旗は東経119°2'～120°1'、北緯43°23'～45°25'、大興安嶺山脈南部の東に位置し、旗面積は1万4千平方キロメートルである。地勢は西高東低で、総面積の26.44%が山地、丘陵は35.40%、平原は14.36%、砂漠は23.80%をそれぞれ占めている(『内蒙古自治区地図冊』—1996)。総面積の約80%を占める地域に10万人のモンゴル族が定住型牧畜生活をしており、その中に満洲族の村が三つある。そのうち2千人あまりの満洲族が定住型牧畜生活をしている。旗内の約20%の地域に17万人の漢民族が集中し、農耕に従事しているほか、また5千人あまりのモンゴル族が農耕を生業としている。

『アルホルチン旗誌』によると、アルホルチンとは「北の弓矢を持つ人々」という意味であり、チンギスハーンの弟ハサルを祖先とする部族である。アルホルチン旗を流れるハハリンゴル川(Qaharin gol)(長さ2552キロメートル)の名の由来はハサリンゴル(ハサルの川)である。1425年、呼倫貝爾盟(kulunbuir aimag)の北部を流れるエルグネ川(Ergune gol)流域に遊牧していたホルチン部族はオイラト部族に打ち破られ、一部のホルチンは、南の方へ移動していった。それが、後の哲里木盟のホルチンである。当地に残った一部のホルチンはアルホルチンと自称した。しかし1546年、ハサルの15代目の子孫であるフンデレンダイチンがアルホルチン部族を率いて現在の地域に移動した。

1630年、アルホルチン部族は清朝に帰順する。1636年、即ち清朝の崇徳元年、ムザン(満洲語)というモンゴル人がアルホルチン旗の王になり、

1642年清の皇帝の親族の女性と結婚した。1669年に二代目の旗王バダマも清の皇族の女性と結婚し、それをきっかけに一部の満洲族がアルホルチン旗に移住しはじめ、モンゴル族と雑居するようになったのである。

1669年、満洲族の官吏ウィフィズはアルホルチン・モンゴル族のオンドルナという女性と結婚して、男の子十人をもうけた。そのうち五人がラマ僧になったが、残りの五人はモンゴル女性と結婚し、各々が五つの部族の祖となった。長男はハラチル・アイマグ(黒石部族)の、次男はホヤルフトク・アイマグ(二つの井戸部族)の、三男はバルーンボラグ・アイマグ(西の泉部族)の、四男はズーンボラグ・アイマグ(東の泉)の、五男はズンドロット・アイマグ(東の丘陵部族)の祖となった。

五つの部族の一部はアルホルチン旗内部での移動を繰り返したが、ウンドルウラーン村、ボマンガル村、ファゲンタル村という三つの村に定住してきた。

彼らは部族間の通婚を厳禁し、族外婚を厳守してきた。当時は満洲族に税を課さなかったので、モンゴル族は彼らと婚姻関係を結び、姻戚になることを望んだ。満洲人女性の満洲服も美しいとされ、モンゴル族女性たちが満洲服を真似てモンゴル服を作ることもブームになった。

1690年、アルホルチン旗のタイジ(モンゴル貴族に対して清朝から与えられた称号)は300人の兵士を率いて清朝のためにオイラト部族のガルダンと戦い戦死したため、アルホルチン王は「ダラハン王(榮譽ある王)」という称号を与えられ、それ以降世襲が認められた。このためアルホルチン旗のモンゴル族と満洲族の関係は一段と密接になり、モンゴル族と満洲族の生活習慣は互いに影響しあってきた。

アルホルチン旗のモンゴル族はこの他漢民族の文化的影響を受けつつも、牧畜生活を保ってきたの

である。

3 モンゴル族のオボー

モンゴル人は自然への崇拜の念を込めてオボーを作った。

「モンゴル人は山、川、湖、樹、泉、日、月、天などを祀るためにオボーを建てる。したがって川のオボー、泉のオボー、日のオボー、月のオボー、天のオボーといろいろ作られている」(Sampilnorbu-1990: 82)と言われるようにその対象は様々であり、すべての自然物が祀られると言ってよい。オボーは「心霊のよりしろ」(江上波夫: 1961)とされ、オボーの下に何かを埋める。オボーの下に埋めるのは、そこに埋められた崇拝物に新しい命を与えるため、またはその命を甦らせるためであると言われている。

昔、オボーを建てる時まず土地を掘って、生きた人間を埋める風習があったという。埋められた人はそのオボーの主になったとされる。たとえば SulfungG-a は次のように述べている。「最初、バーリン旗のサイハンハン山を祀るとき、白い服を着て、白い馬に乗ったアルホルチン旗の若い力士がちょうどそこを通るのを見て、彼を掴まえて馬に乗ったままの姿でオボーの下に埋め山を祀った。その主は他の旗の人であったため、バーリン旗のモンゴル相撲の優勝者はときどきバーリン旗以外の旗の人になるのである」。(SulfungG-a-1987: 61-62)

この儀礼ではモンゴル相撲の優勝者が犠牲になっている。

また「オルドスのドガンというオボーの下に灰色の馬に乗った男を埋めた。その男は埋められるとき北西の方に向かって大きな声で笑った。灰色の馬も三回嘶いた。それからこの山の北西の方で家畜がよく繁殖するようになった」という伝説がある。人々の豊かな生活のためにこの男が神に捧

げられたと考えられる。

また、「ザルト旗のガンジョールというオボーの下に大蔵経を牛車に積んでいくラマをとらえて、大蔵経と一緒に埋めた」とある。(Nasun-1993: 101)。ここでは仏教を布教するラマが犠牲になっている。

このように生きた人間をオボーの下に埋める風習はほとんどのモンゴル地域にあった。同様の例は枚挙にいとまがない。

「ハルハのボグド山(聖なる山)のオボーの下にハイタカが埋められている。スニット旗のオボーの下に蛇が埋められている」(Cagan-1991: 61, 93)。

「ハンギン旗のハーギンオボーの下には羊の前足が埋められている」(Sonum, Aliy-a-1994: 110)。

後には、死者、動物、植物、日用品を埋めるようになった。「昔、ラバイというタイジが弟と二人で暮らしていた。ある日、ラバイ・タイジは精神病になった。弟は仕方がなく兄を山の洞穴に連れて行き食べ物と飲み物を与えたが、兄が凍死したので山を掘って兄を埋め、上にオボーを建てた。そして、毎月三日と旧暦五月十三日にそのオボーを祀ってきた。それが今のラバイ山である」(Nasun-1993: 102-103)。

「チンギス・ハーンはオルドスのボルトルゴイというところを通るときそこで持っていた鞭を落とした。しかし鞭を拾わなかった。私が死んだらここに埋葬してくださいと言って鞭を埋めさせた」(Sonum, Aliy-a-1994: 21)。ここで鞭を埋めることは人を埋葬する儀礼の象徴的行為になっている。

日常的に頻繁に使われる馬の頭、羊の前足などをオボーの下に埋める風習はもっと一般的である。ネズ、白檀などの植物をオボーの下に埋める例も多く見られる。

日、月、星、山、川、天などの自然崇拝物と崇

拝の対象となる人、動植物はオボーを祀る儀礼によって守護神になって、オボーに棲息していくものと考えられている。「埋められた守護神の命を甦らせるためにオボーの祀りが続けられてきた」(Sainchogt-1998: 420)のであろう。

オボーを建てるプロセスは、まず期日を決め、それを主催者が皆に知らせる。皆はオボーに供えるものなどを準備する。そして競走馬を選ぶ。オボーを祀る前日には場所を選んで印をつけ、ヨロール(祝詞)を詠む。そして翌朝からオボーを建てはじめる。石を拾って積み上げるのである。積み上げてからオボーに供え物をささげる。オボーを三回回り、聖化された馬の飾り物を代えてオボーのナーダムが始まる。最後にオボーに供えた食べ物をみんなで分けて食べる。オボー祭りに来なかった人の分を残して配る」(CaGan-1992: 78-80)。オボーを建てた場所は聖地となり、オボーは集団の共通の命になる。集団の人々は共に自分たちのオボーを祀っていると考え。オボーの供え物を必ず皆で分けて食べるのは神と共食するという行為であろう。

モンゴルのオボーは3、7、13の数から成るものが多い。中心以外のオボーをシャビ(弟子)オボーという」(Mansang-1990: 146-147)。つまり、モンゴルのオボーは一つの中心のオボーと2、6、12のシャビオボーからなるのが一般的である。それを「3、7、13のオボー」と呼ぶ。

要するに、モンゴルのオボーの本質はその鎮め物にある。つまりオボーは供え物の場である。その場を介して、人と超自然的な存在が交流する。オボーを祀る儀礼は集団の共通の命を甦らせるための行為である。オボーの供え物を神と人間が共食しなければならない。オボーをシャビオボーとともに3、7、13という数で建てるのは基本的な特徴である。この基本的な特徴は13の天神の恵みを受けることを良しとする天神に対するモンゴル人のシャマニズム的世界観を表していると言えよう。

4 アルホルチン旗におけるモンゴル族のノトクのオボー祀りと満洲族の墓祀り

アルホルチン旗におけるモンゴル族のオボー祀りは全モンゴル族の習慣と共通点を持っているが、異なる特徴もある。

「アルホルチン旗のハンオーラ山のオボーを建てる時、茶色の馬に乗った人を下に埋めたという。その人は茶色の馬に乗って鹿の群を飼っていた。だからこの山の守護神はときには鹿にも乗るという。ハンオーラ山の鹿を殺すことは厳しく禁じられていた。この禁忌のお陰でハンオーラ山の野生動物は非常に多かったという」(HuturangG-a-1986: 154-155)。「ザルト旗の王はハンオーラ山の禁忌を破って鹿を狩猟したので馬から落ちて死亡したという」(HuturangG-a-155-156)。鹿は北アジア諸民族の神話にトーチムとして登場する例が少なくないが、ここでは天神として禁忌の対象になっている。アルホルチン・モンゴル族の場合、このようなオボー崇拜が一般的であり、全てのモンゴル族のそれと共通するものである。

ただし、満洲族が入ってきて、モンゴル族と同じく牧畜生活をするようになってからはアルホルチン旗のモンゴル族がオボーを祀る目的は大きく変わってきた。アルホルチン旗のモンゴル族はゲル型のオボーを祀っている。それは満洲族の家型のオボーへの対抗であった。アルホルチン旗のダルハという村は満洲族の村と接している。村の人口の三分の一は満洲族である。満洲族が自分のお姫様のお墓に家を作って祀ったところ、ダルハ村のモンゴル族は自分のオボーをゲルの形に作って祀るようになったというのである。その背景には土地をめぐる、満洲・モンゴルの争いがあった。ダルハ村のゲル型のオボーはそれ故ノトクのシンボルになった。モンゴル語のノトク(nutug)と

という言葉は故郷を意味する。「ノトクのオボー」とは故郷のオボーである。モンゴル族にはノトクのオボーが少なかった。しかし、アルホルチン旗に満洲族が入ってきて、満洲・モンゴルの間に土地をめぐるトラブルが起こったことに起因してダルハ村の「ノトクのオボー」が建てられたのである。この問題を理解するためには満洲族の墓祀りを理解しなければならない。

満洲人には一族の女性の墓を祀る習慣がある。1669年、アルホルチン旗のバダマ・タイジと結婚したウェンチというゲゲ（「お姫様」という語）の墓がある。ゲゲは子供に恵まれなかった。ゲゲの家来となるウィフィズという満洲官吏の子孫たちはこの墓を守って、祀ってきたのである。この墓はマンジン・マンハ即ち「満洲族の砂丘」とよばれる砂漠の中のタルチャクト山の南麓にある。滑石のこの山の頂上に大きな桑の木があり、四角のサチ（土で作った小屋）の中に埋葬されている。その上にゲゲの好きな家を作った。そばに枝いっばいの榆の木が三本ある。このあたりをオンゴンタラ（聖なる草原）という。

ゲゲの墓を祀ることによって満洲族の家畜が増えて、生活が非常に豊かになり、力士も強くなったと言われている。その一例としてアルホルチン旗のナーダムにおいて満洲族の力士が何回もモンゴル相撲の横綱になったことなどが挙げられる。満洲族の人々はモンゴル語で話しながらも満洲人としての強いアイデンティティを持っている。ゲゲの墓を祀ることによって満洲族の人々は心と行動を一にしてきたのである。そして満洲人と姻戚になったモンゴル族もゲゲの墓を祀ろうとした。

そのため、モンゴル族はゲゲの墓から西南の方へ3000メートル離れたところに三つのオボーを建てた。それは真真中にモンゴル族のタイジ（前出）アイマグのオボー、西側がモンゴル族のシャラトル部落（実は満洲族と姻戚関係がある）のオボー、東側が満洲族のオボーであった。

三つのオボーは大きさも形もまったく同じなので表面的には平等に共存しているように見える。しかしながら、モンゴル人の考え方によれば中央部が最上、西側が上、東側が下になる。モンゴル人は西側を「正しい側」、「上の座」と考え、東側を「間違った側」、「下の座」と考えている。タイジ部落はアルホルチン旗の貴族であるため彼らのオボーは中央部に建てられている。モンゴル族のシャラトル部落のオボーは西側であって、満洲族のオボーは東側にある。

ところでオボーの本質である鎮め物はどのようなものであろうか。

「この三つのオボーを祀るとゲゲの靈魂はもっとも喜ぶ」とシャラトル部落の人々が言ったので満洲人はそれを信じて、モンゴル族に建ててもらったオボーを喜んで祀ったという。しかし、オボーを祀るとき次のような儀礼が行われたのである。

「そのオボーをゲルの形で作った。直径は3メートル。オボーの下にゲルの形に作ったサチを埋める。サチはノトクの一つの守護神である。モンゴル語のサチ（saca）というのはテントの形をした土製の像を指す。人間はこのサチを通じて天神と交流するという。モンゴル人は満洲人のオボーの下にサチの頭部を逆さまにして置いて、または呪いの言葉を書いた紙でたくさんの人形を作って、頭を下にして埋めたが、満洲人は知らなかった」（筆者の1999年フィールド・ノートより）

ゲゲのお墓の家はドアが一つ、窓が二つある。それに対抗するために三つのオボーを建てた。ゲゲは実家（皇帝の都、今の北京）のある西南の方向を向いているので墓の西南3000メートルのところにオボーを建てて、ゲゲの視線を遮った。ゲゲの墓を覆っているサチは満洲族の貴族の住む家を真似て四角の形に作られている。それに対抗するためにモンゴル人はゲルのようなサチとオボーを作った。満洲人の印璽を祀る習慣に対抗するた

めにモンゴル族はさらに呪いの言葉を書いた紙でたくさんの人形を作った。

「印璽とは清の康熙帝から授かったもので、幅0.5メートル、長さ5メートルの赤い緞子に黄色の満洲文字をいっぱい刺繍したものである。満洲族はこれを印璽と言う。印璽を保管している人の家を「大家」(Yeke ger)と呼ぶ。お正月の一日に皆が集まって一緒に印璽を祀る。異民族の人には見せない」。(筆者の1999年フィールド・ノートより)。

モンゴル族はその印璽を見ることができないので嫉妬して、大きな紙に咒語をいっぱい書いて人形を作ったという。そしてモンゴル族は自分のオボーの下にサチを正しく置いて埋めた。しかし、満洲族のオボーの下に埋められたサチの頭は下に向けて置かれているので置き方が完全に間違っている。その結果、満洲族のオボーの守護神はいつも怒っていると言われている。

その後、満洲族の故郷は砂漠化して、家畜がどんどん減っていったが、満洲族の賢者がある日「三つのオボーがゲゲの視線を遮っているため満洲族の生活は悪くなっている」と指摘した。そこで満洲族はモンゴル族と一緒にオボーを祀るのをやめたという。

つまり、アルホルチン旗のオボーの鎮め物、すなわち幸福と災害をもたらすサチは、その位置を逆さまに埋めることによって、満洲族に対する強い対抗意識を表している。言い換えれば、表面的には満洲族の形式を模倣し、友好的に見せかけながらも、それとは相いれない対抗心が隠されている。このように、共存と対抗という両義的な心性を持っていることはアルホルチン旗におけるオボー祀りの特徴であると言えよう。

5 山を祀る習慣

アルホルチン旗には山が多い。山にまつわる

伝説も多い。山が多いことはアルホルチン旗の地理的特徴でもあり、ほとんどの村はいくつかの山を所有している。人々は自分の所有している山を一番きれいだと自負する。そのため他人の山を占領しようとすることはほとんど起こらない。祀っている山に勝手に登ってはならない。木や植物を切ったり、刈ったりしてはならない。山の守護神の供え物を盗むと雷が落ちると言われている。

山を祀るとき、山のオボーを建てる。「最初、アルホルチン旗の貴族たちはグリゲルハンという山を祀っていた。しかしこの山の西側から流れている川が隣のバーリン旗に向いて流れて、アルホルチン旗の福をバーリン旗へ流していたので、この山を黒呪術で懲らしめ、祀るのをやめて、ゴゴスタイという山を祀るようになった。ゴゴスタイ山のオボーを建てる時、大きな穴を掘った。アルホルチン旗のオンドラフというメイリン(清朝の光緒帝によって与えられたモンゴル貴族の軍職)はその穴に入って一時座ってから出てきた。メイリンは満洲皇帝の官吏だから埋めてはならない。そのため象徴的な儀礼を行ったのである」(Buyanulji—1985: 176-177)。モンゴルでは人供犠の風習が次第に捨てられたが、アルホルチン旗では満洲族の登場がきっかけになっている。

チャガンウンドルという山はアルホルチン旗の王が祀っていた山であった。1906年の夏、この山を祀るとき王の馬が暴れて、王は馬から落ちて手に怪我をした。王は怒ってこの山の祭礼を中止させた。しかし、西ウジムチン旗の王はこの山を祀った。それから西ウジムチン旗の力士が強くなってきたので、アルホルチン旗の王はこの山の祀りを復活させた。そのためこの山にはオボーが二つある。山を祀るとき、二つの旗の間でトラブルがときどき起こってきた。牧民たちはこの祀りへの参加を誇りにしてきたので、この習慣はよく保存されてきたと言われている。

モンゴル農民にも山を祀る習慣がある。哲里木

盟のモンゴル農民は五穀で山を祀るのが一般的である。オボーの下に米を埋めて祀る。「哲里木盟のボー口という山の西側でひとりのおじいさんが畑を作ってくらしていた。茄子畑の一つの茄子が杖のように生えた。夜になるとピカピカと光る。おじいさんは、それがボー口山の鍵であることを知って、その茄子で山のドアを開けてたくさんの金銀を拾ってきた。ところが、茄子を山の中に忘れたのでそれから誰もこの山を開けられなかったという」(Nasun1993: 88-89)。このことは、茄子がこの山のオボーに埋められたということになる。茄子はこの山の守護神になったのである。

アルホルチン旗のモンゴル農民もオボーを建てて山を祀る。

「モンゴル農民が定住しているウンドルフアという村がある。彼らは石で庭をつくるために周囲のほとんどの山を掘っていた。しかし、この村で祀っていたウンドルフアという山だけが掘られていない。昔はこの山を家畜で祀っていたという。今は家畜がいなくなったので、彼らは豚肉と小麦粉で作った羊などで山を祀っている。牧畜村の親戚が彼らに羊を貸してあげようと言ったが、彼らは自分たちの山は自分たちで祀るのだと言って断ったという」(筆者の1999年フィールド・ノートより)。

このように牧畜生活を完全に失った彼らの生活にも昔の自然崇拝の習慣が多少残っている。小麦粉で羊を作るのは昔の習慣の残存であろう。その信仰によりこの山が掘られていないと思われる。

山祀りにはその山を所有している集落(村)の人々だけの参加が原則であった。牧村のモンゴル族は農村の山祀りへの参加を恥ずかしく思うと言う人が多い。しかし、最近、牧村と農村との物的交流が頻繁になっているので、他の村の山祀りへの参加が一般的になっている。また、有名な山祀りならどこの村の人でも参加が可能である。

「アルホルチン旗のアルスラン(「獅子」の意味)

という山を祀れば、相撲にもっとも強くなる。そのためこの山はブヒン・オボー(「力士のオボー」という意味)とも呼ばれている。この山を祀ったお陰でアルホルチン旗のナムスライという力士が西ウジムチン旗のナーダムで優勝したという。満洲族の男たちもこの山を祀った。そして満洲族のボムボライという力士はアルホルチン旗のナーダムでモンゴル相撲で優勝した。アルスラン山を祀る力士は獅子の力をもらうので、満洲族の人がアルスラン山を祀るのを止めさせた」(Buyanulji-1987: 8)。アルホルチン旗の横綱テケシという人がこの山を祀って獅子の力をもらったという。

アルホルチン旗におけるアルスラン山を祀る儀礼は排他的性質を持っていると思われる。

というのは、満洲族はモンゴル族と一緒にノトクのオボーを祀って失敗したため、モンゴル族から遠く離れて自分のオボーを祀るようになった。そしてアルスラン山を祀る儀礼からも排除されたため馬のオボーを祀ることにした。オナガン・オボー(子馬のオボー)という小山の祀りがそれである。

「昔、千頭の馬を持つジナという満洲族の人がいた。ある日、一頭の金の子馬が彼の馬群に走って入ってきた。ジナはその子馬を捕まえようとしたが、彼の馬飼いは金の子馬に絶対触れないで下さいと忠告したので捕まえるのをやめた。その年からジナの馬群は増え続けて、数え切れないほどになった。そのときからアルホルチン旗最上の良馬はこの群から生まれるようになったので、モンゴル族から隣の旗の人々までマンジン・アドー(満洲族の馬)を求めるようになった。金の子馬はときどきある小山に走って登るので満洲族の人々はこの小山にオボーを建てて、サチを埋めて祀った。それからマンジン・アドーは満洲族の誇りになった。モンゴル族もオナガン・オボーを祀ろうとしたができなかった。なぜなら「この小山は満洲族の砂漠の中にあり、異民族は入ってはいけない」

からである(筆者の1999年フィールド・ノートより)。

満洲族の山祀りの儀礼は排他的である。相撲と競馬はモンゴル族と満洲族の間ですっと行われてきた。アルホルチン旗のナーダムでは、モンゴル相撲に優勝した満洲人が少なかったが、競馬では満洲族の馬の優勝は多かった。今でも、アルホルチン旗では優れた馬をマンジン・アドー(満洲族の馬)と言う人が少なくない。このようにみると、満洲族の山祀りはモンゴル族との競争を表す行為の一つになっていることが明らかである。

現在、満洲族の村は三つあるが、彼らは村から20キロメートル離れているマンジン・マンハという砂漠にある川や山の名で自分たちの村を名付けている。その砂漠をウリジバヤルという満洲族の若い人が守っている。満洲族はこの三つの村の真ん中にあるバヤンチャガン山を祀っている。この山は満洲族の神聖な山なので、山を祀る日は満洲族の人々の精神統合を行う機会でもある。山祀りの儀礼が終わると、「バヤンチャガン山のナーダム」が行われる。マンジン・ナーダムとも言われる。モンゴル族も参加することができる。このナーダムは満洲族の村の真中で行われるので人々と交流するチャンスにもなっている。満洲族はモンゴル族の伝統的祭りであるナーダムに自分たちの名をつけている。そして満洲族のナーダムが一番成功したという話が一年中話題になる。

アルホルチン旗の山祀りは一般的であり、全モンゴルの山を祀る儀礼とほぼ同じであると思われる。ただし、モンゴル族の力士のオボーを祀る儀礼と満洲族の馬のオボーを祀る儀礼は排他的であり、競争や対抗という意味合いを持っている。

6 樹木を祀る習慣

モンゴル人の樹木を祀る習慣について内モンゴル師範大学教授 Buyanbatu 氏の『モンゴル族の

樹の崇拜』(1990)という論文集で論じられている。氏は「樹を祀る習慣はモンゴル人の自然崇拜における伝統的信仰の一つである」と指摘している。(Buyanbatu-1990:2)。「モンゴル人は単独に生えている大樹に恐怖の念を抱く。そのため一本の大樹を祀るようになった」。(Buyanbatu-1990:4)「モンゴル人は榆、柳、樺、松、白檀等の樹を祀る習慣がある」(Buyanbatu-1990:30-47)と実例を挙げて論じている。「モンゴル人の祀っている樹は母樹、父樹、女性シャーマン樹、天の樹、シャーマンの樹、祖先の樹、オボーの樹、大樹と分類される」(Buyanbatu-1990:60-87)。モンゴル人の大樹崇拜の特徴は葉の密生した独立樹を祀ることであるというのは氏の主要な論点である。さらに「文献によれば、モンゴル人は森を祀る習慣がある」(Buyanbatu-1990:29)と述べられているものの、実例が挙げられてない。

アルホルチン旗のモンゴル族の場合も大樹を祀る習慣が認められるが、実は森を祀る習慣が主な特徴になる。

「アルホルチン・モンゴル族はオンゴン・モド(神聖な森)、シャンシン・モド(大樹)を祀る。そういう樹に登ってはならない、切ってはならない。切ったら血が出る。切った人の子孫は体から血が出て死ぬ。そういう樹が二本並んでいる場合、その間を通ってはならない。それは父母樹である」などという(Buyanulji-1986:8)。アルホルチンのシャーマンの歌に「大地のお臍から生まれたシャンシン樹だぞ、すべての枝に守り神がいるよ」という詩がある。シャンシン・モドという樹を祀るのは雨乞いのための儀礼であるが、主に農民化したモンゴル族が祀る習慣である。この点では哲里木盟の農耕生活をしているモンゴル族と似ている。つまり Buyanbatu 氏の論じている一本の樹を祀る習慣と共通点を持っている。ただし、今までの調査によればオンゴン・モドという森を祀る習慣はアルホルチン旗のモンゴル族の樹木を祀る

習慣における独特のものである。

アルホルチン旗王が「オンゴン・モド」と名づけた森は三つある。それらは、オンゴン・モド、フイスィン・モド(臍の森)、エブゲディン・モド(祖先の森)である。

この三つの森を祀ることはアルホルチン・モンゴル族の樹木崇拝における大きな儀礼である。その中の一つはオウムレンという川の上流にあるバヤンボルラジ(地名)のオンゴン・モドという森である。

「以前、アルホルチン旗王が全部大樹からなったこの森を祀っていた。オンゴンにはお墓という意味もある。確かにこの森にアルホルチン王の祖先の墓が建てられている」(HuturangG-a1996: 8)。ここで祖先のお墓の祭祀とオンゴン森の祭祀儀礼は一致している。「その森は厳重に守られていた。森の中に人は入ってはならない。森の広さは3平方キロメートルであった。1951年、この森が全部伐採されてしまった。そのため周りの人々は北へ10キロメートルのところに移住した。それでも彼らは自分の村をオンゴン・モドと名づけた」(HuturangG-a-1996: 107-108)。崇拝の対象物は破壊されたが、その森を祀っていた人々の信仰は変わらなかったようである。

もう一つはオルト・フブ(長い山谷)村のフイスィン・モドという森である。この森は大興安嶺の森林と繋がっているので虎や豹などの猛獣がいた。後に、王の命令を受けたアルホルチン旗のウゼドル・アイマグという狩猟民がこの森の虎と豹を狩猟して森を守ってきた。この森にオボーが二つある。一つは王の祀るオボーであり、一つはこのあたりの牧民と狩猟民の祀るオボーである。地理的にこの森はアルホルチン旗の真ん中あたりにあると言われ、フイスィン・モド(臍の森)と名づけられているのである。人間は臍から生まれるとモンゴル人が言う。「アルホルチン王はこのフイスィン・モドを祖先が誕生した聖地として毎年6

月8日に祀っていた。それはとても荘厳でにぎやかな祀りだったという」(HuturangG-a-1997: 130-131)。アルホルチン部族の祖先が誕生した聖地の象徴になったこのフイスィン・モドは今も密林のまま残っている。

アバガハラ山の南麓にエブゲディン・モド(祖先の森)という森がある。この森にアルホルチン旗王と貴族たちの祖先のお墓がたくさんある。つまり森を祀ることは祖先のお墓を祀ることになるのである。

「人間は樹から生まれた」という言い伝えがある。そして人間が亡くなると靈魂は樹に戻ってオンゴン・モドの中に存続するという。アルホルチン旗のモンゴル族は祖先のお墓を祀るためにオンゴン・モドという森を祀っている。

要するに、アルホルチン旗のモンゴル族は主に一本の独立した樹ではなく、複数の木々からなる森を祀る。その森を祀ることは祖先の墓を祀ることである。つまり「樹木信仰」は「祖先崇拝」を意味するものである。「祖先崇拝」を通じて、もとの「自然環境」を保全しているとも考えられる。ここで出自の社会的、自然環境の要素が一体化されて、表象化されていると考えられる。

7 むすびに

以上、アルホルチン旗におけるモンゴル族と満洲族のオボー崇拝に関する若干の考察をしてみた。アルホルチン旗のモンゴル族のオボー祀りはモンゴル全体のオボー祀りと共通点はあるものの、自分たちの勢力範囲を示そうとしたアルホルチン独自の特徴を持っている。その特徴は周辺に住む異民族との共存と対抗という両義的な行為で表されている。つまりアルホルチン旗のオボー崇拝にはアイデンティティの表象という要素が色濃く見られる。オボーの下にサチを埋める儀礼、森を祀る儀礼、即ち墓を祀るという祖先崇拝を通じ

て、「集団のアイデンティティの確認」が行われている。満洲族は表面的には協調する姿勢を見せているが、事実上自分たちのゲゲのお墓を祀る儀礼、子馬のオボーを祀る儀礼を通じて集団のアイデンティティを強調している。つまりモンゴル族、満洲族のオボー祀りにおける儀礼の本質は、互いに競争し、対抗しているということではないだろうか。

引用文献

阿拉坦(ほか)(1997)、(中国文：『阿魯科爾沁旗誌』)、内蒙古人民出版社
 石川 栄吉(ほか)(1998)、『文化人類学事典』、弘文堂
 江上 波夫(1961)、『騎馬民族国家』、中公新書。
 Sampilnorbu(1990)、Mongol-un jang Agali-yin Toimu(モンゴル文：『モンゴル風俗概要』)、遼寧民族出版社
 Sainchogt(1998) Ami-yin Situlge(モンゴル文：

『生命崇拜』)、内蒙古人民出版社
 Sonum, Aliy-a(1994) Ordus-un Gajar-un Nere-yin Domug(モンゴル文：『オールドスの地名の伝説』)、内蒙古文化出版社
 SulfungG-a(1987) Bagarin-u Jang Uile-yin Durasumji、(モンゴル文：『巴林風俗民情録』)、内蒙古人民出版社
 CaGan(1992)、Sunid-un Jang Agali(モンゴル文：『蘇尼特風俗民情録』)、内蒙古人民出版社、
 Nasun(1993)、Jirim-un Gajar-un Nere-yin Domug、(モンゴル文：『哲里木の地名の伝説』)、内蒙古文化出版社
 HuturangG-a(1997)、Aru Horqin-u Agula Usu
 (モンゴル文：『アルホルチンの山水』)、内蒙古青少年出版社
 Buyanulji(1986)、Aru horqin-u Arad-un Aman Johiyal(モンゴル文：『阿魯科爾沁旗口承文学集』)、阿魯科爾沁旗文化局
 Mansang(1990)、Mongol Boge murgul(モンゴル文：『蒙古薩滿教』)、内蒙古人民出版社

(さいんちよくと)

《論 文》

エンフバヤル政権の性格

— 2000～2004年—

村 井 宗 行

エンフバヤル大統領は、2005年12月15日、記者会見を行った。

その中で、彼は、2004年の経済成長率が10.6%だったことがエンフバヤル政権(2000～2004年)の最大の功績である、と述べた。また、エンフバヤル政権の最初の3年間に、ゾド被害が大きく、家畜1200万頭が斃死し、35万人が貧困化した。このため貧困問題に取り組むことが困難となった、とも述べた¹⁾。

すなわち、彼は、エンフバヤル政権が高度経済成長を達成したが、貧困問題は解決できなかった、と述べているのである。

エンフバヤルは、ここで「経済成長」と「貧困」を問題にしている。何故か。この背景にあるのは、IMF(国際通貨基金)のPRGF(貧困緩和成長戦略)である。

1. IMFとモンゴル

モンゴルは、1991年2月14日にIMFとWB(世界銀行)に加盟した。そして、1991～92年の緊急融資(a Stand-by credit)、1993～96年のESAF(高度構造調整戦略)プランを経て、1999年9月からPRGF(貧困緩和成長戦略)プランに基づく経済政策を実施してきた²⁾。

ここでいうESAFプランというのは、新しいものでは、1997年から2000年までの3ヶ年融資プランをさす。1997年に1500万ドル、3年間で総額4500万ドル(半年ごとに供与)の融資が供与される。

ただ、無条件に融資するわけではもちろんない。

その条件として、

- 1) 賃金・価格の自由化、
- 2) 輸入規制の緩和、
- 3) 国営企業の民営化、
- 4) 商業銀行制度の設立、
- 5) 資本規制の緩和、
- 6) 変動相場制の導入、などを前提とする。

その背景には、IMFの主張によると、

- 1) 銀行制度の欠陥、
- 2) 国営企業の肥大、
- 3) 非効率性、
- 4) 税制のゆがみ、
- 5) 民営化のための法律インフラの不備、
- 6) 歳入欠陥がGDP(1996年)の9.5%、など

があるという。

特に、モンゴルの国家予算赤字は、致命的である。

そのため、中間目標(1997～98年)として、

- ・ 市場経済への移行
- ・ 私企業の発展
- ・ インフレを一ケタに
- ・ 実質年成長率を6%に
- ・ 外貨準備高を15週間に
- ・ 貯蓄高を上げる
- ・ 国家予算赤字を?10.5%(1997年)から6%(2000年)に下げる
- ・ 国営部門を減少させる、などの諸政策を義務づけている。

そして、たとえば、1997～98年のマクロ経済

政策として、

- ・ GDP 年成長率を 3 % (1997 年) から 5 % (1998 年) に
- ・ インフレを 3 ~ 4 % に
- ・ 外貨準備高を 15 週に (1998 年末)
- ・ 実質利率 (公定歩合) を堅持
- ・ 商業銀行への融資制限
- ・ 企業への補助金削減
- ・ 賃金規制
- ・ 輸入関税の撤廃
- ・ 銀行再編
- ・ 銀行再編と税制改革によって国家予算赤字を減少させる、などの実施をせまる。特に、「輸入関税の撤廃」は、国内産業の荒廃を招く。実際その通りになった。

また、「構造改革」として、

- ・ 国営企業を減少させ私企業を増加させる
 - ・ 輸入関税の撤廃
 - ・ 税制改革
 - ・ 銀行制度の再編
 - ・ (外国資本) 投資環境の整備、
- 「社会保障部門」では、
- ・ 国家歳出予算削減による教育・保健改革
 - ・ 年金制度の自立化、などを迫っているのである³⁾。

この間の事情については、例えば、モンゴル銀行総裁 Я. オチルスフは、IMF 総会 (1999 年 9 月 28 ~ 30 日) における演説でそれを明らかにしている。

オチルスフによると、モンゴルは、過去数年間 ESAF プランによる財政金融政策を実施してきたが、1999 ~ 2000 年には、

- 1) マクロ経済の安定化、
- 2) 経済社会部門の構造改革、
- 3) 私有セクター主導の経済改革、
- 4) 輸出振興、
- 5) 国内蓄積、といった政策によって、モン

ゴルの潜在的可能性がさらに発揮されるだろう、と述べて、IMF および世銀によるモンゴルへの融資援助に感謝している⁴⁾。

次に、PRGF (貧困緩和成長戦略) というのはどういうものか。

過去の ESAF (高度構造調整戦略) プランでは、賃金・価格の自由化、輸入規制の緩和、国営企業の民営化、商業銀行制度の設立、資本規制の緩和、変動相場制の導入という前提目標の下で、インフレ率が 300 % から 50 % に低下させ (1995 ~ 96 年)、経済成長率が 3 ~ 5 % になった⁵⁾。

しかし、貧富の差の拡大と貧困化・失業は進行している。

そこで、今後、

- 1) 急速な経済成長と貧困緩和、
- 2) 貧困層に対する政策、
- 3) 保健、教育、地方インフラ中心、
- 4) 私有セクター主導の経済成長、という P R G F (貧困緩和成長戦略) プランに移行し、(一人当たり GDP895 ドル以下の IMF 加盟国に対し、IMF と世銀が支援 (アドバイスと実行) する。

その手法は、

- 1) マクロ経済：経済成長とインフレ率、
- 2) 国家予算バランス、
- 3) 良き統治、
- 4) マクロ経済安定、
- 5) 維持可能な成長、
- 6) 貧困緩和、などである⁶⁾。

こうして、モンゴルは、IMF プランを「忠実に」実施してきた。

2. 民主同盟連合政権批判

人民革命党は、1996 年の国家大ホラル (国会) 議員選挙で敗北し、初めて野党となった。

この選挙敗北への対処を迫られた人民革命党は、1997 年 2 月 23 日、人民革命党第 22 回大会

を開催し、新しい党綱領を採択した。

その党綱領によれば、人民革命党は、民主主義的社会主義の党であると規定し、独立、主権、民族統一、社会進歩をめざし、人権、自由、平等、正義、連帯、社会保障を尊重する、とある。

後に、ウネン新聞(2007年10月22日付)が述べるところによれば、これらの実現のために、「憲法」を遵守し、「前の時代の歴史的経験、社会改革に依拠する。」

すなわち、

- 1、社会政策：貧困、失業の撲滅、社会保障制度をモンゴルの特性に基づき強化する
- 2、経済政策：国内産業の競争力を高める、地方開発
- 3、科学・教育・文化政策：民族文化
- 4、自然環境政策：自然環境保護
- 5、政治政策：憲法、民主主義思想の遵守、NGO 支持、
- 6、社会主義インターナショナルに参加
- 7、選挙で多数派となる、という政策を実施する。

このため、1998年、人民革命党第5回小会議が開催され⁷⁾、1999年3月25～26日には、初級単位書記長会議⁸⁾が開催された。

また、国際関係では、左翼あるいは左翼中道路線の政党との友好関係を推進し、ロシア、中国の与党および左翼政党との友好関係を推進した⁹⁾。

また、1999年に、社会主義インター第21回大会の正式メンバーとなった¹⁰⁾。

2000年5月16～17日、人民革命党第8回小会議が開催されて、人民革命党綱領を改定した¹¹⁾。

こうして、2000年選挙では、「政治混乱を正し、貧困から脱却する」¹²⁾、という選挙宣伝を行った。

ただ、この人民革命党2000年選挙綱領の一部には、「私有制度に依拠して経済発展を図る」¹³⁾、という箇所もある。

このことについては、「民主主義的社会主义(い

わゆる民主社会主義)」の理論的指導者である A. ツァンジド(国家大ホラル議員)が書いているが、(民主社会主義の)政策は、1) 社会保障制度を作ること、就業機会を創設すること、教育・保健部門を国民が平等に供与されること、2) 市場関係、私有を重視すること、3) 民族文化、慣習を重視することである、とあるように、IMF 路線を否定しているわけではなかった¹⁴⁾。

エンフバヤルは、新党首に選出され、新しい活動を開始した。

彼は、民主同盟連合政権がその政権担当期間の最後の年、2000年の4月5日、2000年春期国家大ホラル(国会)において、野党である人民革命党の議会内会派代表として冒頭演説を行い、民主同盟連合政権を批判した。

彼は、民主連合政権が、

財政・金融部門の混乱

融資返済不能状態の現出

ゼロ関税政策導入による経済混乱

課税負担増による脱税行為

地下経済の繁栄(30%)

財政赤字の拡大

対外債務7億ドルに

民営化の失敗

輸出の減少、輸入の増大

カシミヤ原毛輸出許可による国内産業衰退

国内産業の衰退

民生の悪化、失業の増大

貧困層が三人に一人になった

牧民の60%以上が所有家畜100頭有以下に高い失業率

犯罪の凶悪化、を引き起こしたとして、

民主同盟連合政権の失政として、

日用品価格の自由化による生活状態悪化

地方選挙の結果無視

野党をスパイする

遠隔アイマグの切り捨てによる生活状態悪化

自然災害からの牧民保護制度の放棄

公務員を党所属によって差別

近視眼的なゼロ関税制度導入による国内産業

衰退

不法な民営化

銀行民営化の歪曲

汚職の横行

政治不信を招く

国家予算によるビジネス、国家資産横領、の諸事実をあげている¹⁵⁾。

これは、事態を正確に捉えたものであった。

3. 2000年国家大ホラル(国会) 議員選挙の意味

2000年7月2日、国家大ホラル(国会)議員選挙が実施された(投票率は81.37%)。その結果は、人民革命党の大勝であった¹⁶⁾。

すなわち、人民革命党は、議席数の94.7%、72議席を獲得(全議席は76議席)した¹⁷⁾。

人民革命党大勝の原因は、民主同盟連合政権の失政と腐敗にあった。

つまり、日用品価格自由化、ゼロ関税制度、銀行合併問題、首相交代問題、ゾリク殺害、民営化問題、インフレ、失業、地方のインフラ破壊、犯罪率増加などがどう政権敗北に導いた要因であった。

すなわち、エンフバヤルの推進した政策がモンゴル国民によって支持されたのであった

一方、海外での反響は、

- ・旧「共産党」の勝利、
- ・党首エンフバヤルに注目、
- ・「草原のブレア」、左翼中道、第三の道、
- ・IMFと再交渉できるか、というものであった¹⁸⁾。

4. エンフバヤル政権発足

エンフバヤルは、2000年国家大ホラル(国会)議員選挙圧勝後の記者会見で、市場経済を堅持することを表明した¹⁹⁾。

また、彼は、選挙後の記者会見で、「われわれはコミュニストという化け物ではない」、と述べて、諸外国を安心させようとした。

実際、人民革命党は、(民主同盟連合政権の時期には)大規模民営化、土地所有、エネルギー・銀行制度改革などに反対していたが、民主同盟連合政権の政策を継承せざるを得ないだろう、という見方が一部でなされていた²⁰⁾。

そのことの前兆は、人民革命党小会議(執行委員会)でのエンフバヤル報告(2000年7月17日)でみることができる。

彼は、次のように述べている。すなわち、

・人民革命党選挙綱領の実施

銀行金融政策の健全化

関税、税制度の適正化

国内産業育成

中小企業支援

就業機会の創出

農牧業の電力化

予算の公開性

学費・医療費の軽減

・市場経済制度の維持

観光業育成²¹⁾

これが、政府綱領に盛り込まれ、

「政府政策綱領(2000～2004年)」として、

・経済成長

・輸出振興

・教育文化発展

・社会保障の充実

・地域発展、途方と都市間格差の是正

・モンゴルの特殊性考慮

1. 社会政策

「社会政策の基本的方向は、人間の発展を促進し、民生の向上、社会サービスの提供、失業・貧困の撲滅にある。」

2. 経済政策

「マクロ経済を強固にし、輸出振興、私有制度を中心として、経済安定をめざす。鉱山業、牧畜業、輸出振興、観光業を発展させる。

2004年までに経済成長率を6%にする。」

3. 地方政策

地域発展構想に基づく、資本投下、定住政策

4. 自然環境政策

エコロジー保護

5. 国防政策

6. 行政混乱除去、風紀取締²²⁾

それでも、「モンゴルの特殊性考慮」や、「教育文化発展」というように、IMF路線とは異なった、「第三の道」をも模索していたことも事実であった。

5. エンフバヤル政権中間期の成果 — 政策の急展開

エンフバヤル首相は、2001年11月11日、国連総会での演説の後、米国大統領ブッシュと会談した。

その席上、エンフバヤルは、イスラム原理主義に基づくテロリズムに反対する共に、米国からの投資増を要請した²³⁾。

これを受け、エンフバヤル首相は、2002年12月23日、臨時閣僚会議を招集し、2003年を「モンゴル観光の年」、「協同組合の発展を支持する年」と位置づけ、外務大臣エルデネチヨローン、商工大臣ガンゾリグに対し、その目標を達成するための会議をおのおのの主宰させることにした²⁴⁾。

これら3つの記事は、国营通信社モンツァメが、今年の10大ニュース、などという年末恒例の企

画に混じって、さりげなく発表されている。だが、モンゴルの今後を左右する、かなり意味を持つ方針であった。

エンフバヤルは、文化相を経験し、さらにそれ以前には、通訳の仕事に従事してきた。国際交流の経済的文化的側面を知悉していると思われる。彼の主導で、2003年に大幅な観光客数の増加が企画された。

それは、直接的には、国家予算に観光収入が納入されるという、マクロ経済安定化のためである。間接的にいうと、2004年には国家大ホラル(国会)選挙が行われる。当時の世論調査によれば、「年金・給料倍増」という、2000年国会議員選挙時の人民革命党の公約が達成されていないため、支持率が30%~40%と低下傾向にある。その公約実現のための資金が見あたらないからだ。観光収入がその実現に寄与するであろう。

「土地関係、測量、地図作製局」の新設は、「土地所有法」採決に伴う処置である。当該法の問題点は、土地測量など何ら具体的裏付けがないまま、土地の無料分与が行われる、ということであった。そうした欠陥(ザル法というべき)に対し、エンフバヤル政権は本気で土地私有化に取り組むことを内外に示した。諸外国向け通信社モンツァメが配信したのもその理由があるわけである。しかも、この部局の責任者に、かなりの大物を充てている。

しかし、こうした方針に並行して、モンツァメが配信するところによれば、今年のゾド(冷害)によって家畜が200万頭斃死し、103人が死亡している²⁵⁾。年金生活者数の増大(5人に1人)によって、年金基金の運営に困難を来し、ひいては社会保障費支出が増加し、来年度当該部門の15%削減、という目標(IMFプランに基づく)実現が困難になっている²⁶⁾。ウムヌ・ゴビでは、医師、教師、専門技師が不足している²⁷⁾。青少年犯罪が深刻化し、青少年7千人が犯行を犯している²⁸⁾。MCS社の「コーラ」飲料工業労働者が労賃不払い

の解消を求めてストライキを敢行した²⁹⁾。モンゴル人の間で、有利な土地を求め、土地争いが激化している³⁰⁾。第三病院が民営化される³¹⁾。

2003年5月13日、エンフバヤル首相は記者会見を行って、政権の総括を行った。その席上、彼は、「遠大かつ壮大な政策を推進している」、として、「加工業8.8%増、資本投下20%増、GDP成長率9.4%」、「50万世帯に土地を無料で供給」、「世紀の道」、「貿易特区」などの成果を強調した(モンツァメ通信2003年05月13日、および、ウヌードゥル新聞2003年05月13日付、Mongol Messenger 2003.05.14)。

また、正式にというか、人民革命党機関誌「ウネン」は、2003年05月20日および21日付で、「モンゴル政府の1000日、就労機会、進歩、発展の三年間、モンゴル政府が過去三年間にどのようなことをしたかについての各省の報告」を掲載して、その「成果」を公表した。

「財務経済省報告」では、マクロ経済において、GDP成長率が2000年の1.1%から2002年に3.9%になった、特に加工業の成長(2001年22.7%、2002年24.3%)、産業発展があった。それは、2001年を国内産業育成の年、2002年を資本投下の年、とした政策の結果である。

IMFと「協調」し、支出の削減、収入の増加をはかった。

財政赤字を縮小した(二分の一に)。会計制度の整備。特産品加工業3%免税。金鉱業に免税措置を講ずることによって成長を促した。

低所得者層の所得税を33.3%減税し、高額納税者の所得税減税予定している。

対外負債をなくすことができた。モンゴル銀行に対する債務を二年間でなくした。

国債を発行した。銀行の構造改革を行った。

インフレ率が1.6%に低下し、通貨準備高が49%増加した。

商業発展銀行・農牧業銀行・バガノール発電所

を民営化した。

モンゴル支援国・機関による融資が6億6300万ドルである。

アルタンボラク自由貿易特区を建設することになった。

地方産業育成のために50～100%減税した。

「工業貿易省報告」では、2001年を国内産業育成の年、2002年を資本投下の年としたことの「成果」として、工業生産高が2001年11.8%、2002年3.8%増加し、特に、加工業が2001年22.7%、2002年24.3%に成長した。

「食料農牧業省報告」では、牧畜業のための基金を設立した。

「緑の革命」により食料生産が2.1%から3.3%増加した。

食肉輸出を再開した(ロシア、日本、ヨルダン、カザフスタンに)。

「自然環境省報告」では、土地法(改正)・土地所有法を施行した。環境保護のための法整備を行い、ゴミ問題に取り組んだ。

「法務内務省報告」では、法整備を進めた。

「インフラ省報告」では、日本政府融資によるウランバートル第四発電所の修理、各国政府融資によるエネルギー施設の修理、日本政府無償援助による石炭採掘、中国援助によるドウルグニ水力発電所、クウェート基金によるタイシル水力発電所、世銀融資による電力網整備を行った。

電力部門を民営化した。

自動車道の整備・更新、橋の架設を行った。

アジア開発銀行特恵融資によるナライフーマーニトーチョイル間道路の敷設、世銀特恵融資によるエルデネトーアルバイヘル道路の補修、日本政府無償援助によるウランバートル市内道路の補修を行った。

観光客が増加し、観光業が成長した。

ウランバートル鉄道債務の完済した。

電話網を整備した。携帯電話が増加した。外資

による電話の自動化を行った。

スペイン政府特惠融資による清掃施設の改修を行った。

「社会保障労働省報告」では、年金の完全支給、給料の増額を実施した。

最低賃金額を3万ドルに増額した。

失業率が2002年3.3%に低下した。

「教育文化科学省報告」では、「教育一括法案」を上程し、承認された。

「保健省報告」では、法整備を行った。

「国防省報告」では、平和維持軍へ参加した。モンゴル軍・米軍合同演習「バランス・マジック」を実施した。

農牧業部門で、かつて1980年代まで行われていた手法が復活していることは、社会主義的手法への回帰の意味であろうし、牧民の自己責任だけで、ガン(干害)・ゾド(雪害)を克服するのは困難である、ということが再認識されたことを示している。

社会保障部門での社会保障・年金拡大(不十分であるが)は、評価されるが、1980年代のレベルには達していない。

エンフバヤル政権が明言するとおり、この成果は、IMFとの「協調」あるいは、従属によるものである。

内実は、そのほとんどが、融資・援助による資金に依拠している。この返済が30年後に大きな負担となるだろう。この外部資金による、インフラ整備、というのは、かつての帝国主義諸国の常套手段であった(イギリスのアフリカ植民地、日本の「満州国」など)。

それは、貧富の差の拡大、低開発の進行、という、かつて、アフリカがたどった道である。モンゴル指導層は、かつて、B.パーバルが誇らしげに言い放ったような、グローバリズムを不可避な所与のもの、とみなさず、その危険性を認識しなければならない。

モンゴルでは、「地下経済」が国民経済の30%を占めている(いわゆるインフォーマル・セクターを含む)、と言われるが、その状況への言及がない。モンゴル国立銀行は、その事実を捕捉しているはずであるが、それを公式には認めていない。マクロ経済は、それを含めたものでなければならない。インフォーマル・セクターこそ、当該国の自生的発展にとって不可欠の部門であるのだから。

6. 結び

2004年06月26日、国家大ホラル(国会)議員選挙が行われた。

この選挙は、「人民革命党」、「『祖国・民主』同盟」、「共和党などの第三勢力」の三つどもえの選挙戦と見なされていた、社会学者X.グンドサンボーの述べるように、(惜しいことに)第三勢力の占める余地はなかった³²⁾。

人民革命党は、「あなた方のために、あなた方とともに」というキャッチフレーズと、党首・首相エンフバヤルを全面に出して、同党の政策を国民に訴えた。

「祖国・民主」同盟は、内部に不和・対立はあるものの、「現在の苦しみからの解放、家族への援助」という主張を全面に出して、選挙戦を戦った。

この際、「祖国・民主」同盟による、「18歳以下の青少年家族に毎月1万トグルグ支給」という主張は、相当インパクトがあった。

人民革命党もこれに対抗して、「新婚家庭に50万トグルグ、新生児に10万トグルグ、それぞれ一度限り支給する」、と主張する始末であった³³⁾。

こうした事態の背景には、モンゴル国民の中で、貧富の差が拡大し、30%以上が貧困である、という事実があった。彼ら貧困層は、エンフバヤル政権の「成果」よりも、日常の生活を重視していた。

選挙結果が出た。

人民革命党が38議席、「祖国・民主」同盟が37

議席をそれぞれ獲得した。

これは、人民革命党の実質的な敗北であった。すなわち、72議席から議席数をほぼ半減したのであった。

この意味は、エンフバヤル政権が推進してきたIMF路線追随政策が国民の支持を得られなかった、ということである。

モンゴルが「IMF路線の束縛」から脱却し、独立した政治・経済を確立しない限り、その将来は危うい³⁴⁾。

註

- 1) ウヌードゥル新聞2004年12月16日付
- 2) 1997～1998年はモンゴルの政治混乱＝腐敗の理由でIMFはモンゴルへの「援助」を停止した
- 3) 以上、IMF Approves Three-Year ESAF Loan for Mongolia, Press Release Number 97/36, FOR IMMEDIATE RELEASE, July 31, 1997
- 4) INTERNATIONAL MONETARY FUND Press Release No. 11, September 28-30, 1999, Statement by the Hon. YANSANJAV OCHIRSUKH, Governor of the Bank for MONGOLIA, at the Joint Annual Discussion
- 5) IMF Press Release Number 97/36, 'IMF Approves Three-Year ESAF Loan for Mongolia', July 31, 1997, IMF
- 6) The IMF's Poverty Reduction and Growth Facility (PRGF), March 30, 2000
- 7) Айсуй зууны аргамаг хүлэг МАХН, УИХ дахь МАХНын бүлэг 1996 — 2000он, Улаанбаатар хот, 2000 он〔モンゴル人民革命党の行動と2000年選挙綱領〕6頁
- 8) Айсуй зууны аргамаг хүлэг МАХН, УИХ дахь МАХНын бүлэг 1996 — 2000он, Улаанбаатар хот, 2000 он〔モンゴル人民

革命党の行動と2000年選挙綱領〕6頁

- 9) Айсуй зууны аргамаг хүлэг МАХН, УИХ дахь МАХНын бүлэг 1996 — 2000он, Улаанбаатар хот, 2000 он〔モンゴル人民革命党の行動と2000年選挙綱領〕6-7頁
- 10) Айсуй зууны аргамаг хүлэг МАХН, УИХ дахь МАХНын бүлэг 1996 — 2000он, Улаанбаатар хот, 2000 он〔モンゴル人民革命党の行動と2000年選挙綱領〕7頁
- 11) Айсуй зууны аргамаг хүлэг МАХН, УИХ дахь МАХНын бүлэг 1996 — 2000он, Улаанбаатар хот, 2000 он〔モンゴル人民革命党の行動と2000年選挙綱領〕8頁
- 12) Айсуй зууны аргамаг хүлэг МАХН, УИХ дахь МАХНын бүлэг 1996 — 2000он, Улаанбаатар хот, 2000 он〔モンゴル人民革命党の行動と2000年選挙綱領〕8頁
- 13) Айсуй зууны аргамаг хүлэг МАХН, УИХ дахь МАХНын бүлэг 1996 — 2000он, Улаанбаатар хот, 2000 он〔モンゴル人民革命党の行動と2000年選挙綱領〕26頁
- 14) А.Цанжид, Ардчилсан Социализм Үүсэл, Хөгжил, Мөн Чанар, Улаанбаатар, 2000 82頁
- 15) ウドゥリー・ソニン新聞2000年4月6日付
- 16) ウドゥリー・ソニン新聞2000年7月15日付、および Сонгуулийн Ерөнхий Хороо, Ардчилсан Төрийн Сунгуулийн Товчоон, Улаанбаатар, 2002
- 17) もっとも、得票率は41%だった。これは、選挙法が単純小選挙区制であったからである
- 18) 例えば、Monday, 3 July, 2000, 18:12 GMT 19:12 UK, http://news.bbc.co.uk/hi/english/world/asia-pacific/newsid_817000/817356.stm, Monday July 3 9:08 AM ET, Mongolia's Ex-Communists Win Election Landslide, By Jeremy Page, ULAN BATOR, Mongolia (Reuters)

http://dailynews.yahoo.com/h/nm/20000703/wl/mongolia_elections_dc_2.html

Disillusioned Mongolians turn to 'Blair of the Steppes', By Damien McElroy, <http://www.telegraph.co.uk/et?ac=000579381554028&rtmo=qXMdqxJ9&atmo=99999999&pg=/et/00/7/2/wmong02.html>

Rebadged communists sweep back to renew 75-year grip on power, Date: 04/07/2000

By JOHN SCHAUBLE, Herald Correspondent in Beijing, <http://www.smh.com.au/news/0007/04/text/world12.html>

Mongolia's communist party returns to power, under shadow of politician's unexplained death <http://www.cnn.com/WORLD/world.report/>.

Mongolia swears in parliament full of ex-Communists

By Irja Halasz - 19 Jul 2000 09:32GMT, <http://news.ft.com>

Thursday June 29 9:18 PM ET, Mongolia Ex-Communists Seek Comeback

By JOSEPH COLEMAN, Associated Press Writer, http://dailynews.yahoo.com/h/ap/20000629/wl/mongolia_election_2.html.

Saturday July 1 5:10 AM ET, Mongolia's New-Look Communists Set for Election Win

By Jeremy Page, http://dailynews.yahoo.com/h/nm/20000701/wl/mongolia_election_dc_1.html.

Mongolia's opposition claims landslide victory

in poll, <http://www.cnn.com/cwc/ASIANOW/story5.html>.

Mongolia's ex-communists in landslide win, http://news.bbc.co.uk/hi/english/world/asia-pacific/newsid_816000/816459.stm.

19) ウドゥリー・ソニン新聞2000年7月4日付

20) ウドゥリー・ソニン新聞2000年7月7日付

21) ウドゥリー・ソニン新聞2000年7月18日付

22) ウドゥリー・ソニン新聞2000年9月8日付

23) MEETING OF G. BUSH AND ENKHBAYAR IN DETAIL, OANA-MONTSAME 2001.11.15 Ulaanbaatar, November 15. OANA-MONTSAME. また、Bush and Enkhbayar Meet in New-York, The Mongol Messenger, November 15, 2001

24) MONTSAME 2002.12.23

25) MONTSAME 2002.12.24

26) MONTSAME 2002.12.24

27) MONTSAME 2002.12.24

28) MONTSAME 2002.12.24

29) MONTSAME 2002.12.24

30) ウヌードゥル新聞2002年12月24日付

31) montsame2002.12.25

32) ウヌードゥル新聞2004年05月26日付

33) ゴーニー・メデー新聞2004年05月25日付、およびウランバートル・ポスト紙電子版 2004.05.28

34) <http://www.aa.e-mansion.com/~mmurai/> の「モンゴル時評」参照

(むらい むねゆき)

《論 文》

内モンゴル・モンゴル族社会の変容(下)

—中国・統治システムからの考察—

土 井 一 寛

第3章 共産党国家政策と内モンゴル自治区の歴史

日本ではモンゴル国(モンゴル人民共和国)の現代史に関連する書物は多いが、内モンゴルに関する書物は極めて少ない。本章では日本ではなかなか紹介される機会が少ない内モンゴル自治区成立前からの歴史を詳細に紹介し、自治区成立当初の民族尊重が徐々に国家統一やイデオロギーに比重が置かれた結果、民族尊重が形骸化していく過程を見ていきたい。

第1節 終戦から内モンゴル自治区成立まで

日本の敗退は内モンゴルの諸勢力にとって独立する絶好のチャンスに見えたに違いない。この当時主に3つの勢力が存在した。一つはかつて満州国駐日大使を務めたハフンガを中心とする東部の動き、もう一つは徳王を中心とする蒙疆連合自治政府の流れを受け継いだボインダライを中心とする内モンゴル人民共和国臨時政府の勢力、さらに陝西北部と西モンゴルを中心としたウランフ率いる中国共産党系の勢力である。ここでは主にハフンガの勢力と中国共産党勢力の駆け引きを中心に内モンゴル自治区成立の経緯を見てゆく。なお本節は主に毛里和子(1998)、『周縁からの中国—民族問題と国家』、東京大学出版社を参考とした。

(1) 東部勢力の動き

1945年8月10日、ソ連軍とモンゴル軍が王爺

廟に迫った時、ハフンガ、ボインマンドらが反日武装蜂起を行い、内モンゴル人民解放委員会を結成し、内モンゴル人民革命党(以下人民革命党と呼ぶ)の再結成を宣言する。8月18日には内モンゴル人民解放委員会の宣言を発表するが、この宣言には二つの特徴がある。

- ・ソ連とモンゴル国との指導の下で内モンゴルのモンゴル人民共和国への合併を進める。そのために内モンゴル人民解放委員会を組織する。
- ・内モンゴルにおけるすべての民族の平等をほかり、中国の革命諸党と提携して中国とモンゴルの民族問題を解決する。¹⁾

この宣言から見られるように、人民革命党はソ連とモンゴル人民共和国の協力の下にモンゴル人民共和国との合併を望んでいたが、その一方で民族問題においては中国の革命諸党、つまり共産党とも協力することも視野に入れていることが分かる。

彼らは合併のためにいち早く行動を起こす。人民革命党の人々は東モンゴルを回り、内外モンゴル合併へ向けた署名運動を行っていたのである。ハフンガ、トムルバゲン、ボインマンドらは10万人の署名を携えて、9月中旬ウランバートルへ向かう。

しかし、彼らを迎えたチョイバルサンへの対応は冷たいものだったらしい。チョイバルサンは彼らにこう述べたという。

「最近の国際情勢の発展および中国国内情勢からして、東モンゴル問題について諸君は中国共産党の指導にしっかり従い、民族自治と人民自治政府の樹立をできるだけ早く行なうべきだ。内モンゴル人民革命党はこれ以上発展させてはならず、解散して中国共産党の統一した指導を受け入れるべきである」²⁾

これによってハフンガ達の夢は断念せざるをえなくなるわけであるが、チョイバルサンの対応には理由がある。その理由として1945年3月のヤルタ会談において外モンゴルの独立が認められたこと、さらに1945年6月の中ソ条約交渉において中国は外モンゴルでの国民投票で承認が得られれば外モンゴルの独立を承認し、ソ連が当時新疆で起こっていた「東トルキスタン共和国」独立の動き等の中国内政に一切干渉しないという約束が結ばれていたということが挙げられる。

(2) 中国共産党系の動き

1945年9月9日、シリンゴル盟西スニトにおいて蒙疆自治政府で最高裁判所長官を務めていたボインダライらを中心に、内モンゴル人民共和国臨時政府が成立する。彼らも6人の代表をモンゴル人民共和国に送り、独立への援助を求めたが断られている。³⁾

彼らの動きに注目したのがウランフを中心とする中国共産党系の勢力である。彼らは8月からボインダライたちと接触している。10月にウランフ達は張家口から西スニトに移動し、臨時政府の青年達を懸命に説得し、「内モンゴル人民代表大会」という大会を開き、政府のメンバー選出をやり直した。結果はボインダライが罷免され、ウランフが代表に就任し、多くの共産党系の人間がメンバーに選出された。なぜこのような結果になったのかははっきりしない。結果として臨時政府はウ

ランフの勢力に吸収されることとなる。

11月26日に中国共産党の指導下、張家口で内モンゴル自治運動連合会(以下連合会と呼ぶ)が成立する。連合会はモンゴル民族運動と中国の解放闘争を同等のものと考えていたことは注目に値する。連合会成立大会のアピールでは国民党の反人民政策に抵抗するよう呼びかけられ、大会に出席した劉瀾濤(中国共産党北方分局委員)は「モンゴル民族は中国共産党との連合によってのみ自治と平等が得られる」⁴⁾と述べている。

11月29日に連合会執行委員会が初めて開かれ、ウランフが執行委員会の代表となり、連合会の方針が定められる。主な内容は以下の通りである。

- ・モンゴル族の牧畜業の発展。
- ・搾取者の財産を没収し、人民に有利な事業を創設し、貧困民を救済する。
- ・教育の普及と生産への連結。
- ・国民党の大漢族主義と日本ファシズムの陰謀を暴露。
- ・モンゴル族と漢族の団結によって初めて解放されることを宣伝する。
- ・モンゴル族と漢族の雑居地域の土地問題を解決する。⁵⁾

共産党とともに国民党と戦うことが解放につながるということをこの宣言で強調している。さらにモンゴル族への配慮も忘れていない。

そしてこの時期から連合会が人民革命党と接触を始めていることも忘れてはならない。

(3) 東モンゴル人民自治政府

モンゴルの統一を断念せざるをえなくなったハフンガ達は1946年1月16日から21日まで東モンゴル人民代表大会を開いた。ここにも共産党の勢力がすでに浸透しており、何人かの共産党黨員がこの大会に参加している。

この大会で憲法草案が採択されているが、この草案では「最高自治機関は法律の制定と公布を行い、中国の主権に抵触しない限りで外国と通商条約を締結する」⁶⁾と書かれている。

この草案からハフンガ達は独立を完全に諦め、出来る限り高度な自治を維持しようとしたことが分かる。独立を諦めたという意味では彼らの目的は達成されなかったと言いきかかもしれないが、「抵抗」も行なう。

ハフンガ達は2月15日に内モンゴル人民自治政府を正式に成立させ、「内モンゴルには共産党を代表する労働者がいないので、共産党は内モンゴルに適さない」⁷⁾という考えから、新内モンゴル人民革命党を組織する。

(4) 東モンゴル人民自治政府の解散と内モンゴル自治区の成立

連合会による東モンゴル人民自治政府への切り崩しはさらに行なわれる。1946年1月25日、東モンゴル人民自治軍指令員のアスゲンと八路軍西満軍区司令員の呂正が阿呂協定を締結する。これによって東モンゴル人民自治軍は西満軍区の指令下に入った。⁸⁾つまり東モンゴル人民自治軍はほぼ解散の状態となった。

3月30日から4月3日まで承德において連合会側と東モンゴル政府側が会談を行なう。いわゆる承德会談(中国語では四三会談という)である。この会談でハフンガとボインマンドはウランフの「説得」によって共産党に入党することを約束する。この会談の主な内容は以下の通りである。

- ・内モンゴル民族運動の方針は平等自治(区域自治)であり、独立運動ではない。
- ・中国共産党の指導下解放をめざす。
- ・東モンゴル人民代表会議の後、東モンゴル人民自治政府を解散する。⁹⁾

この会談によって東モンゴル人民自治政府の解散と内モンゴルにおける共産党の力は決定的となる。どのような理由からハフンガ達が東モンゴル人民政府を解散すると決断したのか決定的な証拠は分からない。しかし、1947年4月の内モンゴル人民代表大会の彼の演説がヒントを与えてくれているのかもしれない。彼は「われわれは国民党反動派の攻撃を打ち負かせるだろうか。いま主体的力は弱く、内モンゴルの解放、自由で幸福な日々を勝ち取るには中国共産党と手を携えなければならぬ」¹⁰⁾と述べている。内モンゴルにおいて出来る限りモンゴル族の権利を獲得したいという気持ちで共産党と手を取り合うことを決断したのであろう。

1947年5月1日王爺廟でウランフを代表とし、フルンボイル、ノンムレン、興安、シリングル、チャハル盟を管轄した内モンゴル自治区が正式に成立した。その後、内モンゴル自治政府施政綱領を制定する。主な内容は以下の通りである。

- ・自治政府はモンゴル族各階級が各民族と連合した高度な区域自治性民主政府であり、中華民国(後の中華人民共和国)の一部である。
- ・自治区内のモンゴル、漢、回族等各民族が団結し、帝国主義者およびファシズム大漢族主義者を粉砕する。
- ・区域内の民族は一律平等である。
- ・モンゴル族の裏切り者の土地、財産を没収し、土地を持たないもしくは土地を多く持たない農民、貧困民に分ける。
- ・モンゴル族、漢族の土地問題を合理的に解決し、人民の生活を改善する。
- ・農業、牧畜業の生産発展奨励。¹¹⁾

この綱領には主に四つ特徴がある。一つは自治区が中国の領土であると明確に示している、二つ目は自治区の成立が国民党との戦いを示している

点、三つ目はかつてのモンゴル族の置かれた状況を考慮した上で、民族の平等を明文化している、そして現代の内モンゴルを語る点において極めて重要なことであるが、当時の経済状況を重視し、農業、遊牧業の発展を大きな課題に挙げていることである。

第2節 民主改革と中華人民共和国成立

本節では主に内モンゴル自治区成立当初の土地改革を通し、モンゴル族の立場を自治区政府が大変尊重していたことを明らかにしていきたい。なお、本節は郝維民主編(1991)、『内蒙古自治区史』、内蒙古大学出版社を主に参考とした。

(1) 他勢力の掃討

内モンゴル自治区が成立したものの、未だに現在の内モンゴル自治区範囲内の中部や西部は国民党の勢力下にあった。国共内戦において共産党が徐々に有利になり、1948年10月23日には包頭を支配下に置く。国民党はこの劣勢の中、綏遠省(現在のフフホト、包頭周辺)主席であった董其武は綏遠に関する問題を討議する和平推進会を組織する。しかし、国民党の劣勢は続く。

1949年3月2日から北平(現在の北京)において共産党代表と国民党代表は綏遠の問題について議論を始め、3月23日に共産党は毛沢東の案(綏遠方式¹²⁾と呼ばれる。主要な国民党軍を倒すため、あえて国民党軍隊の一部を残しておき、一定の時間をおいてその一部の軍隊を後に人民解放軍に再編するという案)に基づき、国民党と綏遠協議に署名をする。これによって綏遠における人民解放軍と国民党軍の勢力範囲の境界線を定めた。

両党の協議中やその後も国民党の強硬派などが共産党のペースで進むこの綏遠の和平協議や董其武の動きを阻止しようとするものの、9月19日、綏遠の国民党の軍政幹部などは綏遠を解放し、共

産党に入ることを毛沢東に電報で伝えた。これによって綏遠は共産党の支配下に入った。

一方、国民党の支援を得ていた徳王は人民解放軍の影響力が未だに至っていないモンゴル西部(現在のアラシャン)に逃げ、モンゴル自治運動を行なう。1949年4月13日にはモンゴル自治政府を成立させる。しかし解放軍の蘭州の解放や綏遠の共産党による解放など、それに加えてモンゴル自治政府の人間には様々な意見の対立によって分裂も起こり、1950年2月27日に徳王はモンゴル人民共和国で逮捕された。

(2) 土地改革

内モンゴル自治区が成立すると、まず行なわれたのが土地改革である。ここでは農村地区と遊牧地区について中華人民共和国成立前後を通して見てゆく。

(2.1) 農業地区の土地改革

1947年10月10日、共産党は中国土地大綱を公布し、封建的土地制度を廃止すると宣言したことに伴って、内モンゴルでも土地改革が行なわれる。

土地改革前には農村人口の10%を占める地主が全土地の70~80%を占めるのに対し、90%を占めるモンゴル、漢族の農民が20~30%を占める状況であった。農民は地主の土地を借り、そこの収穫物の50%以上を地主に納めなければならなかった。¹³⁾

内モンゴルにおいての最大の特徴は土地の問題が民族問題と絡んでいることである。例えば農業に従事するモンゴル族の農民は農業の経験が浅いため、漢族にその土地を貸す。その漢族が再度他の漢族農民にその土地を貸すことにより、モンゴル族と漢族との間に複雑な問題が起きていたという。¹⁴⁾この様に清朝以来の漢族入植がモンゴル族と漢族の間に摩擦を生じさせていた。

この様な背景をもとに、内モンゴル共産党委

員会はその土地の状況や民族の特徴を考慮した上で、内モンゴル解放区土地改革の基本政策を制定する。主な内容は以下の通りである。

- ・封建的土地所有制を廃止する。
- ・土地改革前の地主、王公、高利貸しの借金を破棄する。
- ・封建地主の土地を人口に応じて土地の持たないもしくは土地をあまり持たない農民に配給する。
- ・モンゴル族の一般地主、富農の土地は動かさない。¹⁵⁾

注目すべきは四つ目のモンゴル族の一般地主、富農への対応である。民族問題が絡んでいるため、彼らに対しては大変宥和的な対応をとっている。しかし、11月から土地改革が開始されるが、モンゴル族の農業状況をあまり理解していなかったため、財産没収や階級区分において誤った措置が講じられた。

この土地改革では農業ローンや農業集団化の足かけりとなる互助組の奨励などを通して農業生産は奨励され、日中戦争期に大きく減少した農業総生産値は1949年に1946年比で39.63%増加した。¹⁶⁾ 中華人民共和国成立後には農業集団化が大きく呼びかけられ始め、1952年末までにはおよそ6万の互助組が組織され、多くのモンゴル族と漢族がともに参加した。試験的に初級農業合作社が組織されたのもこの頃である。

(2.2) 遊牧地区の土地改革

フルンボイル、シリングルなどの東部を中心に多くの人が遊牧に従事していた。遊牧地区も農業地区と同様に王公貴族、チベット仏教のラマ達などが封建的特権を用い、牧民を搾取していた。例えばシリングルのとあるホショーでは総戸数の5.9%を占める32戸の牧主がホショーの総家畜数の47.9%を所有していたという。¹⁷⁾ 家畜所有者は

自分の家畜を牧民に放牧させ、一年間で生まれた子家畜、皮、毛などをすべて所有者に渡し、牧民はわずかな乳製品のみを受け取ることができた。

自治区政府は内モンゴルでの遊牧制度が搾取のみならず、資本主義的要素も一部存在し、牧民と牧主の信頼関係が存在するなどの特徴を考慮し、民主改革を行う上で遊牧地区での階級関係や経済的特徴を踏まえて、生産関係の改善、生産力の解放を実行することとした。

1947年11月に内モンゴル共産党委員会は遊牧地区民主改革の基本政策を制定する。主な内容は以下の通りである。

- ・内モンゴルの草原をモンゴル族の公有地とし、封建所有制を廃止する。
- ・封建的特権、奴隸制を廃止する。
- ・遊牧民、草原、自由放牧を保護し、牧民と牧主の双方の利益を守るという前提の下、段階を踏んで、牧民の生活を改善し、遊牧業を発展させる。¹⁸⁾

農業地区の改革と同様、急激な改革を避け、牧民のみでなく、牧主の利益もある程度保護するという政策(牧工牧主両利)を執り、地域の権力を有していた牧主との不必要な対立を避けたのであろう。

もう一つは農業と遊牧は混在している地域(半農半牧地区)への対応も重要であった。漢族官僚だけでなく、一部のモンゴル族王公や大牧主も過度な開墾を奨励した。一部のモンゴル族は開墾に抵抗し、遊牧を続けるが、一部のモンゴル族は農業生産に転向した。しかし、生産経験が浅いために、あまり成功はしなかった。その一方、漢族は農業技術が高く、遊牧に転向することを望まず農業に従事した。このような階級的問題と農業・遊牧の対立からモンゴル族、漢族の対立は大変深刻であった。この対立を考慮し、政府は農業が遊牧

に影響を与えることを防ぎ、遊牧を生業とするモンゴル族の生活を守るため、開墾の禁止、草原の保護を中心とした政策を打ち出した。

中華人民共和国成立後も新たに解放された西部などで土地改革を継続した。遊牧地区での改革、経済回復と発展を自治政府は党の民族政策へと定着させ、モンゴル族、その他の民族の遊牧経済が発展する機会として大変重要視していた。

さらに若干上述したが、当時の遊牧制度において牧主の役割が極めて大きかったため、牧主をすぐ追放するのではなく、遊牧発展のために牧主の存在を重要視した。ゆえに民主改革を行う上で、牧民のみでなく、牧主の利益もある程度保護する牧工牧主兩利という政策を基本とした。この措置は農業地区にはなく、モンゴル族との関係を極めて意識した政策であることをここで特筆しておきたい。

半農半牧地区では民族間の対立、農業・遊牧の矛盾を解決することを念頭に置き、遊牧を優先する方針を実行する。その一方で農牧業相互支援を奨励し、自然災害に弱い遊牧に対して、農業が穀物や資料を提供支援し、遊牧の家畜を農業輸送の家畜として提供するなどにより、共同发展することを目標とした。

第3節 社会主義建設

本節も郝維民主編の『内蒙古自治区史』を参考にして、中華人民共和国の社会主義建設とそれに伴った内モンゴル自治区の動きを概観していきたい。

1953年8月から毛沢東は「過渡期の総路線」というものを提唱する。この過渡期は中華人民共和国成立から社会主義改造の基本的完成までの時期を表し、この過渡期に長い時間を用いて徐々に社会主義工業化を実現し、農業、手工業、資本主義工業・商業に対しても社会主義改造を実行するというものである。

この過渡期の総路線に従って、第一期五カ年計画を制定する。その内容はソ連の支援によって集中的に社会主義工業化の基礎を確立し、農業部門では部分的に集団所有制を特徴とした農業生産合作社を発展させるというものであった。

ちなみにこの総路線の提唱の中で民族工作についての任務も示されている。その任務は「祖国統一と民族団結を強固にし、偉大なる祖国という大家庭を建設する。その大家庭の中でその各民族がすべての権利上平等であることを保障し、…(省略)…歴史的に残存している民族間の不平等をなくし、遅れた民族を先進的民族にする」としている。¹⁹⁾

これらの政策を基本として内モンゴルでも本格的に社会主義建設が行われる。ウランフは「祖国建設と密接に歩調を合わせ、地方工業発展によって自治区内における国家の重工業建設と農牧業の生産発展を支援し、…(省略)…生産発展を基礎とし、人民の物質レベルと文化生活レベルを徐々に向上させる。歴史的に残存している政治、経済、文化的に遅れている不平等な状態を是正する」と述べている。²⁰⁾

中央の第一期五カ年計画に従って、内モンゴル自治区も自治区の国民経済に関する第一期五カ年計画を制定し、相互援助を基礎とする農牧業生産を発展させ、国家による社会主義工業化を支援すること(国家重点建設においては包頭工業基地を重視した)を目標とした。

この1953年から1957年の内モンゴルにおける第一期五カ年計画の特徴は①農牧業もさることながら工業の発展を極めて重視していた、②自治区の経済という観点ではなく、国家経済の一部として内モンゴル経済をとらえていた、③政治、経済、文化において遅れている面を是正する、この三点と言えよう。

(1) 農業における社会主義建設

モンゴル族、漢族は土地改革後、地主の土地を分配されたものの、生産する時に必要なもの(農耕器具や技術)が足りなかったため、各家庭が単独で農業を行うことは困難とされた。そこで農業の集団化が始まる。1952年末からおよそ70%の農家が集団化に参加し、1954年には総戸数の17.27%、1956年2月末までに91.6%が農業合作社に参加した。1955年には合作社化が急すぎるという意見も出されるなどしたが、基本的には社会主義的経済制度を確立し、人々も社会主義建設に対し積極的に参加したと言う。²¹⁾

この時期もかろうじてモンゴル族をはじめとする少数民族を配慮していた。他民族が雑居している地域では農業合作社の一種である民族連合社が多く組織され、この民族連合社では少数民族への配慮を重視している。例えばモンゴル族であれば、モンゴル語・中国語による二言語での表記、風俗習慣の尊重、信仰の自由などである。さらに農業経験の浅いモンゴル族などの少数民族の技術向上を支援することも謳われている。初級農業合作社では社員が個人で少量の家畜を飼うことを認め、とりわけモンゴル族には馬、羊、牛などを飼うことを認め、その認める範囲は漢族より寛大だった。

農業地区と半農半牧地域では比較的役畜(農業のための家畜)と牧畜(遊牧での家畜)が多かったため、これらを入社させる上でも工夫がなされた。家畜を入社させると、牧主に合理的な報酬を与えるのが原則だったが、多くの方法があったという。基本的に牧主の意見が尊重され、家畜を入社させるか否かなどすべてが彼らの自由選択であった。

(2) 遊牧における社会主義建設

1953年12月、内モンゴルの遊牧地域でも社会主義合作化が決定されたが、ウランフは「しかし民族の特徴、生産の特徴などを見ると農業より多くの注意すべき違いがある。これらの違いは我々

が社会主義改造を考える上で、農業とは異なる実施方法を探る理由である」と述べている。遊牧地域にはモンゴル族が極めて多いゆえに彼らに出来る限り「刺激」を与えないようにした最大限の配慮だったのだろう。さらにウランフは「かなり長い時間を用いて、遅れた小生産の個人経営的遊牧経済を現代的、合作的な社会主義遊牧経済に改造し、発展させる」と述べている。²²⁾

1955年までは主に牧業互助組で、わずか20社の牧業合作社が試験的に行われていた。1956年から「緩やかな政策、寛大な方法、長時間」の原則の下、本格的な社会主義改造が開始され、一年で総戸数の22%が牧業合作社に入社し、61%が牧業互助組に参加した。主な政策、方法は以下の通りである。²³⁾

- ・一社の戸数は10戸から30戸。
- ・家畜を頭数に応じて入社させ、割合に応じて利益を配分するなど牧民が納得する方法を採用する。
- ・制限数はあるが、一定の家畜を自ら所有してよい。
- ・社員の収入増加を保障する。²⁴⁾

そして牧主を中心とした遊牧制度にもメスが入られる。牧工牧主両利の政策実施後、封建的制度を廃止し、その代わりに制限付きの雇用制度を内モンゴル政府は許可していた。遊牧地区での合作化が比較的順調なことから、牧主に対しても社会主義合作化が実施されるが、その方法は他の地域の資本家に比べて寛大なものであった。それは牧主が公私合営牧場(一部は合作化、一部は牧主が所有)を立ち上げるか、牧業合作社か国営牧場に入社するか、の三つの選択肢であった。多くの牧主は公私合営牧場に入ることとなった。この様に一定の譲歩を内モンゴル政府は行う代わりに、資本主義的思想を牧主に捨てさせ、政治・経済の上

で社会主義的思想を持つようにさせた。

さらに中国成立後も、チベット仏教寺院は多くの家畜や生産資料を持っていた。それと同時に一部のラマ僧はすでに合作社に入社をしていた。内モンゴル政府は教育や話し合いを通して、牧主よりさらに寛大にラマ層を扱い、公私合営牧場、国营牧場、生産合作社に入社させた。

(3) 自治区領土の拡大

この時期に実施されたこととして自治区の領土拡大があると松村嘉久は『中国・民族の政治地理』で指摘している。

松村嘉久によると、1949年5月に成立したフルンボイル、ノンムレン、興安、シリングル、チャハル盟を領土とする内モンゴル自治区は1956年まで領土の拡大を続ける。

1956年まで領土拡大が行われるが、まず第一回目は1949年5月に行われた。同時の遼北省ジェリム盟と熱河省のジョーオダ盟が自治区に編入された。第二回目は1951年9月にチャハル省との境界線とをめぐって調整が行われ、チャハル省は山西省と河北省に分割され、チャハル省はなくなってしまう。

1954年1月の第三回目に領土拡大である。この領土拡大で綏遠省が内モンゴルに合併され、首府が歸綏市(1954年4月にフフホト市に改名)となる。最後の第四回目は1955年7月に熱河省を廃止し、内モンゴル自治区、遼寧省、河北省にそれぞれ分割され、内モンゴル自治区には赤峰(オラーンハダ)県(現在の赤峰市)などが内モンゴルの領土になった。

注目すべきは第三回目の領土拡大である。綏遠省合併によって内モンゴルに居住するモンゴル族の比率が激減したのである。内モンゴル自治区成立当初は人口200万人、モンゴル族人口50万人で、モンゴル族人口比率は25%だった。第一回領土拡大後、人口250万人、モンゴル族人口80万人で、

モンゴル族人口比率が32%に上昇する。しかし、第三回目に綏遠省がモンゴル自治区に合併されてから、人口600万人、モンゴル族人口100万人で、モンゴル族人口比率は17%に激減する。²⁵⁾

ではなぜ共産党はこの様な領土拡大を行ったのか。松村嘉久は内モンゴル・外モンゴルの合併や内モンゴルのみの独立を志す勢力への戦略であると指摘する。中華人民共和国成立後も継続的に行われた内モンゴルへの漢族の入植や漢族が比較的多い綏遠省などの地域を内モンゴルに合併することによってモンゴル族の団結が困難になり、独立は非現実的なものになったとも松村嘉久は述べている。²⁶⁾

第4節 大躍進政策と文化大革命の混乱

本節も前節と同様、郝維民主編の『内モンゴル自治区史』を参考とし、内モンゴル自治区での整風運動から文化大革命期までを概説したい。前節でふれた「過渡期の総路線」は社会主義建設が開始されたが、この時期の国家方針としては「かなり長い時間」をかけて実施するというものであった。しかし、1956年中国共産党第八回全国大会において農業、手工業、資本主義的商工業の社会主義的改造が完成したと宣言され、以降急激な社会主義建設が実施される。²⁷⁾

ではなぜ社会主義建設が加速することになったのか。天児慧は、毛沢東の性格を指摘すると共に、朝鮮戦争、日米安保の調印などアメリカによる「中国封じ込め」が実施され、建国間もなく、国家体制が確立されていなかった中国にとっては外的環境を意識せざるをえず、体制確立が急務であったと指摘している。²⁸⁾そしてその急激な社会主義建設は大躍進政策、文化大革命へと続く。

この時期は内モンゴル自治区に決定的な変化をもたらしたと言ってよい。かつての民族尊重よりも国家体制の確立という波に内モンゴルは飲み込まれ、民族的、地域的差異は完全に無視され、

ひいては「モンゴル族は後進的」という考えの下、集団化が実施されていくのである。

(1) 整風運動

共産党中央は1957年4月27日、整風運動に関する指示を出す。整風運動とは人民内部の右派、つまり官僚主義的、主観主義的な人間を一掃し、新しい社会主義的建設の需要に応えるために、党のマルクス主義のレベルを向上させる目的で行われたものであった。それに加え、毛沢東は党外部の人からも多くの意見を聞くことを提唱する。いわゆる「百花斉放、百家争鳴」である。

ウランフはこの時期、内モンゴルの現状に関して「主な問題は労働階級と資本階級の矛盾ではなく、内モンゴルの経済・文化の遅れや各民族の要求を満足させることができない矛盾である。これが人民内部の矛盾である。この矛盾を解決する道は社会主義建設である。内モンゴルの矛盾は他の地域とは異なる。主に民族的特徴と地域的特徴である」と述べている。²⁹⁾

ウランフの講話に伴って、党外部の人が参加した座談会では主に民族政策の実施状況や民族関係に関してチェックが行われた。このような座談会において自治区の幹部の中に大民族主義思想(漢族が中心であるという考え方)や民族主義思想が残存しており、それが各政策の執行に影響しているという意見が出された。

この運動において共産党が予想していた以上に批判が展開される。これに動揺した毛沢東は逆に批判した人物を「右派分子」して攻撃し、批判を封じ込めた。内モンゴルにおいてもこの整風運動によって3731人の人が誤って右派分子と決め付けられ批判的となった。³⁰⁾

(2) 大躍進政策の推進

毛沢東が開始したこの「右派」への攻撃を発端として、中国は急進的な社会主義建設の道を歩み

始める。1958年5月5日、共産党第八次全国代表大会第二回会議が北京で行われ、人民内部の矛盾を処理する、全民所有制及び集団所有制を發展させるなどを目標とした総路線が採択し、毛沢東は反急進派を引き続き批判した。この会議によって正式に大躍進政策は推進され、数年後にはイギリスの鉄鋼生産量に追いつくなどの科学的根拠に欠いた目標が人民日報で掲載され始めたのもこの頃である。

中央の決定に伴い、内モンゴルで第二次五カ年計画期間に以下の内容が決定される。

- ・地方工業の生産値を3.5倍程度にし、地方工業と中央国营工業を合わせた生産値が工業、農業、遊牧業を合わせた総生産値の60～70%を占めるようにする。
- ・農業、遊牧業の生産を8年もしくはそれより短期間で10年の計画を完成させる。
- ・遊牧業は3年で集団化を実現し、5年で人・家畜用水を解決する。水のない草原をなくし、基本的に定住遊牧を実現する。
- ・平均10～20%の割合で家畜を増やし、10年で家畜総数を5000万頭から6000万頭にする。³¹⁾

この決定事項を見ると、まず内モンゴルでも工業が極めて重視されるようになったことが見てとれる。もう一つ忘れてはならないことは第一期五カ年計画においては長い時期をかけて社会主義建設を行うとしたが、第二期五カ年計画では急激に社会主義建設が推進された。ゆえに内モンゴルの民族的特徴や地域的特徴が無視され、遊牧の定住化が正式に決定される。これについては後に詳細に述べたい。

工業の大増産が決定されてから、大小合わせて工場、採掘場が7月末までに92467ヶ所も作られた。³²⁾ 8月17日に中央は1070トンの鋼産量計

画を発表したものの、粗鋼技術の問題などで生産量は思うように上昇しなかった。その上、反右派闘争以来、下級幹部が上級幹部に異議申し立てが出来る環境はなく、内モンゴルでも生産を虚偽広告する深刻な事態となった。そして粗鋼に多くの男性が参加したために、農業生産が大きく減少し中国全体で2000万の死者が出たことは有名な話である。³³⁾

(3) 人民公社の実現

この大躍進政策において、一番大きな出来事は人民公社の実現である。大躍進政策の推進が決定されてから、人民公社が多くの農村で建設される。そして1958年8月17日から23日まで中国共産党政治局拡大会議において、人民公社建設に関する決議によって人民公社建設の動きは最高潮に達し、10月には全国の農村において基本的に人民公社建設が完了する。

人民公社という組織について簡単に説明をすると、農業合作社や牧業合作社のもつ生産組織と鎮やモンゴル族行政単位のソムに当たる行政組織が一つになった基礎単位のことである。内モンゴルでは2000戸程度の農家もしくは牧民が一家の人民公社を組織し、人民公社の中には工業、農業、商業、学校、軍隊など人民にとって必要な施設や組織が備え付けられていた。

内モンゴルでも8月17日から23日も政治局拡大会議に伴って、8月31日に盟市第一書記会議が開かれ、内モンゴルでの秩序を有した人民公社建設が積極的に要求され、先に農村で人民公社建設を行い、それを遊牧地区での建設の参考にする事とした。9月29日までに農業地区、半農半牧地区で人民公社建設が完了し、803社の人民公社が建設された。ちなみに人民公社建設完了までに費やした時間は内モンゴル党委員会拡大会議で人民公社化の方法が決定されてからわずか9日であり、人民公社建設が極めて急激であったことを

物語っている。

農業地区における人民公社化運動が本格化するなか遊牧地区でも人民公社建設が着手された。5月から10月の間に牧業合作社もしくは公私合営牧場に入社した牧民が90%に急上昇し、10月中旬には基本的に集団化が完成する。そして一気に人民公社建設を推進し、1959年1月19日には総戸数94%のモンゴル族、エヴェンキ族の牧民が152社の人民公社を建設した。³⁴⁾

当時の遊牧地区での人民公社では政府が定住遊牧を推奨し、広範囲の移動が禁止され、多くの牧民が固定家屋を建て定住生活を開始した。人民公社内の家畜は公有家畜とされ、モンゴル族の伝統的な遊牧制度は廃止され、五種家畜(馬、羊、牛、山羊、らくだ)をそれぞれの種類に分け、各牧民に一種類の家畜を飼うようにさせた。この方法によって多くの家畜が死んでしまったという。当時はそれが「先進的」とされたのである。³⁵⁾

そして当時農業は遊牧よりも進歩的とされたために遊牧民は農民になるように指導されたという。遊牧は国家と内モンゴルの工業化のみならず、農業を発展させる上でもなくてはならない経済システムであり、工業、農業あつての遊牧として位置づけられた。³⁶⁾

この人民公社では社員の能力は全く考慮されない同額給与システム、食事などは無料でいくらかでも食べることが可能であるなど採算を全く考慮しないなどの理由から人民公社は全く成功しなかった。さらにこの急激な動きに対して見直しも行われたが、決して完全なものではなかった。

(4) 文化大革命

1966年5月から1976年10月の間、文化大革命の嵐が吹き荒れる。文化大革命とは資本階級などの反修正主義者がすでに党、政府、軍隊、文化界で主導権を握っており、彼らを追い出すために全面的に下から上の、かつ公開で人民を発動し、

彼らを暴きだすという毛沢東が発動したものである。1966年5月4日から26日に北京で中国共産党中央政治局拡大会議が開かれ、文革の綱領的な文献となる五・一六通知が採択された。さらに康生を顧問とし、江青などを副組長とする中央文化大革命小組を組織する。このグループが文化大革命期に大きな力を握ってゆくことになる。

この会議に参加していたウランフは批判の対象となっており、この文革の波は北京の次に内モンゴルへ向かう。中国共産党華北局はウランフの牧民牧主兩利政策などの政策に対し、「階級闘争を否定し、階級闘争をなくすものである」と断罪している。8月3日にはフフホト市の第一書記が反革命分子とされ、更迭されてしまう。8月5日から内モンゴル大学で弁論大会が開かれ、学生の文革に対する熱狂的支持を得たことがきっかけとなり、大学から中学、党機関などに文革への熱狂が瞬く間に拡大した。学校は休校となり、「革命」に参加する紅衛兵が組織されたのもこの時期である。そして、8月16日にウランフは党委員会第一書記の座を解任される事態に発展した。

1967年1月6日に上海で上海市工人革命造反総司令部が上海市の党政権を奪い、上海市革命委員会を設立する事態が起こる。これを期に各地でこの様な奪権行為が発生する。内モンゴルでもフフホト紅衛兵第三司令部が党中央の支持を得て、軍区を掌握し、11月1日に内モンゴル革命委員会を設立し、奪権に成功する。これを期にすべての市やアイマグ(盟)、ホショー(旗)、県そして96%の人民公社に革命委員会が設立される。

ここで強調しておきたいことは内モンゴルにおける文化大革命は党中央の支持・決定があつてのものであったということである。上述した内モンゴルにおける奪権に関しても党中央は1967年4月13日に周恩来によって出された講話(4・13決定と呼ばれる)で、フフホト紅衛兵第三司令部を認定し、対立する組織を保守組織とすると決定さ

れたという中央の「後押し」があつたからである。³⁷⁾ さらに図們 祝東力著の『康生与“内人党”冤案』を見ると、中央政治局常務委員であつた康生が革命派の奪権運動後に新たな軍司令員として就任した滕海清に内モンゴルの文化大革命においてウランフの影響が多いことやモンゴル、ソ連、日本のスパイがいるなど多くの指示を出し影響を与えていたことがよく分かる。³⁸⁾

内モンゴルで様々な批判運動(ソ連修正主義者や日本のスパイなど誤ったレッテルを張られた人が多数いた)が展開されるが、最大の冤罪として知られるのが「新内モンゴル人民革命党掘り出し運動」である。この運動の発端は1967年10月に明らかにされた内モンゴル革命党の存在を示す資料(二〇六案件と呼ばれる)である。この資料には革命党の大会が開かれ内外モンゴルの合併を意図するものが示されていたらしく、この資料は革命委員会が捏造したものとされている。³⁹⁾ 重要なことはこの運動が党中央と綿密に連絡を取り発動された計画的な運動であつた点である。この運動によって34万6千人の人が迫害を受け、1万6222人が死亡し、その75%がモンゴル族であつた。⁴⁰⁾

この時期に冤罪で批判された幹部や一般の人々は我々の想像を絶する批判を受けていた。図們 祝東力著の『康生与“内人党”冤案』にはいくつかの拷問や冤罪が紹介されている。ウランチャブの四子王旗(ホショー)のとある公社の秘書夫婦はカミソリで肉をそぎ、その傷口にアイロンをあて、虐殺された。⁴¹⁾ シリンゴルのあるホショーの牧民は内モンゴル人民革命党の罪で批判をされたが、この漢語(中国語)での「内モンゴル人民革命党」という単語の意味が分からず、この牧民は自分の牛を売りお金を換え、店で「内モンゴル人民革命党」を買おうとしたそうである。⁴²⁾

この文化大革命はモンゴル族の文化にとって大きな打撃となった。政府は民族問題が階級問題で

あるという誤った認識の下、民族問題がすでに消滅したと認識し(民族融合論)、民族教育行政機関が取り壊され、民族語の出版も原則禁止された。フフホト市では10校あった民族小中学校がすべて廃止され、モンゴル語教師93人中、迫害を受け、3人が死亡、55人が学校を追われ29人が転勤させられた深刻な事態となった。⁴³⁾

さらに当時は中ソ対立の関係から防衛上の措置として、フルンボイル盟を黒龍江省の管轄に、ジェリム盟を吉林省の管轄にするなどして行政範囲を3分の1に縮小し、これがモンゴル族に大きな不満を抱かせることとなった。⁴⁴⁾

第5節 改革解放と社会主義市場経済

江青などの四人組の逮捕により文化大革命が終結したものの、急激な社会主義建設はとりわけ中国の経済に大打撃を与える結果になった。鄧小平が結果的に主導した1978年12月の中共第十一期三中全会において長年の文化大革命の混乱を修復し(批判された人の名誉回復など)、経済再建を最重視した近代化建設に重点を置くことが決定した。この中央の決定は言うまでもなく内モンゴルにも大きな変化をもたらした。なお、本節では主に王鈺主編(1998)、『中華人民共和国地方簡史丛书 当代内蒙古簡史』、当代中国出版社を参考にした。

(1) 人民公社の解体と改革

人民公社が生産組織と行政単位が合わさっていたために権力集中になったこと、収益分配が完全な平等主義的配分であったことから生産量はあまり向上しなかった。そこで1978年12月の中共第十一期三中全会以降、1980年党中央は農家生産請負制がすべての地区の生産発展に適応すると下達をする。これに伴って内モンゴル政府は各地域の状況に応じて、いかなる生産形式、組織、報酬形式も認めるとした。1982年に土地以外の生産

資料を各農家に戻し、農家請負制を実施する決定を下し、事実上人民公社は廃止となった。1984年までには人民公社の行政単位を分離し、ソムと郷の行政単位建設を完了している。

1982年の農業地区における農家生産請負制の影響下、遊牧地区でも生産責任制が実施される。今まで公有であった家畜を各牧民に戻し、私有家畜とし、1990年代には草原の使用権を個人や共同経営している牧民たちに移行し、牧民たちは「返された」「自らの」草原を鉄線などで囲み、その中で遊牧を行った。しかし、「返された」土地には限りがあり、草が足りないため、場所によっては自らの土地で飼料を育てたり、飼料を買うなどして対策を講じている。この「返す」という農業的考えに基づいた政策によってモンゴル族の伝統的遊牧は完全に崩壊したということをここで強調しておきたい。

農業地区、遊牧地区の改革は都市へ移動する。近代化建設を大々的に発展させるため、国営企業に改革のメスを入れた。1984年5月国務院が企業の権利拡大十条規定を出し、生産、経営、計画商品価格などに一定の自主権を与えることを許可した。内モンゴルで資源の豊富さを充分に発揮し、総合的に開発をすることを戦略とした。

さらに内モンゴルは地理的位置から対外開放にも力を入れる。自治区は対外貿易に関して今まで輸出に加えていた制限をなくし、企業に自ら販路を開拓することを許可した。エレンホトや満州里などの都市を積極的に利用し、当時のソ連、モンゴル人民共和国などの国との貿易を推進した。この対外開放によって1985年までに59の国と地域が内モンゴルと経済協力関係を結んだ。

この様な一連の改革によって経済面では飛躍的な発展を遂げた。1987年に1982年と比較して自治区の国民総生産は56.3%、農業総生産は31.8%、工業総生産は69.3%上昇した。平均年

収は都市住民が809円で84.3%、農民が389円で42.4%、牧民が663円で67.3%とそれぞれ上昇した。⁴⁵⁾しかし、大きな問題も存在した。それは他の地域(とりわけ沿海部)に比べて経済発展速度は遅く、経済効率も低かった。⁴⁶⁾

民族政策について触れておくと、1981年中共中央は内モンゴル政府に文革期の民族政策を是正し、新たに民族平等、団結協力、共同繁栄を柱とする民族関係を新たに確立するように指示をした。これは民族政策が経済、文化、平等保護に重点を置いたことを意味した。

(2) 南巡講話

1992年1月18日から21日まで鄧小平は上海、武漢、深圳などの開放都市を訪問し、さらなる改革開放を加速するように指示をした。いわゆる「南巡講話」である。

内モンゴルでも1993年3月自治区経貿庁、対外経済協作事務局は国内外の有利なチャンスをしっかりつかみ、すべての地域において改革開放を実行し、あらゆる方法で資金、技術人材を導入することによって開発、改造経済効果と利益を促し、全区の経済発展を加速するよう通知、要求した。4月には自治区政府には優遇政策と国境地帯経済発展戦略を発表する。この優遇政策は沿海部との経済協力の下、国内の他の地域から来た企業に三年もしくは五年の所得税免除、輸出入に関して自主権を与える、土地使用費の五年免除など国内企業を呼び込みやすい環境を整備した。国境地帯発展経済戦略とは国境地帯開放地帯、鉄道開放地帯(鉄道沿線にそった地域で指定する)、資源開発区の「兩帯一区」において輸出加工生産地、科学、経済技術開発区を建設し、国内外の資金、技術、人材を呼び込む政策である。

国有企業の改革もさらに加速した。1992年7月には給料分配権、人事管理権、機構編成権などの権利をさらに国有企業に与え、市場経済に対応

できる制度を整えてゆく。さらにこの時期、株式経営も試された。

第4章 現代内モンゴルの諸問題 ～モンゴル語と漢語の関係から～

第1節 普通話の推進

前章において内モンゴル自治区成立以降に共産党政権が国家体制やイデオロギー、そして国家統一を重視した結果、中国の「一地域」である内モンゴルのモンゴル族社会にどのような影響を及ぼしてきたかを概観した。この国家体制の確立を共産党は現在も非常に重視している。

前章第五節で述べた通り、鄧小平が主導した対外開放は結果的に中国の経済発展を促した。さらなる経済発展を促すために、現在の中国政府は更なる国家統一を目指している。その国家統一に必要なものの一つに「言語の統一」がある。確かに漢語(中国語)が中国では常に優位な地位にあるものの、ご存知の通り、漢族の中にも方言が存在し、北京語(標準語の元とされた)の他に広東語や上海語などが存在する。筆者は中国でこの広東語や上海語を聞いたことがあるが、北京語とは全く異なり、まるで外国語のように聞こえたものである。北京に住む漢族の友人でさえも南の人間が言っていることは分からないという現状なのである。ましてや少数民族がその少数民族の言語や独特なアクセントを持つ漢語を話すと、コミュニケーションに支障を生じる。

そこで共産党政権は普通話(中国語で標準語という意味)を推進するために2000年10月31日に「中華人民共和国国家通用語言文字法」という法律が制定される。ではその法律の一部を見てみたい。

第1条 国家通用言語文字の規範化、標準化およびその順調な発展、そして国家通用言語文字が社会生活の中でさらに機能を発揮

し、各民族・各地区の経済文化交流を促進するため、憲法に準じ、本法を制定した。

第2条 本法が言う国家通用言語文字は普通話と規範漢字である。

第3条 国家は普通話および規範漢字を普及させる。

第4条 公民は国家通用言語文字を学習し、使用する権利を有する。

国家は公民が国家通用言語文字を学習し、使用してもらうために、あらゆる環境を提供する。

地方各級政府及び関係部門はあらゆる措置を講じ、普通話と規範文字を普及させる。

第5条 国家通用言語文字の使用は国家主権と民族の尊厳、国家統一と民族の団結、社会主義物質文明建設と精神文明建設に有利であるべきである。

第8条 各民族はその民族の言語文字の使用と発展させる自由を有する。

少数民族の言語・文字と使用に関しては憲法、民族区域自治法及びその他の法律の関連する規定に依拠することとする。⁴⁷⁾

この様に国家は漢語に「お墨付き」を与え、国家統一、民族の団結、そして経済促進のためにこの法律を制定したのである。さらに2000年7月3日、第9回全国人民代表大会常務委員会第16回会議において教科文衛委員会副主任委員である汪家鏐も本法律の草案説明においても同様に以下の様なことが強調されている。

「言語文字事業は国家統一、民族の団結、社会進歩と関連している。国家通用言語文字の規範化、標準化を実現することは民族間の交流、文化教育の普及、科学技術の発展、現代経済と社会発展の需要への適応を促進させることであ

り、効率性を高める基礎工事である。そしてそれは社会主義物質文明建設と精神文明建設に重要な意義を有するのである。

わが国は他民族、多言語の一国家であり、56の民族、70余りの言語、50余りの文字を有している。国家通用言語文字法を制定し、法律という形式を用い、普通話及び規範漢字を国家通用言語文字であると確定し、国家通用言語文字の使用範囲を規定することは民族間の交流、民族団結の促進、国家統一の保護に有利なのである」⁴⁸⁾

この法律が表す国家の方針は現代の内モンゴル自治区におけるモンゴル族の母語であるモンゴル語にどのような変化を与えているのであろうか。民族社会にとって最も重要なものの一つである言語の社会的状況を分析することによって、現代内モンゴル・モンゴル族社会の伝統に大きな影響が存在することを証明したい。

第2節 内モンゴル自治区におけるモンゴル語教育

内モンゴルのモンゴル語の現状を述べる前に、まず内モンゴル自治区成立期以降を中心にして内モンゴルのモンゴル族に対してどのような教育が実施されてきたかを概観したい。

なお本節は岡本雅享の『中国の少数民族教育と言語政策』の第2章を参照した。

(1) 内モンゴル自治区成立期

1947年5月1日に内モンゴル自治区が成立するが、その前の4月27日に発表された内モンゴル自治政府施政綱要の第12条を見ると「国民教育を普及させ、学校を増やし……モンゴル語の新聞、刊行物、書籍を行きわたらせ、モンゴル語の歴史を研究し、モンゴル学校ではモンゴル語で作った教科書を普及させ、モンゴル文化を発展させる」

と記されている。⁴⁹⁾

1948年12月には小学校各学年が使用するモンゴル語で書かれた各教科の教科書が正式に出版された。1949年3月に第一期内モンゴル自治区教育工作会議が開かれ、「少数民族言語と文字を発展させるために、少数民族学校はその民族言語と文字を用いて授業を行い、民族言語の教材を採用しなければならない」と述べられている。⁵⁰⁾

中華人民共和国が成立後の1951年の9月に開かれた第一期全国教育工作会議においても少数民族教育は大変重要視され、「各級人民政府教育部門は少数民族地域の教育事業を重視し、指導を強化し」、「言語・文字を有するモンゴル、朝鮮、チベット、ウイグル、ハザク族などの少数民族の民族小学校・中学校・高校の各授業でそれぞれの民族言語で授業を行い、民族言語の教材を採用しなければならない」とされた。⁵¹⁾

この様に内モンゴル自治区成立当初はモンゴル族が自らの言語を学習することに対してかなり尊重する立場をとっていた。そしてそれと歩調を合わせるかのように政府も少数民族の民族言語学習を奨励していたことが理解できよう。

(2) 社会主義建設から文化大革命まで

この少数民族言語学習に対する尊重の姿勢に変化が現れたのは1953年8月の内モンゴル自治区第一期牧畜地域小学校教育会議における小学校での一部漢語教育導入の決定(条件が存在した)であった。この年、モンゴル族初級中学(日本の中学校に相当する)・高級中学(日本の高校に相当する)とモンゴル族・漢族合同の初級中学・高級中学でのモンゴル語クラスにおけるモンゴル語・漢語クラスの比率が設定され、中学校は7:4、高校は5:4となった。ちなみに上述した教育会議が開かれた1953年8月は前章で述べた毛沢東による「過渡期の総路線」が提唱された社会主義建設開始の時期と一致することは注目すべき点であ

ろう。

1954年11月には第一期全区民族教育会議においてモンゴル族小学校では五年生からすべての地域において漢語の授業を設定することが決定された。さらに1957年にはモンゴル族高級中学の週間時数でモンゴル語は週5時間、漢語は週6時間となり、漢語の時数がモンゴル語の時数を初めて上回った。

ではなぜ内モンゴル政府は漢語を導入しようとしたのか。当時の内モンゴル自治区教育庁は以下のように述べている。

「民族学校の中で、愛国主義教育を徹底し、先進民族の文化を吸収し、民族の言語を豊かにするために、自治区の民族学校はすべて漢語の授業を加える。漢語の学習を通し、内モンゴル自治区は中華人民共和国の分離しえない一部分であり、モンゴル民族は中華人民共和国の各民族が友愛をもって協力しあう大家族の一員であること、モンゴル民族が先進レベルに到達しようと思えば、漢族の援助なしではなし得ないという重大な意義を、児童・生徒にはっきりと認識させることができる」⁵²⁾

当時の政府の少数民族に対する認識が明確に現れている。漢族は「先進的」であり、モンゴル族が「後れた」民族であるという思想の下、中国の国家統一を確固たるものにするため、少数民族に漢語を習得させる必要性がこの発言からにじみ出ている。

1957年以降の整風運動を発端とする反右派闘争が開始されると、内モンゴル自治区では「蒙漢兼通」(モンゴル語と漢語が両方通じるという意味)のスローガンの下、モンゴル族が漢語を習得することを求める運動が起こった。この様な無計画な考えによって、モンゴル族がモンゴル語も漢語も習得が不十分な状態になったという。⁵³⁾

この様な反右派運動の流れの下、モンゴル族の民族学校の教育制度も急激に変化していく。1958年にはモンゴル語で授業を行う小学校では三年生から漢語の授業を週4時間に設定し(表4-1参照)、1959年には三、四年で週6時間、五、六年で週5時間に増加させた。(表4-2参照)

1966年から文化大革命の嵐が全国に吹き荒れたが、内モンゴルも例外ではなかった。少数民族への言語教育においても民族問題はすでに消滅したという誤った考えから、少数民族言語による出版の停止、少数民族言語による授業の停止、民族学校の閉鎖などの形となって全国規模で影響が現れた。

フフホトでは文化大革命が起こる前には十校あったが、文化大革命以降すべてが廃校となり、モンゴル語教師93人の中、迫害による死亡者が3人、55人が学校を追われ、29人が学校を追われることになったという。モンゴル語教育においては「少数者は多数者を取り仕切る主人にはなれない」⁵⁴⁾ため、少数民族が民族言語を使うことを制限し、「中国」「中華」「共産党」などのモンゴル語

の単語がモンゴル語の中で漢語のまま用いられるようになった。さらに党や政府機関の文書を作成する時には二言語表記だったが、それもほぼすべて取り消された。

(3) 改革解放後

文化大革命が終焉後の1981年6月の六中全代表大会において文革期における民族問題を階級闘争であると誤った認識の下で起こった惨劇を認めた「建国以来党の若干問題についての決議」が採択された。さらに1980年10月9日に中央教育部と国家民族事務委員会が採択した意見書には以下のように記されている。

「民族小中学校教育の発展は、教授方法などの面で、少数民族の特徴に適合させねばならない。最も重要なことは、自己の民族言語と文字を持つ民族は、自民族の言語で授業を行い、自民族の言語をよく学び、同時に漢語も学習すべきことである」⁵⁵⁾

上述のように文革期の民族問題の軽視を反省す

表4-1 内モンゴル自治区のモンゴル族学校の週間授業時数(1958～1959年度)

学年 教科目	小学校						初級中学			高級中学		
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	1	2	3
モンゴル語	13	13	13	13	8	8	6	6	6	5	5	5
漢語	0	0	4	4	4	4	4	4	4	6	6	6
全教科	24	24	24	24	29	29	29	31	31	30	31	30

出所：岡本雅享(1999)、『中国の少数民族教育と言語政策』、社会評論社 p.216

表4-2 内モンゴル自治区のモンゴル族学校の週間授業時数(1959～1960年度)

《モンゴル語で授業を行うクラス》

学年 教科目	小学校						初級中学			高級中学		
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	1	2	3
モンゴル語	13	13	9	9	8	8	6	6	6	4	4	4
漢語	0	0	6	6	5	5	5	5	5	6	6	6
全教科	24	24	26	26	29	29	29	30	30	28	27	28

出所：岡本雅享(1999)、『中国の少数民族教育と言語政策』、社会評論社 p.216

る一方で、漢語の学習も同時に強調されているのはこの時期の一つの特徴である。この国家の方針に沿い、1980年、内モンゴルでも新たに教科カリキュラムが編成された。そのカリキュラムは加授漢語クラス(モンゴル語で授業を行い、一科目多く漢語を学ぶクラス)と都市部で比較的多い加

授モンゴル語クラス(漢語で授業を行い、一教科多くモンゴル語を学ぶクラス)の二つに設定された(表4-3参照)。

表4-3の通り、加授モンゴル語クラスはもちろんのこと、加授漢語クラスにおいても漢語が一定の授業数を有しているのが理解できよう。さらに

表4-3 内モンゴル自治区の全日制モンゴル族小中学校教科過程

《加授漢語クラス》

(二言語型)

教科 \ 学年	小学校					初級中学			高級中学	
	1	2	3	4	5	1	2	3	1	2
モンゴル語	13	13	10	10	7	6	6	5	5	4
漢語	0	0	5	5	5	5	4	4	4	4
外国語										
週間授業数計	26	26	26	26	26	28	29	27	29	29

(三言語型)

教科 \ 学年	初級中学			高級中学	
	1	2	3	1	2
モンゴル語	5	5	4	4	4
漢語	4	4	4	4	4
外国語	4	4	4	4	4
週間授業数計	30	32	31	32	33

《加授モンゴル語クラス》

(二言語型)

教科 \ 学年	小学校					初級中学			高級中学	
	1	2	3	4	5	1	2	3	1	2
モンゴル語	0	0	5	5	5	5	4	4	4	4
漢語	13	13	10	10	7	6	6	5	5	4
外国語										
週間授業数計	26	26	26	26	26	28	29	29	29	29

(三言語型)

教科 \ 学年	初級中学			高級中学	
	1	2	3	1	2
モンゴル語	4	4	4	4	4
漢語	5	5	4	4	4
外国語	4	4	4	4	4
週間授業数計	30	32	31	32	33

改革解放後、民族初級中学以上の進学試験には漢語のテストが必須となっており、教育においても漢語の重要性はさらに増している。注目すべきことは漢族学校に通う学生と比べ、両クラスの二言語型でも一つ多く言語を学ばなければならないにも関わらず、三言語型を選択するとさらに多く言語を学ばなければならない、学生に負担がかかる点である。

第2節、第3節で詳細に述べるが、現代内モンゴルで就職・生計のことを考えると親がモンゴル語より漢語を重んじ、漢族学校に行かせることが増えてきている。実際、1996年にモンゴル語の授業に参加していた小学生222677人が1997年に199421人と23256人減少している統計がある。⁵⁶⁾

第3節 モンゴル語と情報

本節から内モンゴルにおいてモンゴル語がどのような社会的地位・状況にあるのかを見るために、内モンゴルでモンゴル語を用い、いかに情報を収

集することができるかを見ていきたい。これは言い換えるならば、情報収集する上で、漢語がいかに必要であるかを見ることになる。

まず中国人が毎日と言ってよいほど頻繁に手にし、熟読している新聞の種類と総出版部数を見ることにしよう(表4-4、表4-5参照)。表を見ると、内モンゴルにおいて出版されたモンゴル語の新聞の種類は1990年から2003年までほぼ毎年全体の20%台を推移しており、比較的安定的と言っても良いだろう。しかし、モンゴル語の新聞の出版部数を全体の割合で見ると、最高でも2003年の6.3%であり、圧倒的に漢語で書かれた新聞部数が多いことが分かる。さらに書籍の種類と総出版部数を見ても(表4-6、表4-7を参照)、新聞より書籍の種類は豊富なものの、総発行部数がやはり全体の一部にすぎないことが分かる。

中国人が情報を得るうえでもう一つ重要な媒体であるテレビの週平均総放送時間を見ると、モンゴル語が週平均の総放送時間を占める割合は

表4-4 内モンゴル自治区において出版された年間の新聞の種類

年度	種類	モンゴル語	モンゴル語が全体を占める割合(%)
1990	47	14	29.79
1991	50	15	30.00
1992	50	15	30.00
1993	54	15	27.78
1994	53	15	28.30
1995	53	15	28.30
1996	62	14	22.58
1997	63	14	22.22
1998	51	12	23.53
1999	50	3	6.00
2000	64	12	18.75
2001	60	13	21.67
2002	60	13	21.67
2003	58	13	22.41

出所：内モンゴル自治区統計局編(1992～1997,1999～2001,2003,2004)、
『内モンゴル統計年鑑』、中国統計出版社の資料を基に筆者が作成。

表4-5 内モンゴル自治区において出版された新聞の年間総出版部数

年度	総出版部数 (万部)	モンゴル語 (万部)	モンゴル語が全体を 占める割合(%)
1990	16107	957	5.94
1991	20398	942	4.62
1992	18079	1014	5.61
1993	18286	1034	5.65
1994	16692	792	4.74
1995	16286	746	4.58
1996	18606	642	3.45
1997	24879	706	2.84
1998	16495	534	3.24
1999	17605	257	1.46
2000	17967.23	975.59	5.43
2001	19463.62	584.39	3.00
2002	18790.58	526.84	2.80
2003	29460.06	1857.14	6.30

出所：内蒙古自治区統計局編（1992～1997,1999～2001,2003,2004）、
『内蒙古統計年鑑』、中国統計出版社の資料を基に筆者が作成。

表4-6 内モンゴル自治区において出版された年間の書籍の種類

年度	種類	モンゴル語	モンゴル語が全体を 占める割合(%)
1990	1145	625	54.59
1991	1141	650	56.97
1992	1391	619	44.50
1993	1319	591	44.81
1994	937	647	69.05
1995	847	451	53.25
1996	1244	577	46.38
1997	1611	752	46.68
1998	1606	704	43.84
1999	1579	785	49.72
2000	1531	764	49.90
2001	1476	723	48.98
2002	1589	682	42.92
2003	1366	372	27.23

出所：内蒙古自治区統計局編（1992～1997,1999～2001,2003,2004）、
『内蒙古統計年鑑』、中国統計出版社の資料を基に筆者が作成。

表4-7 内モンゴル自治区において出版された書籍の年間総出版部数

年度	総出版部数 (万冊)	モンゴル語 (万冊)	モンゴル語が全体を 占める割合 (%)
1990	7948	795	10.00
1991	8278	823	9.94
1992	7841	779	9.93
1993	6781	856	12.62
1994	5947	747	12.56
1995	6560	702	10.70
1996	7582	747	9.85
1997	7971	769	9.65
1998	8096	799	9.87
1999	8269.31	849.32	10.27
2000	7423.34	804.23	10.83
2001	6759.05	790.48	11.70
2002	7080.38	796.9	11.26
2003	7509.86	840.25	11.19

出所：内モンゴル自治区統計局編（1992～1997,1999～2001,2003,2004）、
『内モンゴル統計年鑑』、中国統計出版社の資料を基に筆者が作成。

表4-8 内モンゴル自治区の週平均のテレビの総放送時間

年度	週平均の総放送時間 (時間：分)	モンゴル語 (時間：分)	モンゴル語が週平均の総放送 時間を占める割合 (%)
1990	736:02	25:10	2.54
1991	821:11	27:30	3.35
1992	819:29	27:30	3.36
1993	990:28	27:30	2.78
1994	1014:30	28:36	2.82
1995	1075:35	30:35	2.84
1996	1282:08	30:02	2.34
1997	1576:51	151:00	9.58
1998	1848:20	177:00	9.58
1999	1831:12	179:00	9.76
2000	2403:38		
2001	3107:15	551:07	17.74
2002	4972:00	552:57	11.12
2003	7097:00	574:38	8.10

出所：内モンゴル自治区統計局編（1992～1997,1999～2001,2003,2004）、
『内モンゴル統計年鑑』、中国統計出版社の資料を基に筆者が作成。

1997年から増加傾向にあるものの、新聞・書籍と同様、週平均の総放送時間のわずかにすぎない(表4-8)。

これらの表を見て理解できる通り、中国で生活するモンゴル族が幅広い情報を手に入れようとするならば、モンゴル語だけでは不十分であり、どうしても漢語を用いた情報を手に入れる必要性が出てくるのである。

ちなみに私は2002年から毎年内モンゴルの都市部を中心に毎年訪れている。この三つの媒体に関して私の経験を述べさせてもらおうと、新聞は街角でよく売られているが、モンゴル語の新聞が売られているところを見たことがなく、圧倒的多数が漢語で書かれた新聞であった。書籍に関して言うと、中国の国営書店である新華書店を訪れると、フロアの一部にモンゴル語の書籍が置かれていた。その書籍を細かく見ていくと、大半が文学、言語に関する書籍、辞書であり、経済、歴史、経済(内モンゴルでは遊牧経済に関する書籍はある)に関する書籍は決して多いとは言えない。テレビは地域によって異なるが、総チャンネル数が20～30で、モンゴル語の放送はわずか1つか2つ程度であった。内容はニュースや漢語のドラマを

モンゴル語に吹き替えされたものが大半で、私の友人は「モンゴル語の放送は面白くない」と語っていた。

第4節 モンゴル語と就職

本節では思沁夫の「『蒙生』の就職について―内モンゴル大学の事例より」『中国21』を参考にし、モンゴル語を専攻していることが就職面においていかに不利になっているか、そしてその原因を述べていきたい。

(1) 内モンゴル大学の事例

まず、中国の就職状況に関して簡単に説明したい。かつては国家が大学生に対して就職を保障する「国家包分配」と呼ばれる制度が存在した。1997年にこの制度が廃止され、個人で就職先を探す制度へと移行した。市場経済導入以降の国営企業などでリストラされた人々の再就職や政府のポスト削減などもあって就職難が現在問題となっている。

さて、表4-9は内モンゴルのフフホトにある内モンゴル大学各学院の就職率を表したものであるが、2000年から2002年の三年間、各学院の中

表4-9 内モンゴル大学各学院の就職率

(%)

	2000年	2001年	2002年
モンゴル学院	55	76	76
人文学院	80	93	94
経済学院	72	88	93
法学院	68	86	87
外国語学院	71	97	96
理工学院	85	97	94
化学工学院	56	95	96
生命科学院	65	98	95
コンピュータ学院	82	97	100

出所：思沁夫(2004)、「『蒙生』の就職について―内モンゴル大学の事例より」『中国21』vol.19、風媒社 p.154

でモンゴル学院が他の学院よりも就職率が悪い。表4-10の内モンゴル大学法学院の蒙生⁵⁷⁾と漢生の就職率を見ても、蒙生班は漢生班よりも10%以上就職率が悪い。この様に大学においてモンゴル語で研究することは就職においていかに不利に働くかが明らかであろう。

さらに先ほども述べた就職の自由化に伴い、大学生は企業への就職や進学を希望する傾向が増え、北京や上海などの沿海部で仕事を探す人が増加している。ではモンゴル語で研究していた卒業生はどのような進路先を選択しているのだろうか。表4-11を見ると、政府機関、メディア関係、軍関係を彼らは就職先として選んでおり、これは国家が学生に仕事を分配していた時期と変わらない傾向である。つまり中国の経済発展のための改革はモンゴル語で研究をしていた学生にとって就職の幅を広げる結果にはならなかったのである。さらに失業状態にある学生が一定数いることを忘れてはならない。

ちなみに私が北京で知り合った一人のモンゴル族の友人もモンゴル文学の修士号を取得し、とある市の翻訳課に就職した。彼も「もしモンゴル語と関連する仕事に就きたかったら、政府の翻訳課ぐらいしかない」と語っていた。

(2) 内モンゴルにおける「市場化」の影響

前節の様なモンゴル語の大学生の就職における不利な状況は一体どのような背景から起こっているのでしょうか。まず思沁夫が挙げるのは漢語の浸透である。

1980年代後半の市場化は漢語の優位性を拡大することとなった。例えば党、政府機関、国营企業にはモンゴル語が出来る幹部や漢語の文章をモンゴル語に翻訳する人間が基層レベルまで配置されていたが、今はほとんどなくなってしまった。これはモンゴル語の学生の就職先が大きく減少することとなった。

さらにその市場化がモンゴル語の文化産業にも影響していることが、さらに就職先の減少に拍車をかけている。内モンゴル自治区で最大の印刷会社「蒙文印刷場」が倒産するなど、地方は財政赤字によりモンゴル語の文化産業を支えることができない現状がある。

教育の面でもこの市場化の影響が及んでいる。市場経済により「自力」で財務を担わなければならないようになったモンゴル語関連の公的機関は独自にホテルなどを経営し、事業経費を補うものの、据え置きのままの公的予算内でモンゴル語の出版物を出版するのは困難な状況にあり、廃刊した學術雑誌も存在する。⁵⁸⁾

その他、岡本雅享によると、中央政府が少数民族地域の各級政府に対して民族教育専門の経費を拠出することや辺境建設費、未発達地域補助費と5%の民族機動費の中から一定枠を民族教育費に使うよう要求しているものの実施されないこともあるという。さらに国家財政から年間二千万元が少数民族教育専門項目補助費の名目で拠出されているが、その費用が内モンゴルに対して毎年減額されているのである。⁵⁹⁾この現状を異なった視点から考えれば、モンゴル語の教育をする仕事が増えることにつながっているわけであり、学生に影響することは否めない。

(3) モンゴル語の偏見と重要性の減少

もう一つの大きな問題はモンゴル語を専門にしている学生に対して企業や政府機関が差別的意識を持っている、軽視している現状である。ここでいくつかの事例を思沁夫の論文から紹介したい。

2000年にモンゴル言語・文学の専門を卒業したある女性は企業がモンゴル語を専門にしていたと聞いただけで、面接をしてももらえず、法学部で漢語とモンゴル語の両方で勉強をした男性は勉強した専門知識が漢生と何の変わりがないにも関わらず、蒙生であるという理由で面接を断られた

ことが何度かあったという。

モンゴル学院を卒業した男性は1999年にフフホト市で自治区政府司法部門・翻訳課に就職した。彼は道路沿いや町に建てる法律を宣伝するための看板を訳するなどモンゴル語と関わる仕事があるものの、仕事の大半は他の課に呼ばれて手伝うか、オフィスで新聞を読んで過ごすなどしているのだという。彼は2002年に中国語で公務員試験に合

格し、包頭市の税務関係の仕事に就いたという。

通遼市・ナイマン旗出身の女性は小学校から高級中学まですべてモンゴル語で教育を受け、1996年には内モンゴル大学に合格し、モンゴル語で経済法を専攻した。しかし、モンゴル語で教える教員が少ないことや就職のために授業全体の八割が漢語で行われていたという。2000年に卒業し、2000年末にフルンボイル市の地方裁判所

表4-10 内モンゴル大学法学院卒業生就職率：モンゴル語班と漢語班

年度	卒業人数		一次就職人数		一次就職率(%)	
	蒙生班	漢生班	蒙生班	漢生班	蒙生班	漢生班
2000	26	96	19	82	73	85
2001	32	104	25	93	69	89
2002	42	146	25	98	57	68

出所：思沁夫(2004)、「蒙生」の就職について－内モンゴル大学の事例より」『中国21』vol.19、風媒社 p.154

表4-11 内モンゴル大学モンゴル学院卒業生の就職状況

年度	政府関係		メディア関係		軍関係		進学		研究機関		学校関係		留学		企業		自治区外	
	モ	新	モ	新	モ	新	モ	新	モ	新	モ	新	モ	新	モ	新	モ	新
1998	6		7		9				1		6		3					
1999	2		6		4		2		2		2		2				2	
2000	3	3	2	6	6	3	1	1			2	1	5	2				1
2001	3		2	2	3	4	7	3	1				3	2	2			
2002	4	2	3	2	3	1	6	3	2		1		1	1	1	1		1

年度	失業状態		合計	
	モ	新	モ	新
1998	7		39	
1999	2		24	
2000	4	3	26	20
2001	4	9	25	20
2002	3	6	24	17

注：1)「モ」はモンゴル言語・文学クラスのこと、「新」は新聞・出版クラスのことを指す。

2)「失業状態」とは2002年9月までに職に就いていないことを意味する。

3)「学校関係」とは主に小学校、初級中学、高級中学を指す。専門学校も含む。

4)大学側の分類に従い、大学は「研究機関」として扱う。

出所：思沁夫(2004)、「蒙生」の就職について－内モンゴル大学の事例より」『中国21』vol.19、風媒社 p.155

に就職した。その仕事が合わないと感じ、仕事を辞め、弁護士の資格を取り、ハイラル市の弁護士事務所に転職した。自分が担当した訴訟のうちモンゴル語で弁護を担当したのはわずか三回であり、モンゴル語で仕事をするチャンスは少なくなっているという。

この様な事例を見ると、モンゴル語を専門としていたというだけで就職差別を受け、例えモンゴル語と関連する仕事を見つけたとしても、モンゴル語で仕事をするに対してやりがいを感じる事が少ないことが分かる。その様な社会的状況の中で、次世代のモンゴル族にモンゴル語を学ばせるメリットは確実に減少している。そうなると、人口が自治区全体で圧倒的多数を占め、自らのコミュニティに多く存在する漢族の言語、漢語を重視して学ばせることへとつながっていく道が出来上がっていくことは当然であろう。

おわりに

序章で紹介した私のモンゴル族の友人の話を紹介してこの論文を総括したい。2005年6月に内モンゴルを訪れ、宿泊先でその友人と二人で話をしていた。久しぶりの再会ということもあって、かつて「私は中国が嫌い」と言った発言に驚いたと私がその友人に言うと、彼女はこう言った。

「私が大学生だったころは本当に中国に不満があった。でもね、生活が豊かになって自分の夫や子供と幸せな生活を送っていると、まあいいかって思ってしまうのよね」

私が2002年に初めて内モンゴルを訪れてから、毎年内モンゴルを訪れ、その友人が住んでいる町にも訪れている。たしかに去年この町を訪れた時、いつも泊まる場所にきらびやかなネオンが設置さ

れ、それぞれの商店に新しい冷蔵庫が設置されていた。一番驚かされたのは新しい政府庁舎が建設され、その姿は北京にある人民大会堂を思わせた。わずか数年でもこの様な変化が見られるのであるから、内モンゴル自治区が成立されてから、町は大きな変貌を遂げたのであろう。この町にも上海などの沿海部ほどとは言えないものの、中国の経済発展の波はすでに訪れている。

言うまでもなくその友人とその家族もその波を受けている。そしてこの論文を執筆している時に友人のこの発言を思い出し、中国の民族政策の本質とその「成果」を理解できたような気がした。私に内モンゴルの現状や不満を率直に教えてくれたその友人の考え方にも「変化」が起きているのである。共産党政府の長期的視野に基づいた政策が、いま着実に「成果」をあげているのかもしれない。

私にとってこの友人が語ってくれたことがまさに「モンゴル」であった。「モンゴル」とは何かという問いに無数の答えがあり、確かな答えは存在しないはずである。しかし内モンゴルにおいてこの「モンゴル」に大きな変化が起きていることは間違いない。私は今年の4月から就職をするので、今度いつ内モンゴルを訪れることになるのか分からないが、自分なりに内モンゴルを見つめていきたいと思う。そして10年後、20年後の内モンゴルはどの様に変化しているのか、どうしてもこの未来に対して私は「不安」がつきまとうのは私の先入観と偏見なのであろうか。

最後に私を信頼し、多くの問題を率直に語ってくれたこのモンゴル族の友人に心からの感謝と敬意を表したい。そして2000年の入学時から卒業論文の執筆まで様々なご指導をくださった今岡良子先生、そして本論文執筆においてアドバイスをくださった阿部治平先生にも心からお礼を申し上げたい。

参考文献

日本語文献

- ・毛里和子(1998)、『周縁からの中国 - 民族問題と国家』、東京大学出版会
- ・王柯(2005)、『多民族国家 中国』、岩波書店
- ・愛知大学現代中国学会編(2004)、『中国 2 1』vol.19、風媒社
- ・中谷猛／川上勉／高橋秀寿編(2003)、『ナショナル・アイデンティティ論の現在—現代世界を読み解くために—』見洋書房
- ・ブレンサイン(2002)、「農地化から沙漠化へ内モンゴル東部「草原」地帯の変容」『東西南北』、和光大学総合文化研究所
- ・夏剛(2000)、「中国的な国家・民族自覚を巡って」『立命館大学言語文化研究』11巻4号、立命館大学国際文化研究所
- ・楊海英(2001)、『草原と馬とモンゴル人』、日本放送出版協会
- ・西村成雄編(2000)、『現代中国の構造変動 3 ナショナルリズム—歴史からの接近』、東京大学出版会
- ・毛里和子編(2001)、『現代中国の構造変動 7 中華世界—アイデンティティの再編』、東京大学出版会
- ・西村成雄(2004)、『20世紀中国の政治空間—「中華民族的国民国家」の凝集力』、青木書店
- ・岡本雅享(1999)、『中国の少数民族教育と言語政策』、社会評論社
- ・小川佳万(2001)、『社会主義中国における少数民族教育—「民族平等」理念の展開—』、東信堂
- ・佐々木信彰編(2001)、『現代中国の民族と経済』、世界思想社
- ・江口朴郎編(1987)、『民族の世界史15 現代世界と民族』、山川出版社
- ・王柯(1995)、「モンゴル民族独立運動と中国共

産党民族政策の成立」『中国研究月報』vol.49、中国研究所

- ・阿部治平(1984)、「内モンゴル牧畜業における新スルク制の登場と問題点」『モンゴル研究』No.7、モンゴル研究会
- ・松村嘉久(2000)、『中国・民族の政治地理』、晃洋書房
- ・宮脇淳子(2002)、『モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで』、刀水書房
- ・横山宏章(2002)、『中華思想と現代中国』、集英社
- ・天兒慧(1999)、『中華人民共和国史』、岩波書店
- ・姫田光義他(1993)、『中国 20世紀史』、東京大学出版会
- ・国分良成編著(2003)、『中国文化大革命再論』、慶應義塾大学出版会
- ・矢吹晋(1989)、『文化大革命』、講談社

モンゴル語文献

- ・Монгол Улсын Шинжлэх Ухааны Академи Дорно Дахин, Олон улс судлалын хүрээлэн(1996),"ХЯТАД ДАХЬ МОНГОЛЧУУД", Улаанбаатар

中国語文献

- ・郝维民主编(1998)、『内蒙古自治区史』、内蒙古大学出版社
- ・王铎主编(1998)、『中华人民共和国地方简史丛书 当代内蒙古简史』、当代中国出版社
- ・《当代中国》丛书编辑部(1992)、『当代中国的内蒙古』、当代中国出版社
- ・《内蒙古自治区三十年》编写部(1977)、『内蒙古自治区三十年』、内蒙古人民出版社
- ・图们 祝东力著(1995)、『康生与“内人党”冤案』、中共中央党校出版社

- ・ 费孝通主编(2003)、《中华民族多元一体格局(修订本)》、中央民族大学出版社
- ・ 《中华民族凝聚力形成与发展》编写组(2000)、《中华民族凝聚力形成与发展》、民族出版社
- ・ 刘锴 何润(1993)、《民族理论和民族政策纲要(修订本)》、中央民族大学出版社
- ・ 周德清编著(1999)、《民族知识问答》、中央民族大学出版社
- ・ 李竹青 那日主编(1998)、《中国少数民族经济概论》、中央民族大学出版社
- ・ 马戒 潘之谷 周星主编(2001)、《社会学人类学论丛 中国民族社区发展研究》第19卷、北京大学出版社
- ・ 夏铸 哈经雄 阿布都·吾寿尔主编(1999)、《中国民族教育50年》、红旗出版社
- ・ 全国人大编(2004)、《中华人民共和国宪法》、中国法制出版社
- ・ 全国人大编(2001)、《中华人民共和国民族区域自治法》、中国法制出版社
- ・ 全国人大编(2000)、《中华人民共和国国家通用语言文字法》、中国民主法制出版社
- ・ 内蒙古自治区统计局编(1992~1997,1999~2001,2003,2004)、《内蒙古统计年鉴》、中国统计出版社
- ・ 『北京晚报』(2003年10月15日)
- ・ 『北京青年报』(2004年1月2日)

web サイト

- ・ 内蒙古新闻网 www.nmgnews.com.cn
- ・ <http://big5.huaxia.com/wh/gjzt/2005/00312694.html>
- ・ 地方法规电子图书馆 http://lib.kmu.edu.cn/dffg/NM/Index_temp.htm

註

- 1) 毛里和子(1998)、《周縁からの中国—民族問題と国家》、東京大学出版社 p.185より一部引用。
- 2) 毛里和子(1998)、前掲書 p.188より引用。
- 3) 毛里和子(1998)、前掲書 p.189参照。
- 4) 毛里和子(1998)、前掲書 p.191より引用。
- 5) 郝維民主編(1991)、《内蒙古自治区史》、内蒙古大学出版社 p.6~7参照。
- 6) 毛里和子(1998)、前掲書 p.193より引用。
- 7) 毛里和子(1998)、前掲書 p.193より引用。
- 8) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.9参照
- 9) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.11~12参照。
- 10) 毛里和子(1998)、前掲書 p.203より一部引用したものである。
- 11) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.21~22参照。
- 12) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.56参照。
- 13) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.35参照
- 14) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.35参照
- 15) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.36より引用。訳は筆者。
- 16) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.45参照。
- 17) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.38参照。
- 18) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.39参照。
- 19) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.111より引用。訳は筆者。
- 20) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.112より引用。訳は筆者。
- 21) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.118~119参照。
- 22) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.121~122参照。
- 23) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.122参照。
- 24) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.123~124参照。
- 25) 松村嘉久(2000)、《中国・民族の政治地理》、晃洋書房 p.43~45の数値を参考とした。

- 26) 松村嘉久(2000)、前掲書 p.46参照。
- 27) この時期の中国全体の動きに関しては天児慧(1999)、『中華人民共和国史』、岩波書店の第2章を参照していただきたい。
- 28) 天児慧(1999)、『中華人民共和国史』、岩波書店 p.32参照。
- 29) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.123～124より引用。
- 30) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.160参照。
- 31) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.177～178参照。
- 32) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.179参照。
- 33) 姫田光義他(1993)、『中国20世紀史』、東京大学出版会 p.226参照。
- 34) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.185参照。
- 35) 楊海英(2001)、『草原と馬とモンゴル人』、日本放送出版協会 p.34,63～64,184参照
- 36) 『内蒙古自治区三十年』編写組(1977)、『内蒙古自治区三十年』、内蒙古人民出版社 p.74参照。
- 37) 図們 祝東力著(1995)、『康生与“内人党”冤案』、中共中央党校出版社 p.38～39参照。
- 38) 図們 祝東力著(1995)、前掲書 p.48,49,61,62など参照。
- 39) 郝維民主編(1991)、前掲書 p.310～311参照。
- 40) 国分良成編著(2003)、『中国文化大革命再論』、慶應義塾大学出版会 p.333,336参照。
- 41) 図們 祝東力著(1995)、前掲書 p.201～202参照。
- 42) 図們 祝東力著(1995)、前掲書 p.204参照。
- 43) 岡本雅享(1999)、『中国の少数民族教育と言語政策』、社会評論社 p.93参照
- 44) 1979年5月に元の行政範囲に回復する。
- 45) 『当代中国』丛书编辑部(1992)、『当代中国的内蒙古』、当代中国出版社 p.305,306参照
- 46) 『当代中国』丛书编辑部(1992)、前掲書 p.304参照。
- 47) 全国人大編(2000)『中華人民共和国国家通用語言文字法』、中国民主法制出版社 p.1～2より一部引用。訳は筆者。
- 48) 全国人大編(2000)『中華人民共和国国家通用語言文字法』、中国民主法制出版社 p.7～8より引用。訳は筆者。
- 49) 岡本雅享(1999)、『中国の少数民族教育と言語政策』、社会評論社 p.212より引用。
- 50) 夏鑄 哈経雄 阿布都・吾寿爾主編(1999)、『中国民族教育50年』、赤旗出版社 p.3より引用。訳は筆者。
- 51) 夏鑄 哈経雄 阿布都・吾寿爾主編(1999)、前掲書 p.4より引用。訳は筆者。
- 52) 岡本雅享(1999)、前掲書 p.215より引用。
- 53) 夏鑄 哈経雄 阿布都・吾寿爾主編(1999)、前掲書 p.5参照。
- 54) 岡本雅享(1999)、前掲書 p.218より引用。
- 55) 岡本雅享(1999)、前掲書 p.93より一部引用。
- 56) 夏鑄 哈経雄 阿布都・吾寿爾主編(1999)、前掲書 p.18参照。
- 57) 思沁夫はこの蒙生を高校までモンゴル語で教育を受けた学生、もしくはモンゴル語で大学に進学した学生と定義している。一部分の授業を漢語で受けていた場合も蒙生に含んでいる。
- 58) 岡本雅享(1999)、前掲書 p.235参照
- 59) 岡本雅享(1999)、前掲書 p.236参照

(どい いっかん)

《調査報告》

第3ホローの住民運動と「ジェンダーセンター」2007

今 岡 良 子

(1)「ジェンダーセンター」と第3ホロー

この報告では、ウランバートルの西の端で、N G O と住民が自律的な地域づくりを始めていることを紹介したい。

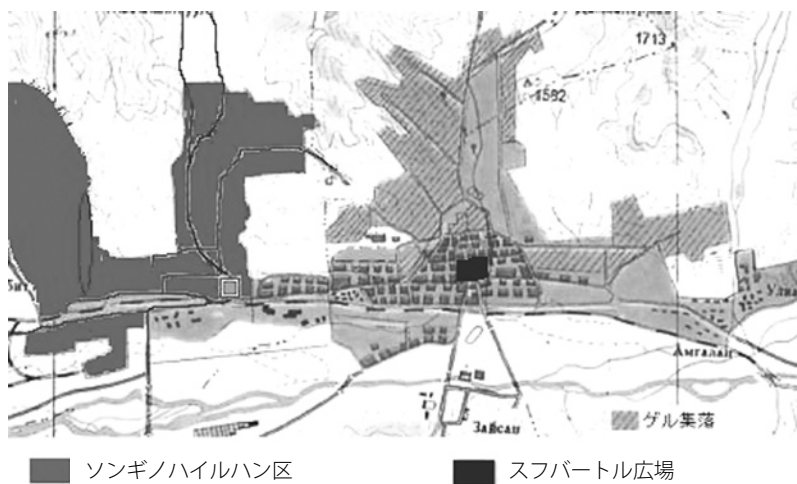
私は、2004年にモンゴル国におけるジェンダー研究の現状についてまとめるため、文献を収集していた¹⁾。その中でも、セックスワーカーの少女から聞き取りを行ない、報告書をまとめた女性情報センターに興味をもった。いったい、どのような人たちが、このような難しい調査を可能にしたのか、実際に会ってみたいと思った。

訪ねてみると、女性情報センターは、その後、「持続可能な発展のためのジェンダーセンター」(以

後、「ジェンダーセンター」と略す)と名前を変えていた。そして、ウランバートル市の西の端に位置するソングノハイルハン区第3ホローのゲル地区を活動拠点とし、貧困家庭の栄養改善問題に取り組んでいた。

私は、その頃、同区第1ホローで、地方から移住してきた元遊牧民の生活調査を行い、特に子どもがくる病を発症した家族のライフヒストリーの聞き取りをしていた²⁾。ウランバートルの西の端に位置するゲル地区は、最近移住した人が多く、家を探しあてるのが非常に困難である。隣り同士住んでいてもお互いに名前すら知らないことが珍しくない。この第3ホローも、移住者が多く住む地域である。コミュニティのないゲル地区でどのような活動が可能なのか。ますます、「ジェンダー

図1 ウランバートル市ソングノハイルハン区



センター」と第3ホローに興味をもった。

代表のT. アムガランに聞いてみると、「ジェンダーセンター」は、地域住民が政治に参加する民主的なシステムをどのように作るか、というテーマをもっていた。第3ホローは、ウランバートル市内の末端の行政単位で、女性が初めてホロー長に選出された地域であった。「ジェンダーセンター」は、1995年から第3ホロー長と話し合いを重ね、移住者や貧困者など、社会的弱者が参加できる住民組織を作り、住民が政治に参加する取り組みを進めていた。

私はバヤンホンゴル県ボグド郡ツェルゲルの遊牧社会で、遊牧民主体の協同組合の設立と崩壊、そしてその後の分断された状況を見つめてきた。その問題関心から、ウランバートルの西の端、移住者と貧困者の多い地域に生まれた住民の自治組織についてますます興味をもつようになった。

ジェンダーセンターによると、2005年の第3ホローの概要は、面積が32.5ha、人口11,120人、2,137戸。65%が生活最低水準以下で暮らしている。一家族の平均収入は33,000トゥグルクである。第10ヘセックの奥にあるゴミの山の中でホームレスの約100戸が暮らしている。7戸に1戸の

割合でくる病にかかっている子どもと障害者がいる。20戸に1戸という割合で、家族の誰かが外国で働いている。³⁾

第3ホローに移住者が多いのは『オラン・チョロート』というゴミ捨て場があるからだ。仕事に就けない人々の生活の糧となっている。ゴミ捨て場の中には、小さなゲルやゴミを積み上げて作った囲いなどの住居がある。家族で住んでいるケースもあれば、仲間を作って暮らすケース、大人と子どもが家族のように暮らすケースもある。また、ゴミ捨て場の近くにハシャーを立て、ゴミ収集車を招きいれる家もある。「ジェンダーセンター」がここで活動するまでは、こうして暮らす家も多く、ゴミを分別した後、売れないものは、すぐ近くの溝に捨てる家が多かった。しかし、貧しくても、清潔に、人間らしく暮らしていこうという「ジェンダーセンター」の呼びかけに、人々の意識も変わっていったという。

市場経済に入っただけで、ジュースやシャンプーなどのテレビコマーシャルから始まり、ウランバートル市民も大量浪費のシステムに組み込まれるようになった。ゴミの山は、市場経済化とともに大きくなっている。また、格差社会の競争に負

写真1 第3ホローの奥にあるゴミ捨て場



けた人たちは、このゴミで暮らしている。オランチョロートは、市場経済化の象徴である。NGO「ジェンダーセンター」の活動は、この底辺の住民とともにあることが、特徴的である。

(2) 第3ホローの住民運動の特徴

第3ホローの住民運動の特徴を4つあげたい。

①10人のヘセック長と67人のゴダムジ長の機動性

本来、ホロー役場で働くのは、ホロー長、事務長、ソーシャルワーカーの3人である。しかし、これでは、1万人を越える住民に十分な行政サービスを行うことはできない。それで、ホロー内の最小の行政組織ヘセック(ブロック)の長10人に加え、新たに行政組織としてゴダムジ(ストリート)を組織し、ゴダムジ長67人の長を選出することにした。

ゴダムジ長は、セミナーを受講し、行政の末端の仕事を担当するが、無給のボランティアである。ヘセック長とゴダムジ長は自分の担当地域を毎日歩く。昼間は家庭訪問し、回覧板をまわしたり、家庭の事情を聞いたり、必要な情報や助言を与えたりする。ゴミ捨て場を抱える第10ヘセックで

は、そこで暮らす人々とのコミュニケーションもはかっている。また、夜は路地の見回り(エルゲール)をする。家に帰らない子どもがいたら、注意したり、家に連れて行ったりする。酔いつぶれている人がいたら、ホローの警察に保護を求める。

また、毎月の酒類やたばこの販売が禁止される日には、商店を回り、店頭から撤去する。ゴミの山から買い物袋などが飛んでくるので、毎月ゴダムジの清掃を組織している。

2006年に、筆者が第10ヘセック長だった家にホームステイした時のことである。ヘセック長だった女性についてストリートを歩くと、ヘセック長はすれ違う人と必ず立ち止まって挨拶をし、情報交換をしていた。田舎で、遊牧民が、放牧の途中、人を見かけると、馬から降りて座り、たばこを組みかわし、「ソニン サイハン ヨー パイナ ウェー」とおしゃべりを始めるが、これと同じシーンである。また、無料健康診断の日程を知らせるために、家から家へ、訪ねて行く時も、ミルクなしのお茶をすすって、「ソニン サイハン ヨー パイナ ウェー」と、しばらくお互いのことを話し込む。これも、田舎では、放牧の途中で、ゲルを見かけたらかならず立ち寄って、情報交換するのと同じシーンである。遊牧社会の伝統的な

図3 ウランバートル市内の行政区画

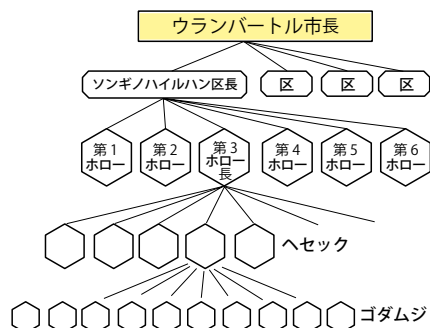
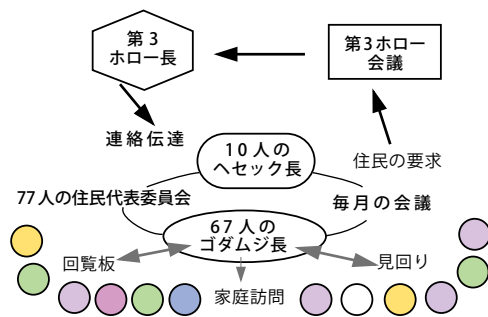


図4 第3ホローの行政組織と住民運動



情報交換と共同体意識が、ここで無理なく再生している。ヘセック長だった女性は、まったく、気負うことなく、楽しみながら、ストリートを歩いていた。

また、ストリートを歩いていると、子どもが自分の家に来るように呼びに来た。その家を訪ねると、ハシャーの中のゲルの戸口の日当たりのいいところに、目の悪い老人が座っていた。ここにいて、ゴダムジを行き交う人を感じ、話したい時は子どもを使いにするのである。筆者とヘセック長はしゃべりながら歩いていたので、何か変なモンゴル語をしゃべる人が来たと興味をもったらしい。ヘセック長は、ミルクなしのお茶をすすりながら、無料健康診断の説明をし、子どもに予約を受け付ける日時と場所も伝えていた。

このようにヘセック長やゴダムジ長が、住民に必要な情報を与えるために担当地域を歩きまわることで、社会的弱者に確実に情報が届き、また、弱者自身が、身近に情報を得ることができるようになっていく。官僚主義の下にあった行政サービスが、民主化されているのである。

②「私たちのホロー・私の家」住民大会

この10人のヘセック長と67人のゴダムジ長、あわせて77人の住民代表は、住民の状況を把握し、毎月第一週目の水曜日に集まり、住民が抱える問題を話し合っている。会議でまとめた住民の要求をホロー議会に申し入れるのはもちろん、区、市、また国から議員や行政官が第3ホローを訪ねた時にいつでも伝えられるようにしている。

そして、2年に1度、「私たちのホロー・私の家」という名前の住民大会を開催することとしている。

2005年12月には、初めての大会が開かれた。この会議には、170人の住民、ホロー役場、ホローの病院、ホローの警察、ウランバートル市粗大ゴミ研究センター、第65学校、第80幼稚園、公衆浴場、ジェンダーセンターが参加した。

この時、健康、教育、環境、家庭問題、母子の健康について、医師や教師らから報告があった以外にも、住民から次のような発言があった。就職の機会が不足していること、貧困問題が深刻化していること、アルコール中毒問題が家庭や地域社会に悪影響を与えていること、電化が遅れているため街灯が少ないこと、青少年のために夜間の酒類販売をやめること、新しい移住者が集中する地域にはまだ住所番地がないこと、土地の私有化手続きが遅れていること、ホローが広いので医療サービスが十分に届かないことなど。

また、住民から次のような提案があった。溶接や縫製の技術をもっている住民は、子ども達に教えて、手に職をつけるきっかけにしようとか、ヘセック長やゴダムジ長はみんなのために毎日歩きまわるので、靴を買ってあげてほしい、という提案が出されたり、中学生が「信頼・ハート・知恵をあわせましょう」と、ホロー内の問題をみんなの力で解決していこうと呼びかけがあった。

ここで議論されたことが、翌年の活動目標となっていく。

実際に行なわれたことは、家庭内暴力の予防のためのDVやアル中予防セミナー、ゴミ問題の理解を深めるためのダイオキシンセミナーの開催。子ども向けの性教育やドロップアウトした子どもの特別授業、子どもたちの絵画コンテスト。老人のチェス大会やピクニックの企画も好評だ。2ヶ月に1回のフリーマーケットでは、ゴミ捨て場で暮らす人々とコミュニケーションをはかってきた。ホームレスの人々のために、政府に対しゲルを申請し、ゲル地区で住めるようにしたり、外国の支援団体に車椅子を要請し、障害者に提供したり、ホロー内に住んでいる23家族のカザフ族を孤立させないために、カザフ文化を知る「カザフの日」を開催し、交流を深めたり、様々な活動で展開されてきた。

第3ホローの住民運動の特徴は、10人のヘセッ

ク長の内9人、67人のゴダムジ長の8割が女性だということである。この女性たちは、社会主義の時代に教師の経験をしていたり、障害児童の親の会の活動をしていたり、今は、仕事に就いていないが、以前は社会に貢献する活動を経験した人が多い。彼らは必ずしも経済的にゆとりがあるわけではない。子どもや年配者、ホームレス、マイノリティーなどの社会的弱者を捨て置かない運動の原動力となっている。

③ 活動拠点のゲル、公衆衛生&教育センター

2004年9月にイタリア人医師アルドがゲルを第3ホローに寄付し、ホロー役場の前に設置された。このモンゴルの伝統的なゲルは、情報センター、住民運動の事務局、公衆衛生と教育センター、国際交流のセンターなど、多機能な役割を果たしている。

ゲルの入り口には掲示板があり、無料健康診断の日程など住民にとって必要な情報が掲示されている。ゲルの中のハナ(壁)には、地方から移住してきた住民がウランバートルで暮らすために必要な情報(学校や病院などの公共施設の位置やバスの路線と料金)が掲示されている。本棚には国際機関や政府の発行した教育や医療に関するパンフレットや書物が並んでいる。

10人のヘセック長と67人のゴダムジ長らに

としては、このゲルは作戦本部である。日常的にここに集まり、情報交換している。ホロー役場に用事のある人が、まず、「ホロー長はいるのか?」とここに立ち寄り、おしゃべりをして、情報収集していく。「ジェンダーセンター」のカウンセラーと住民から選ばれた職員が常駐しているので、DVの被害者が相談に来たり、体調の悪い人が血圧測定に来たり、医者に見せるために自分の血圧カードを取りに来たり、いつも人でにぎわっている。外にも花壇を作り、その中に雨よけをつけた丸テーブルとイスを置いているので、ゲルの中がいっぱいになると「オープンカフェ」に移動して話を続けている。

私が、第1ホローの調査をしていた時、ホロー役場は移住手続きに来た人の行列で中に入ることが困難で、長時間待たされた人の疲れた顔が思い出される。第3ホローの役場の前にあるゲルのこのセンターは、地域コミュニティの重要な拠点となっている。

また、子どもたちも、放課後、本を読みに来るにやってくる。住民がドロップアウトした子どもに読み書きを教えるのもここだ。しかし、子どもが静かに本を読むには手狭になってきたので、ホローは役場の横の部屋を子どもの図書館として利用することを許可した。

写真2 正面の天幕が公衆衛生&教育センター、右がホロー役場



この他、このゲルは国際交流の場として役立っている。2006年、日本福祉大C O E 調査⁴⁾が第3 ホローで行われた時、地元スタッフとの会議を重ねたり、この調査にともなってホームステイをする大阪外大の学生を歓迎し、地元小学生が音楽会を開いてくれたり、ホストファミリーとの対面式を行なったりしたのも、このゲルであった。

2007年夏、大阪外大でモンゴル語を学び、日本語教師の資格をもつ4年生の川崎未来さんとモンゴル国立大学でモンゴル語と日本語を専攻するT.エネビシさんが、2ヶ月間、日本語教室を開き、受講生の子どもから大人まで、このゲルに通った。その後も、エネビシさんが授業を続けている。

公衆衛生&教育センターは、ゲルが持つ出入り自由な開放性が十分に活かされ、人が集まり、交流し、人材が育っていく拠点となっている。

④ シングルマザーの自律のためのグリーンホロー計画

2007年、「公衆衛生&教育センター」の名前は「町おこしセンター」に改名された。このゲルは、サービスを受けに来るだけでなく、何かを作り出し、経済的に自律しようとする人たちが集まる拠点になりつつある。

市場経済移行後、様々な理由で、一人で子どもを育てなければならなくなった女性は、働く意欲

があるにもかかわらず、年齢や育児を口実に就職の機会を奪われ、苦しい生活を余儀なくされている。ゴミを拾う生活から抜け出せないシングルマザーも多い、そこで、住民会議と「ジェンダーセンター」は、2007年度に新しく「グリーンホロー計画」に着手した。

まず、シングルマザーの中から植物を育てることに興味ある人を募った。ヘセック毎に1人、ホロー全体で10人のシングルマザーが選ばれ、グリーンホロー計画の中核となった。

この10家族は協力して、それぞれの家の柵の修理やトイレの設置など生活改善に取り組んだ。そして、チャツアルガナやウフリン・ヌドウなどの果実のなる木、キュウリやじゃがいもなどの野菜を植え、情報と経験を交換した。この経験は、次年度からそれぞれのヘセック内で伝えていく任務を負っている。こうして、人材育成とネットワークの拡大を進めて、3年間で300戸以上の家に果実のなる木や野菜を植えることを目標としている。ウランバートルの西のはずれのゴミ捨て場を抱える貧困地域で、自分のハシャーの中の暮らしを緑豊かにすることで、ホロー全体を美しくすると同時に、ウランバートルの大気汚染を緩和し、CO2削減に貢献しようと、シングルマザーたちは積極的に取り組んでいる。

写真3 野菜用のビニールハウスをシングルマザーの家庭に立てている



写真4 手工芸のグループの誕生



今年はみんなで60キロのきゅうりを収穫し、40キロは瓶詰めなどにして販売した。あるシングルマザーは、農作物を作るのは初めてだけれども、育っていく姿を見るのは毎日の楽しみになった、という。またある女性は、これまで人が訪ねて来ても出すものがなくて気まずかったが、今は、庭のきゅうりをもいで、切って出すと、話もはずんで楽しい、という。

来客を自分が育てた家畜の乳製品や肉製品でもてなすのは、遊牧民の伝統である。都会のアパートで暮らしていても、まず、お茶とお菓子の盛皿で来客をもてなすのがしきたりである。しかし、ミルクも、お茶も、菓子も、生活水準以下で暮らす人々にとっては、常時ストックしておくわけにはいかない。しかし、このグリーンホロー計画で、家畜から離れた都市住民が、ハシャーの中の土地に手を加えて、食料を手に入れることを覚えた。手ずから得る喜び、作る誇り、収穫物を分かち合う楽しみを取り戻している。

また、このシングルマザーの中から手先の器用な女性が、フェルトなどの工芸品を作り、手工芸のサークルが生まれた。ひとところに集まって、作品を作り、教えあう。その合間に自分や子どもの話、近所の話、おしゃべりが楽しい。社会主義

の時代、「羊毛は金」と呼ばれ、ソ連東欧へ輸出する重要な原材料として、遊牧民は厳しい国家調達ノルマを課された。今、この第3ホローのシングルマザーにとって、「羊毛は手の喜び」となり、生活を潤している。

(3) まとめ

NGOとホローが仕掛けを作った第3ホローの住民運動は、最初、行政のボランティアサポーターを組織し、ゴダムジ長がゲル地区を歩き、弱者に必要な情報を届け、要望を上へ押し上げ、社会サービスを向上させる役割を果たしていた。そして、住民の要求は、住民が力をあわせ、行政と外国の支援者の支援をえて、1つずつ実現していった。さらに、現在は、社会的弱者であるシングルマザーを支援して自律生活に導く段階にある。シングルマザーは、ハシャーの中の土地を耕して食料を得て、畜産物の加工をして現金収入を得て、貧困を克服する道を歩んでいる。

この住民運動に触発され、ゼミの卒業生も動き出した。能勢高校に勤めた卒業生は、モンゴルや第3ホローについて生徒が学んだことを文化祭で展示し、スーテイ茶のお店を開き、手工芸品を

売り、その収益をシングルマザーに届けた。第3ホローを訪問した学生と箕面市民が「ジェンダーセンター大阪」というN G Oを立ち上げ、グリーンホロー計画を紹介するために大学祭に出店したり、研究会や卒論の発表会でワークショップを開いたりしている。収益は数万円単位のわずかな金額であるが、モンゴルに渡ると原材料を買う資金となり、シングルマザーが手工芸のサークルに通う励みになっている。「支援する」側も、それをきっかけに、バラバラになったコミュニティの再形成を模索し、また、都市消費社会における自律的な暮らしについて考え始めている。

この第3ホローの住民運動は、観察するだけでなく、協同する段階になった。だから客観的に報告することは難しい。むしろ、多くの人に興味をもってもらい、アドバイスをいただけたらと思っている。

註

- 1) 今岡良子「モンゴル国における女性研究の動向と研究紹介」、アジア現代女性史研究会編(2005)「アジア現代女性史」1号、p.p.1-13
- 2) 今岡良子「移住家族の生活困難、乳幼児の発育障害と移住」、長沢孝司、今岡良子、島崎美代子編(2007)『モンゴルのストリートチルドレン 市場経済化の嵐を生きる家族と子どもたち』、朱鷺書房、p.p.138-160
- 3) Gender center for sustainable development, 'Medeelliin khuudas', No.3/37, 2005 oni 12 sar
- 4) 日本福祉大学C O E 事業「福祉社会開発の政策科学形成へのアジア的拠点」プログラム「モンゴル国における障害児・者とその家族における実証的研究」

(いまおか りようこ)

《会員のページ》

私のモンゴル滞在記

—帰国後半年で見えてきたこと—

大野 暢子

久しぶりに古びたノートを手にとりました。まだ購入して1年にも満たないのに、黄ばみが目立つし泥や砂で汚れています。昨年夏、初めてモンゴルを訪れ一ヶ月滞在していた時むこうでつけていた日記です。この旅でお世話になった方に、西村幹也さんという、草原の民に愛され、恐れられる、モンゴルに精通した方がいます。

西村さんとの出逢いは、今岡先生が新入生にいい経験をして欲しいと、外大に馬頭琴奏者ネルグイ氏を招待してくださった昨年四月にさかのぼります。西村さんはネルグイさんと全国ツアーをしていらっしやいました。

彼が毎年夏に企画・運営されているモンゴルの田舎の旅行ツアーの存在を聞かされたのはこの時でした。

日本から飛び立ってウランバートル空港に降り立ち、首都から西へ2時間ほど車を飛ばしたところにある夏営地(通称ばあちゃんち)を拠点にしたツアーなのだと、熱く語って下さいました。

「草原直行直帰のワイルドなツアーだよ。馬で4泊5日かけて草原を旅するんだ。」

一体どんな内容なのか、馬に乗るとは一体どの程度乗るのか、何も知らなかったことは確かです。しかし私は気が付いたらツアーのスタッフをやらせてくれとお願いしていました。

西村さんは豪快に笑って二つ返事でOKして下さいました。モンゴルの何に興味があるのか分からないけど、気が付いたら入学から1年が経ってしまっていたし、何とかしてモンゴルに関わりたとい、気ばかりあせる2年の春でした。

しかし、迎えた8月、私は自分のこの単純さを少なからず恨みました。

外国へ行くのは初めて、アウトドアも初めて、馬はポニーしか乗ったことがないという初めてづくしで望んだ旅。しかも、私はツアーのお客さんではなくて、スタッフ。お客さんの食事作り、テント張り、お世話になるゲルの仕事のお手伝い、簡単な通訳・・・などの雑用をこなす代わりに、お金は1銭も払っていません。足手まといにはなるまいと奔走しましたが、心が折れそうになることもしばしばでした。この頃の日記は愚痴で埋め尽くされています。

まず、乗馬初心者なのに、いきなり馬に乗って一日10~20kmを、群れで移動するという強行軍には閉口しました。馬のほうも私のとろさを分かっているらしく、思う通りに動いてもらえるわけもなく、ごろごろ落馬しました。

そして何より悔しかったのが、私の話すモンゴル語の拙さでした。牧民さんや現地スタッフのモンゴル人学生とは、すぐ打ち解けましたが、私は「モンゴル語専攻学生」を名乗っている以上、思った以上に話せない事に対してよく「おまえは日本でなにを勉強してるんだ」と言われたものです。

それでもどこかで開き直れたのでしょうか。徐々に、ただ「美しい」とだけ思っていた風景の向こうに何かを見なくては、という念に駆られ始めました。ホームシックの気持ちは常に付いて回りましたが、1つ1つの出逢い、一個一個のハプニングを楽しむように努力しました。

草原の向こうに大規模な某カドカワ映画のロケ



隊を発見し、皆で馬でつっこもうとして怒られたこと、ヒツジの解体を見たこと、日本語専攻のモンゴル人の女の子と大喧嘩したこと、そして仲直りしたこと、日本に帰ることばかり考えていたこと、西村さんに怒られたこと、3人の牧民たちと相撲をとって玉砕したこと、結婚式の余興・・・直接勉強には関係のないことばかり心に残っています。日記を見ると今でもありありと思い出されます。

さて、「お前はモンゴルに行って何をしてきたんや」と言われたら、「西村さんの長年作り上げたフィールドで遊ばせてもらってきた」と答えるのが妥当だと思います。

「西村さん、来年もスタッフとしてリベンジしていいですか？」

と、尋ねたことがあります。

大きくうなずいてくれる事を期待していましたが、返ってきた答えは意外なものでした。

「半分イエスで半分ノーだな。君が来年どれだけスタッフとして成長したかもみてみたい。でも所詮これは『俺がつくったモンゴル』だから。君はモンゴルを専攻しているんだから、『大野のモンゴル』をつくっていきなさい。」

最初はこの言葉の意味が分からず、寂しい気持ちになりました。自分はこの経験で何を得てきたのだろう、と帰ってきてからも悩み続けました。一ヶ月も行ってきたのに、興味のあるテーマが決まらない自分はだめなやつかなとも感じました。ただし、「旅でお世話になった人との出会いや、みたものを無駄にしたくない」という気持ちと「思い通りにモンゴル語でコミュニケーションをとれなかった」という悔しさは、常に自分の中にありました。

その気持ちが、モンゴルに対するモチベーションを知らず知らずのうちに上げてくれていたことに、すぐには気づけませんでした。

今では、自分がモンゴルに関われていることを今までで一番嬉しく思えるし、充実して過ごせているなど実感している日々です。あれから興味のある研究テーマもできました。

「ナショナリズム」と「フェアトレード」が、目下のブームです。

前者は、建国800年に沸くモンゴル国の高揚を間近にみてきた事と、愛国心が幅をきかせてきた印象のある日本の社会情勢に感じるものがあったからです。ナショナリズムを求心力にせざるを得なくなったのは、国家が何かの点で行き詰まりを

感じているのでは？という仮説をたてて考察しています。

蔓延する「実存主義」「全体主義」を放っておいて、それを国家に利用されたとき、私たちは果たして気づくことができるのだろうか、という危惧があります。加熱してきた憲法改正問題は、私たちの子どもや孫の時代どころか、来年、再来年の社会をも左右する大問題です。今、疑ってかからなければ、気がついたら戻れないところまできてしまった、という事態になるのかもしれないのです。今はまだ、先輩方の卒論や、新聞の関連記事を読み漁る段階で、自分の無知さやつめの甘さを実感する日々です。

「フェアトレード」は、最近講義をきっかけに興味を持ち始めました。日本をはじめとした先進国が安いものを海外から輸入すればするほど、立場の弱い人々の貧困に拍車がかかっているという悪循環に衝撃をうけました。「フェアトレードのシステムが広く受け入れられればいいんだな」と思っていたのですが、どうやら事態はそこまで単純ではないようでした。物流の末端にいる、生産者の人々の労働組合や労働条件の土台が整わないと、雇用している企業に搾取されて結局利益が行くべきところに行き渡らない現実がありました。まずは、自分が豊かな日本に暮らしていることがどうということなのか。見たくないものも含めて、恐れずに見ていきたいと思っています。

「すべての物事には理由がある」という事が実感されてきた頃から、何かを追及することが楽しくなりました。教育基本法が改正されたことにも、チンギスハーンがうけ始めたことにも、日本の商社が儲けていることにも全て理由があって、毎日

ただメディアの言うことを鵜呑みにしているだけではそれらに気づけない。

それから「打算的に勉強しない」ということも分かりました。「何を勉強したら将来役立つか」という事に気持ちが偏っていた時期もありました。

モンゴルで知り合った観光客のお兄さんに頂いた言葉がノートに書いてあります。彼は自分のしている仕事を好きで、その専門に誇りを持っている素敵な人でした。

『『将来のためにこれをしておこう』なんてことは考えないほうがいい。社会は『大学で得た知識を生かしてくれよ』とは期待していない。『一瞬一瞬好きなことのためにどれだけ行動できたか、学んだか』というのが財産になって、一生役に立つんだよ。』

まだまだ学問の道は険しいですが、私はこれから一生どこにしようと、モンゴルと体あたりで向き合った4年間で誇れるようにしたいです。

今しか出来ないことに後から気づかせてくれた一ヶ月の体験は始まりにすぎませんでした。西村さんのあの言葉の意味が今なら少し分かります。

次にモンゴルに行くときまた持っていこう。もう一度汚いノートを本棚にしまいました。



(おおの まさこ)

モンゴル研究会活動報告 (2006 年度)

■モンゴル研究会7月例会&第2回卒論発表会

日時：2006年7月30日(日)

場所：日本ユーラシア協会会議室

報告者および報告テーマ：

第1部 教育と国家

- ・「社会と教育の関係」 大阪外大4年 水嶋育美の卒論の報告
- ・「教育現場から見た戦後の教育政策の変遷と教育基本法改正」大阪外大OB 北陽高校英語科教諭 松岡正喜の教育現場からの報告

第2部 音楽と国家

- ・「モンゴルの近現代音楽史」 大阪外大4年 青木隆紘の卒論の報告

第3部 自己紹介・近況報告～グループディスカッション 16:30～

■モンゴル研究会12月例会&第4回卒論中間報告会

日時：2006年12月23日

場所：大阪外大B棟2階学術交流室

報告者および報告テーマ：

- ・青木隆紘「モンゴル近現代音楽史と音楽による政治的影響」
- ・田中良枝「モンゴルと日本の比較宗教史」
- ・藤井麻世「ウランバートルの今を生きるシャーマンたち—役割の変化と文化交流—」
- ・西田奈保「モンゴルにおけるトナカイ遊牧民ツアー」
- ・足立史織「モンゴルにおけるミレニアム開発計画の現状と第三ホローの住民の取り組み」
- ・清本あゆみ「モンゴルの貧困と性感染症患者増加について」
- ・三宅晶子「韓国人男性と結婚したモンゴル人移住女性の現状」
- ・西脇依理「モンゴルで働く中国人の現状」
- ・水嶋育美「現代の日本とモンゴルにおける国家と教育の関係」
- ・嶋岡宏樹「モンゴル国における行政区画の変更について—日本の市町村合併から考える—」

■モンゴル研究会2月例会&2006年度卒論合評会

日時：2007年2月12日

場所：大阪外大B棟2階学術交流室

報告者および報告テーマ：

- ・青木隆紘「モンゴル近現代音楽史～音楽の政治的利用の観点から～」
- ・田中良枝「モンゴルと日本における仏教をめぐる政治権力と聖職者と民衆の関係性—そして今」
- ・藤井麻世「ウランバートルの今を生きるシャーマンたち—活動形態の変化と潜在的可能性について—」
- ・西田奈保「モンゴルにおけるトナカイ遊牧民ツアー—ツアータンの社会問題を観光で考える」
- ・足立史織「モンゴルにおけるミレニアム開発計画の現状と第三ホローの住民の取り組み」
- ・清本あゆみ「モンゴル政府のHIV対策の問題点」
- ・三宅晶子「韓国人男性と結婚したモンゴル人移住女性の現状」
- ・西脇依理「モンゴルで働く中国人の現状～問題点と政策提言～」
- ・水嶋育美「現代の日本とモンゴルにおける国家と教育の関係を愛国心と社会情勢から考察する—日本の未来とモンゴルへの提言—」
- ・嶋岡宏樹「モンゴル国における行政区画の変更について—日本の市町村合併から考える—」

(以上敬称略)

* * *

今年度も今岡ゼミとモンゴル研究会合同で例会を開いた。6月は、社会人と学部生が同じテーマで発表し、お互いに学びあうことができた。卒論の中間報告会は、卒業生の参加が多く、同じゼミの後輩のその後の取り組みを見守りながらも、まだ勉強を続けたいという社会人の受け皿となっている。卒論の合評会は、一年間ゼミで学びあった同級生が、優れた論評をすることに驚かされた。卒業論文は書くだけでなく、友人が本当に明らかにしたかったことがどう書かれているか、という観点から読むことまでやってみて、完結することによって気付かされた。卒論の発表会や合評会は、モンゴル語の卒業生だけでなく、留学生、市民、他大学の学生にも公開し、参加していただいた。様々な経験を積んだ人が集まると、議論が豊かになる。この方式は、来年度も続けたいと思う。

(今岡 良子)

賛助会員募集のお願い

『モンゴル研究』は1975年の2月に創刊されたモンゴル研究のための研究誌です。僅か101頁のタイプ孔版印刷から始まった小誌は、毎号着実な実績を積み上げ、いまでは内外の研究者を中心に、広範な支持と高い評価を得ています。

1984年からは、賛助会員制度が発足し、創刊当時からお世話になった故司馬遼太郎さんをはじめ、多くの方々から、暖かいご支援を頂戴して参りました。

今後とも、『モンゴル研究』の在り方にご賛同いただき、ひとりでも多くの方が賛助会員となっていただけますよう心から希望いたしております。

尚、賛助会員についての要綱は以下の通りです。

モンゴル研究会賛助会員要綱

- 賛助会員とはモンゴル研究会の趣旨およびこれまでの研究会活動とのその意義に賛同し、会の活動、運営には直接参加せず、その周囲にあって、この会を育てていこうという善意から財政的に支援する個人、または団体である。
- 賛助会員は賛助会費（年間1口5,000円、何口でも可）を定期的に納入することで財政支援を行い、『モンゴル研究』の贈呈を受ける。
- 賛助会員は、モンゴル研究会の趣旨や活動に異議がある場合、あるいは個人的な理由によって、いつでも自由に退会できる。

既に賛助会員となって下さっている皆様、ご支援、誠にありがとうございます。ご支援いただいたすべての皆様のお名前をここに掲げて、御礼を申しあげるべきところですが、個人情報保護の観点から、賛助会員名簿掲載は控えさせていただいております。何卒、ご理解下さい。

また、会員、賛助会員の皆様の個人情報管理につきましては、法令を遵守し、今後とも、十分な注意を払ってまいります。

『モンゴル研究』投稿規程・執筆要領

＜投稿規程＞

1. 名称及び発行

本編を『モンゴル研究』（JOURNAL OF MONGOLIAN STUDIES）と称し、原則として毎年1回発行する。

2. 投稿資格

投稿できる者は、原則として、モンゴル研究会会員に限る。ただし、次のいずれかに該当する場合には投稿を認めることがある。

(1) モンゴル研究会の依頼により、モンゴル研究会で講演、発表等を行った非会員。

(2) その他、会員の推薦があつて、編集委員会が適当と認めた者。

3. 投稿内容

モンゴル研究に関する未発表原稿で、原則として研究会の月例会などで報告したもの。その種類は論文、研究ノート、調査報告、翻訳などで、編集委員会が適当と認めたもの。

4. 原稿の分量及び様式

(1) 原則として、原則として、論文は50枚以内（400字詰め原稿用紙換算、図表や注を含む）、研究ノート30枚以内（同）。その他の原稿も50枚を超えない。制限を超える長文原稿は、編集委員会の承認によって受理または分割連載されることがある。欧文・モンゴル文の場合も、これに準じる。

(2) 原稿の様式や提出方法については、別掲の執筆要領に準じる。

5. 原稿の締め切り

投稿を希望する者は原則として、12月末日までに編集長にその旨を申し出、原稿の締め切りは原則として、5月末日とする。査読による修正の再提出期限は編集委員会が定める。

6. 原稿の提出

(1) 完成した原稿1部と電子ファイルを編集長へ提出する。

(2) 原稿はワープロで作成し、フロッピーディスク等を添えて提出する。

7. 論文等の審査及び掲載の可否

(1) 編集委員会は、審査の結果、必要ならば原稿の修正を求めることができる。

(2) 編集委員会は、審査の結果等に基づいて掲載の可否を決定する。

8. 校 正

校正は執筆者の責任において行い、原則として再校までとする。

9. 掲載及び別刷りの経費

(1) 掲載に要する経費は原則として無料とする。

(2) 別刷りを希望するものは編集長にその旨を、必要部数とともに申し出る。別刷りの費用は希望者が負担する。

(3) 執筆者には掲載号を1部進呈する。

10. 出版権利用の許諾

投稿者は、モンゴル研究会に対し、当該論文に関する出版権の利用につき許諾するものとする。

11. 論文等の電子化及びコンピュータ・ネットワーク上での公開

(1) 論文等は、電子化し、ホームページ等を通じてコンピュータ・ネットワーク上に公開することがある。

(2) ただし、執筆者が電子化・公開を希望しない特別の理由を有する場合は、編集委員会に申し出て、当該論文の電子化・公開を拒否することができる。

＜執筆要領＞

1. 原稿について

(1) 原稿用紙はA4を使用、1ページ＝40字×40行とする。

(2) タイトルの後には執筆者名のみ記し、所属、肩書きなどは一切記入しない。但し海外からの投稿には、末尾に(内蒙古大学)などのような情報をふる場合もある。

(3) 原稿にはタイトルおよび執筆者名の英文表記を添える。

(4) 本文の形式

本文は横書きとする。特に希望のない場合は、章立ての形式を右の通りとする。

(5) 図表

図表を入れる場合は、図表のタイトルに通し番号(図1、表1等)を付ける。本文中での図表の位置を明示する。

(6) 註・参考文献

1) 註は文末註の形式とする。

2) 参考文献リストの書き方は原則として下記の通りとする。

①日本語文献

論文の場合

著者名(発行年)、「論文名」『掲載雑誌や本の名前』雑誌号数、発行所か出版社名

例) フフバートル(1999)、「『内蒙古』という概念の政治性」『ことばと社会』第1号、三元社

本の場合

著者名(発行年)、『本の名前』発行所か出版社名

例) 坂本忠(1974)、『辺疆をめぐる中ソ関係史』アジア経済研究所

新聞の場合

『新聞名』(何年—何年)

例) 『朝日新聞』(1995—2001年)

②モンゴル語、ロシア語、英語など欧文文献の場合

論文の場合

著者名(発行年)、「論文名」『掲載雑誌や本の名前』掲載号数、発行所か出版社名

本の場合

著者名(発行年)、「本の名前」発行所か出版社名

例) П.Шагдалсүрэн(2000) “Миний мэдэх маршал Х.Чойбалсан Улаанбаатар

* [] でくくって翻訳する場合もある。

例) [Шагдалсүрэн (2000), 『私の知るチョイバルサン元師』ウランバートル]

新聞の場合

“新聞名”(何年—何年)

例) “Үнэн” [ウネン モンゴル人民革命党発行紙] (1945—1996年)

③中国語の場合

基本的に、日本語文献と同じ。

例) 張大宣(1983)、『外蒙古現代史』第4冊、蘭溪出版社、台湾

(7) 提出された原稿は返却しないものとする。

2. 原稿の提出

上記の原稿とともに、原稿のファイルをいれたCDまたはフロッピーディスクを提出する。文書ファイルと図表ファイルは別々のファイルにいれ、文書ファイルはテキスト形式(.txt)、リッチテキスト(.rtf)、あるいはワード(.doc)とし、図表ファイルは、原則エクセル(.xls)とする。その他の場合および、写真を画像ファイルで提出する場合は編集委員会と相談する。また、使用ソフトのバージョンも明記する。プリントアウトした図表の原稿を必ず添える。モンゴル語についてはモンゴル語が正しく打ち出された原稿、テキストファイルの他に、独自の入力方式による場合はモンゴル語フォントを明記し提出する。必要な場合、モンゴル語のフォントも送付する。

はじめに(序、序文など)

I

1.
(1)

II

・
・
・

おわりに(結び、結論など)

編集後記

◇日本の国技である相撲界で、東西両横綱にモンゴル人力士が揃い、その強さに圧倒されました。一方で、ケガの療養中に母国モンゴルでサッカーを興じた横綱・朝青龍を巡り「横綱の品格」が問われるできごと。

◇さまざまな紆余曲折を尻目に、モンゴル語科卒仲間と「だって、モンゴル人だものねえ」の一言で結論付けようとしたのは、いささか軽率かもしれませんが、あながち的外れではないと思っています。むしろ、そう思えたことは、モンゴルを学んだことで、知らず知らずのうちに、私たちの中に異文化理解の基が築かれていたんだなあという実感に繋がりました。

◇知っていると、その分だけ、多様な局面からの見方ができる。些細な誤解や不理解から簡単に人を傷つけてしまっているように思える今の社会に、必要不可欠な要素なのではないかと感じさせられました。

◇今号は、いつもより投稿本数が少なく、冊子になるかどうかの検討から始まりましたが、仕上がってみると、過去、現在、未来を網羅し、さまざまな角度から積極的にモンゴルを紐解いた斬新な一冊に仕上がったと思います。それぞれの、‘もっと知りたい’ ‘もっと探りたい’ という想いの結晶である本誌が、広く、手に取ってくださる方お1人お1人の異文化理解の助けになることを願いつつ。

◇なお、今号の編集に当たっては、新しく導入したソフトとの取っ組み合いで、いつもより手間とご苦勞をおかけした吉本さんに、特にお礼を申し上げたい。

(山本裕子)

モンゴル研究 第24号

定価 1,000円

2007年3月31日発行

編集・発行 モンゴル研究会

〒562-8558 箕面市粟生間谷東8-1-1 国立大学法人大阪大学世界言語
研究センター今岡良子研究室気付

TEL・Fax 072-730-5262

e-mail: imaoka@world-lang.osaka-u.ac.jp

振替口座：00950-3-29906 モンゴル研究会 代表小貫雅男

制 作 アルド書店

〒631-0806 奈良市朱雀5-1-1, 60-101

印 刷 株式会社 国際印刷出版研究所

MONGOL-KENKYŪKAI(the Society of Mongolian Studies,Founded in 1970)

c/o Imaoka's office, Osaka UNIVERSITY, Research Institute for World
Languages.Aomatanihigashi 8-1-1,Minoo-shi,Osaka 562-8558 Japan.Giro
account:00950-3-29906 Mongol-Kenkyukai.

MONGOL-KENKYŪ

Journal of Mongolian Studies

No.24

CONTENTS

Mar.2007

Articles

- Digitalization of Natsagdorj's *Kharankhui Khad*..... *Yutaka SHIBAYAMA* 2
- A study of “tūleši”
- An Approach from Cultural Anthropology- *SAINCHOKT* 10
- What did the Enkhbayar Administration bring in Mongolia? :2000-2004.....
- *Muneyuki MURAI* 20
- Transformation of Mongolian Minority's Society in Inner Mongolia -second part-
- An Analysis of Governmental System of the People's Republic of China-
- *Ikkān DOI* 29

Feldwork Report

- A Local Residents' at the 3rd Horoo in Songino Khaikhan District in Ulaanbaatar and
- NGO “Gender Center for Sustainable Development” in 2007
- *Ryoko IMAOKA*..... 56

Members' page

- Our Days in Mongolia *Masako ONO* 64

Activitiy Report..... 67

Edited by

MONGOL-KENKYŪKAI

Osaka Japan